

目 次

幼稚園

第1分科会 ひとりひとりを伸ばす保育

- 集団の中でひとりひとりが生き生きと活動することを求めて 兵庫県 谷内幼稚園
— 園外保育を中心としたグループ保育の実践 — 杉本純子
- ひとりひとりが主体的に遊びに取り組むための指導 兵庫県 神大附属幼稚園
— 自ら選んで行う経験や活動 — 奥山登美子
- 仲間の中で意欲的に遊ぶ子どもをめざして 兵庫県 小宅北幼稚園
宮本育子

小学校

低学年 第2分科会 合科指導

- 子どもの学習意識の流れに沿った合科的な学習指導 兵庫県 峰相小学校
松尾佳信

低学年 第3分科会 学級づくり

- 何でも言える学級づくりと話し方 兵庫県 小宅小学校
古寺真理子
- 個を生かし、全員参加の学級づくり 兵庫県 神野小学校
高橋美美子
- 豊かな心情を育て、自己実現をめざす教育活動 兵庫県 城陽小学校
— 個を生かす集団を求めて — 岩田好

中学年 第4分科会 課題設定

- 課題への取り組み 滋賀県 五個荘小学校
— 小学校3年 算数科「かけ算のひっ算」の指導を通して — 福島千代子
- 小学校3年社会科における課題設定についての一考察 徳島県 千松小学校
杉本昌弘
- 課題設定へのとりくみ 愛知県 味美小学校
— 社会科 見学学習を通して — 田本安広

中学年 第5分科会 学習の質を高める話し合い

- 学習の質を高める話し合い 兵庫県 城南小学校
— 意欲的に課題に立ち向かい、自己実現をめざす子の育成 — 山下美佐子

高学年 第6分科会 思考力を育てる学習方法

- 思考力を育てる学習方法 愛知県 北城小学校
加藤淳二

高学年 第7分科会 評価の工夫

- 評価の工夫 評価の結果を生かすために 愛知県 千両小学校
丸山正克
- 授業改善と評価 広島県 豊小学校
土井紀美子
- 評価の工夫 兵庫県 龍野小学校
— プリテスト・ポストテストの方法による評価の有用性 — 八瀬典喜

第16回 全国バス学習研究集会

提 案 要 項

(幼・小・中・高 校)

期日 昭和56年11月13日(金)・14日(土)

会場 兵庫県加西市立北条小学校

主催 全国バス学習研究会
兵庫県加西市立北条小学校
兵庫県加西市教育委員会

後援 兵庫県教育委員会
兵庫県加西市
兵庫県小集団学習研究協議会

幼稚園 第1分科会 ひとりひとりを伸ばす保育

- 集団の中でひとりひとりが生き生きと活動することを求めて 兵庫県 谷内幼稚園
— 園外保育を中心としたグループ保育の実践 — 杉本 純子
- ひとりひとりが主体的に遊びに取り組むための指導 兵庫県 神大附属幼稚園
— 自ら選んで行う経験や活動 — 奥山 登美子
- 仲間の中で意欲的に遊ぶ子どもをめざして 兵庫県 小宅北幼稚園
宮本 育子

小学校

低学年 第2分科会 合科指導

- 子どもの学習意識の流れに沿った合科的な学習指導 兵庫県 峰相小学校
松尾 佳信

低学年 第3分科会 学級づくり

- 何でも言える学級づくりと話し方 兵庫県 小宅小学校
古寺 真理子
- 個を生かし、全員参加の学級づくり 兵庫県 神野小学校
高橋 美美子
- 豊かな心情を育て、自己実現をめざす教育活動 兵庫県 城陽小学校
— 個を生かす集団を求めて — 岩田 好

中学年 第4分科会 課題設定

- 課題への取り組み 滋賀県 五個荘小学校
— 小学校3年 算数科「かけ算のひっ算」の指導を通して — 福島 千代子
- 小学校3年社会科における課題設定についての一考察 徳島県 千松小学校
杉本 昌弘
- 課題設定へのとりくみ 愛知県 味美小学校
— 社会科 見学学習を通して — 田本 安広

中学年 第5分科会 学習の質を高める話し合い

- 学習の質を高める話し合い 兵庫県 城南小学校
— 意欲的に課題に立ち向かい、自己実現をめざす子の育成 — 山下 美佐子

高学年 第6分科会 思考力を育てる学習方法

- 思考力を育てる学習方法 愛知県 北城小学校
加藤 淳二

高学年 第7分科会 評価の工夫

- 評価の工夫 評価の結果を生かすために 愛知県 千両小学校
丸山 正克
- 授業改善と評価 広島県 豊小学校
土井 紀美子
- 評価の工夫 兵庫県 龍野小学校
— プリテスト・ポストテストの方法による評価の有用性 — 八瀬 典喜

中学校・高等学校

学習指導 第8分科会 学力の向上態度の育成

- 生徒の主導性を生かした柔道指導の検討
— バズ学習の教育心理学的研究におけるアクション・リサーチの一環として — …… 三重県 朝明高等学校 伊藤 三 洋
- バズ学習による知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな生徒の育成 …… 愛知県 東部中学校 林 敏 明
— 班活動を通じた学習集団づくり —
- 学力と人間関係 …… 兵庫県 白鷺中学校 高 磯 忠 実
— 学力の向上と態度の育成 —
- 学力を高めながら人間関係を深める態度の育成 …… 兵庫県 北条中学校 森 田 薫

生活指導 第9分科会 学級集団づくりと生徒指導

- 学級集団づくりと生徒指導 …… 兵庫県 龍野西中学校 古 林 伸 也
- 生徒指導とバズ学習 …… 兵庫県 安室中学校 松 田 福 義
- 規律ある集団の中で、個がめざめ高まる生徒指導 …… 兵庫県 小野南中学校 石 野 茂 三
- 生徒指導への取り組み …… 兵庫県 北条中学校 井 上 博 明

新教育課程

小学校 第10分科会 創意ある教育活動の実践

- ゆとりと充実をめざすグループ活動の指導 …… 兵庫県 中崎小学校 川 崎 優 子
- ひとりひとりが豊かな人間性と確かな学力を身につける教育活動 …… 兵庫県 余部小学校 田井東 浩 史

中学校 第11分科会 ゆとりの時間の計画と実践

- ゆとりの時間における町別バズ学習の計画と実践 …… 兵庫県 高丘中学校 賀 集 日出美
- ゆとりの時間の計画と実践 …… 兵庫県 白鷺中学校 道 上 昌 幸

障害児教育 第12分科会 障害の程度に応じた教育方法の工夫

- ボランティア活動を通しての障害児理解の指導 …… 愛知県 勝川小学校 佐 橋 修 吾
- 障害の程度に応じた教育方法の工夫 …… 兵庫県 飾磨西中学校 梶 原 由 紀子
— ちえおくれの子とバズ学習 —
- 障害の程度に応じた教育方法の工夫 …… 兵庫県 英賀保小学校 竹 上 道 邦

同和教育 第13分科会 同和教育の深化充実

- ひとりひとりを見つめる地区教育事業の展開をめざして …… 兵庫県 林田中学校 山 口 明 彦
- バズ学習と同和教育の統合をめざして …… 広島県 豊高等学校 校区教育推進協議会


~~~~~

# 幼稚園・小学校の部

~~~~~

研究主題

集団の中で 一人ひとりが生き生きと活動することを求めて

— 園外保育を中心としたスループ保育の実践 —

姫路市立谷内幼稚園

杉本純子

1 はじめに

自己中心的で個々ばらばらの幼児も、同年令の子とむたらの集団の中で生活するうちに、仲間と協力することを覚えていく、そして一人では出来ないことでも仲間と一緒にがんばることによって出来るよさを感じはじめる。その中で、人間の暖かさや思いやりの心が育らはじめる。

又、幼児は、集団の中で生活するうちに、その集団に入る努力を通して、自分を独立させることも覚えて行く

この様に、幼児にとって、個人としての発達と、集団としての発達は、絡み合っではじめて成長していく。

そこで、教師は、集団の中でいかに、個人をのびせし、集団を高めていくのが大きな課題と責任であろう

2 テーマ設定の理由

〈地域性から〉

- ・姫路市の最東部に位置した純農村地域で、自然環境に恵まれている。交通量も372号線を除くと少ない。
- ・校区自体は広いが、町と町の距離が遠く、他町との交流が少なく、各町とも子どもの数も少ない
- ・祖父母との同居の家庭が多く、両親共働きが半数以上あり、そのため祖父母とのまじわりが多い。

〈幼児の実態から〉

- ・素直であるが、受身的で、大らかさに欠ける
- ・集団の中では自分の思いが十分に表されず、そのため友だち同士の間柄が浅く、あそびに発展性がない。

〈園の実態から〉

- ・一年保育児50名の小規模園であるため社会性にとほしい

以上の様な実態から、幼稚園では、スループ活動の中で

- △自分の思いや願いが素直にいえる子
- △友だち同士力を合わせてあそびにとりくめる子
- △物事を最後までやりとげる子 ともかしてとりくみを考えた。

3 とりくみ

園外保育を生かした保育 ・週一回校区内の神社 公園へ出かける
 ・自然を生かしたあそび→園内集団あそびへ

- ・ひとりひとりを生かしたグループ活動を核にして、園全体の仲間意識を高める
- ・校区全体を知り、他の知らない町へ親しみをもたせる
- ・自然に目をむけさせ 大らかさや、神秘性を体で感じとる
- ・解放感の中で、自分の思いが表現できる

月	単 元	園 外 保 育	園 内 集 団 あ そ び	グループ 編 成
4	春の自然	・あせ道(花つみ 兜の草とり) ・山崎苔地蔵(花つみ すもう)	・花や蝶 蜂になつてあそぶ ・すもうごっこ	好子子2人組 ↓
5	戸外あそび	・八重畑山公園(おけのぼろ)	・遊具を使つてあそぶ スベり台の逆のぼろ(つな) ・名前のあそび	
9	秋の虫と草花	・八重畑山公園(虫とり、ひんがし) ・山崎苔地蔵(虫とり、すまうごっこ)	・虫とりごっこになつてあそぶ ・運動会ごっこ	意図的グループ 4人組 (年長3人組) ↓
10	運動会	・大倉プラザ(おけのぼろ)	・運動会ごっこ	
10	戸外あそび	・小原くり園(くりひろい) ・八王子神社(2グループに別れて) ・豊富町若屋毘沙門天 文子ハイキング (簡単なオリエンテーリング) ・山田町藤の木公園へ遠足 (2班に別れて山のぼろ)	・絵やサイコロであそぶ ・伝言あそび(話す、聞く) ・競争あそび(グループ別競争) ・遊具を使つてあそぶ ・指示や標識に従つて (文印、色、地図) ・グループ内で役割を守る	
11	秋の野山	・八王子神社(探検ごっこ) ・大成神社(宝探し)	・山のぼろごっこ ・探検ごっこ ・グループで相談(たのび)	意図的グループ 4人組 (同(程度)) ↓
3	春を待つ	・小原新池(フリスビーあそび) ・加西法華山 親子ハイキング (絵のち、文字のちあそび) (宝探し)	・すくすく、おぼろあそび ・フリスビー、絵のち、作のち	

4 実践例 秋の野山 (探検じっこ)

- ねらい. 1. 秋の豊かな自然の中で、反たらと協力しながら一つの目標に到達
 2. 意欲的な体験をしながら、グループでの相談や助け合いをする中で
 3. 未知なものへ夢を広げることにより、創造性を豊かにしたい。

園 外 保 育

清水八王子神社へ (2グループに別けて)

豊島町 岩屋毘沙門天へ (又子へキッズ 簡単なオリエンテーリング)

- ・ 4Kの道のり、支親らの方へ渡りほほ子とむらにはえぬ歩目的地へ
- ・ 子とむらにけのオリエンテーリングである

{各グループごとに地図を見ながら、4枚のコースを採り組み合わせながら園へ登る

- ・ 地図に3しに石燈ろうや、お地蔵さんや貝音に教えるながら、確実にたどって行くグループ
- ・ たたうらうら(アールグループ) 教師の度と聞かせる、ヒントを各グループ
- ・ わらなく、一から出たアールグループ はけり(アールと懸命に歩く色々に一一人一枚巻紙をまつことを約束して、何回も集り相談している。又との子も目的をまつているので真剣である

○ A君もようの人ほめては、A君は心臓の要く園外保育の途中はいつもアールグループの子も変てこ(アール)入同時にみんなど話し合っでアールのグループも変てもみんなど変てこ(アール)最近A君(アール)に意欲もてて(目的地には変えぬに行動次第)に(アール)グループ内も活発に動いてきた

○ 又と子のゲームはグループごとに行うけんあそびや、空理のたの(アール)に(アール)いっちは町ごと(アール)の少ないとあそび人らもみんなど交流がよくなると変てこ(アール)である

山田町 藤の木公園へ遠足 (2班に別けて山のぼり)

山崎八王子神社へ (指示されたものを探す 教、形)

5. 反省と今後の課題

大自然を大いに活用し、ダイナミックなあそびを展開しながら、あわせて園内にとらして、自分の役割や責任を果たすことにより、あそびが一層楽しくなること
 しかし反面、あそびが受身的で、幼児達から考えた、工夫したりすることが少
 達が主体的にとりくめる環境の場の工夫や、教材教具の開発、発問の工夫をすると
 となるう

研究主題

「ひとりひとりが主体的に遊びに取り組むための指導

—— 自ら選んで行う経験や活動 ——」

神戸大学教育学部附属幼稚園

奥山登美子

1. はじめに

教育目標に向って、地域性や幼児の実態をふまえながら、教育内容を選択し配列して、望ましいと考える教育課程を編成していくわけであるが、本園では、その内容を大きく、①保育者の意図的に設定する内容と、必要な環境はある程度整えるにしても、②幼児自らに選ばせる内容とに分けて考えている。

②幼児自らに選ばせる経験や活動は、幼児の実態から考えて、また幼児教育のねらいから考えて、必要欠くことのできない遊びである。ここにおいて、幼児に存分に遊びの面白さ、楽しさを味わわせながら幼児自らやっている、自分でできるという自信、意欲、主体性といわれるような側面の芽生えを培っていきたいと願う。しかし、この遊びは環境づくり、遊具用具類の準備、場づくりなどを遊びの基盤として十分に検討しなければならないこと。それにもまして、保育者の働きかけを、ただ子どもの自由にさせてまかせっきりにするのではなく、遊びの進展や個々の幼児の特性にあわせて適切にしなければならぬこと等、意図的な遊びを一言に展開させる以上に、行届いた指導上の配慮が必要となってくる。

そこで、本園では、3才から5才児までの自由な遊びの内容の選択と、一日の実践の中でのある程度の位置づけを考えると共に、幾つかに分かれて同時に展開される自由な遊びの指導の目安としてのねらいを設定している。これによって経験や活動そのものは内容によって具体的に異なっているが、保育者は教育のねらいとしてある方向を明確にもつことになり、全体の教育方針や、子どもの発達に無理のない指導を行うことができると考えている。

2. 自ら選んで行う遊びにおける、4. 3才児の実態とそのねらい

①3才児について、3才児は入園してまだばかりで、情緒も不安定でなかなか遊びに入りにくく、遊具・用具の扱いかたも慣れていない。また一人遊びが主で、先行経験からその実態が非常に異なる。そこで、その個人差をよく把握しながら、幼児の意欲や自発を促したり、重視したりしながら、安心して遊べるようにしていきたい。

- ② 4才児について、4才児は、ある程度道具・用具の扱いにも慣れ、活動的になるが、興味の対象がばらばらで、いろいろなものに興味を示すが長続きしにくい。そこで、遊びにまかせてその面白さを味わわせたり、物事への取り組みの態度を育てたりしたい。又、友だちと遊びたいという欲求も出てくるので、遊びの中で、人間関係を育てていきたい。
- ③ 5才児について、5才児は、ある程度物の見方や考え方に客観性があり、自ら納得して課題活動に取り組む傾向にある。その上、友だちとの人間関係も深まりつつある。そこで、共通する課題をもって遊びにまかせたり、人間関係を広げたりしていきたい。

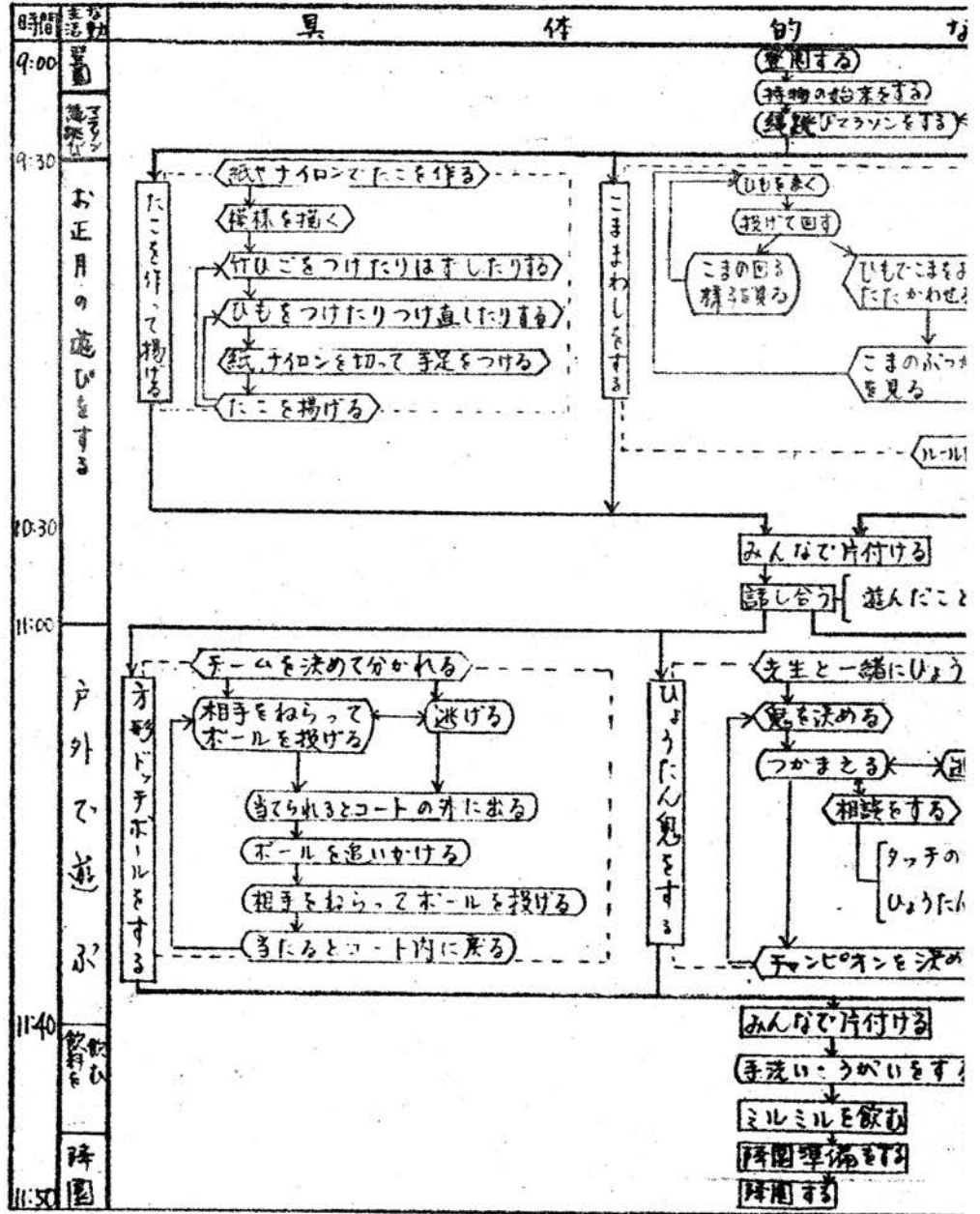
上の実態から次のようなねらいを設定している。

年齢	月	日	ね ら い
3	7	1	安心して遊ぶことができる
	9	2	自分の好きな道具や用具をみつけて遊ぶことができる
	12	3	自分の好きな遊びをみつけて遊び、使った道具や用具を片付けようとする気持ちをもつことができる
	1	3	自分の好きな遊びを楽しんで遊ぶことができる
4	4	1	好きな遊びを選び、それに必要な道具や用具を使って遊ぶことができる
	7	2	友だちとのかかわりあいをもちながら遊び、それに必要な準備片付けができる
	9	3	好きな遊びを発展させながら、好きな友だちとの遊びを楽しむことができる
	12	4	好きな遊びを楽しみながら、いろいろな友だちとのかかわりあいを深めることができる
	1	3	好きな遊びを楽しみながら、いろいろな友だちとのかかわりあいを広げることができる
5	4	1	好きな遊びを楽しみながら、いろいろな友だちとのかかわりあいを広げることができる
	7	2	自分なりの課題意識をもちながら、いろいろな友だちと一緒に遊びを発展させることができる
	9	3	共通する課題に向けて、いろいろな友だちと協力しながら遊ぶことができる
	1	3	いろいろな友だちと一緒に遊びの満足感を味わうことができる

3. 実践例

表1. 5才児 さくら

1. 日 時 題 1月27日(木)
2. 主 題 お正月の遊びを楽しもう (さくら1組 男17名 女18名、さくら2組 男)
3. ねらい ①自分選で工夫して作ったもので遊ぶ楽しさを味わわせる
②友達と相談しながら新しいルールを決めたりそれらをまったりする態度
4. 展開



組実践

教諭 奥山登美子 堀江真理子

117名 女12名 計(19名)
 (台養)

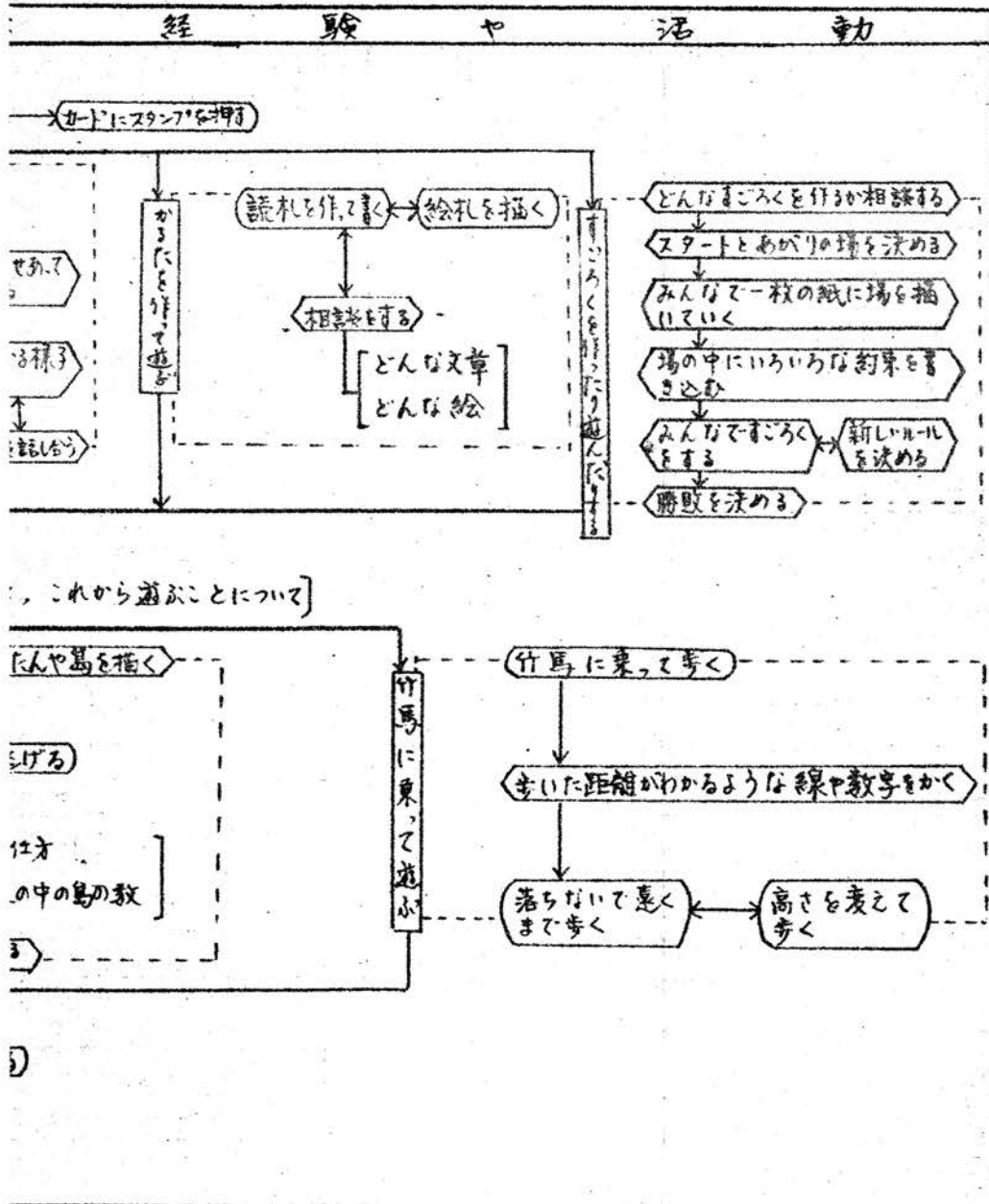


表2

遊びに反対

時間	① F男 (kニ)	② T男 (kニ)	③ I男 (ニキ)	④ A男 (フニク)
09:35				
40	なまこわ マソニ	T=作り 熱中	=3回し	不明
45		100子が+20 相対しな		
50	なまこわの子 が減。マ 自分も他に 移る)の進行	友だちが 見えない	TVの 1:5-2	
55		T=あげ	=3回し	
10:00		小学校の 2階上15分		教室内 ふさふさ
05	友だち T=作り 見えない			
10		新しいT=作り 工夫している	2回し わかる	沼田と フニク 遊び
15	T=作り		=3回し 作戦タイム	TVの前で あそび
20		外へ出る →	=3回し	外へ出て フニク 遊び
25	T=見せる	T=通し に床 →	や-水	
30	T=作り	T=通し 2階出る	くっ箱の中 =3回し	
35	T=あげ			かたづけ

グラフは ⑤ 全く別の事をしていて 作業に興味をもちない
 ④ 作業の途中での中断
 e.g. 先生に見せにく
 遊び方を変える
 ⑥ 作業

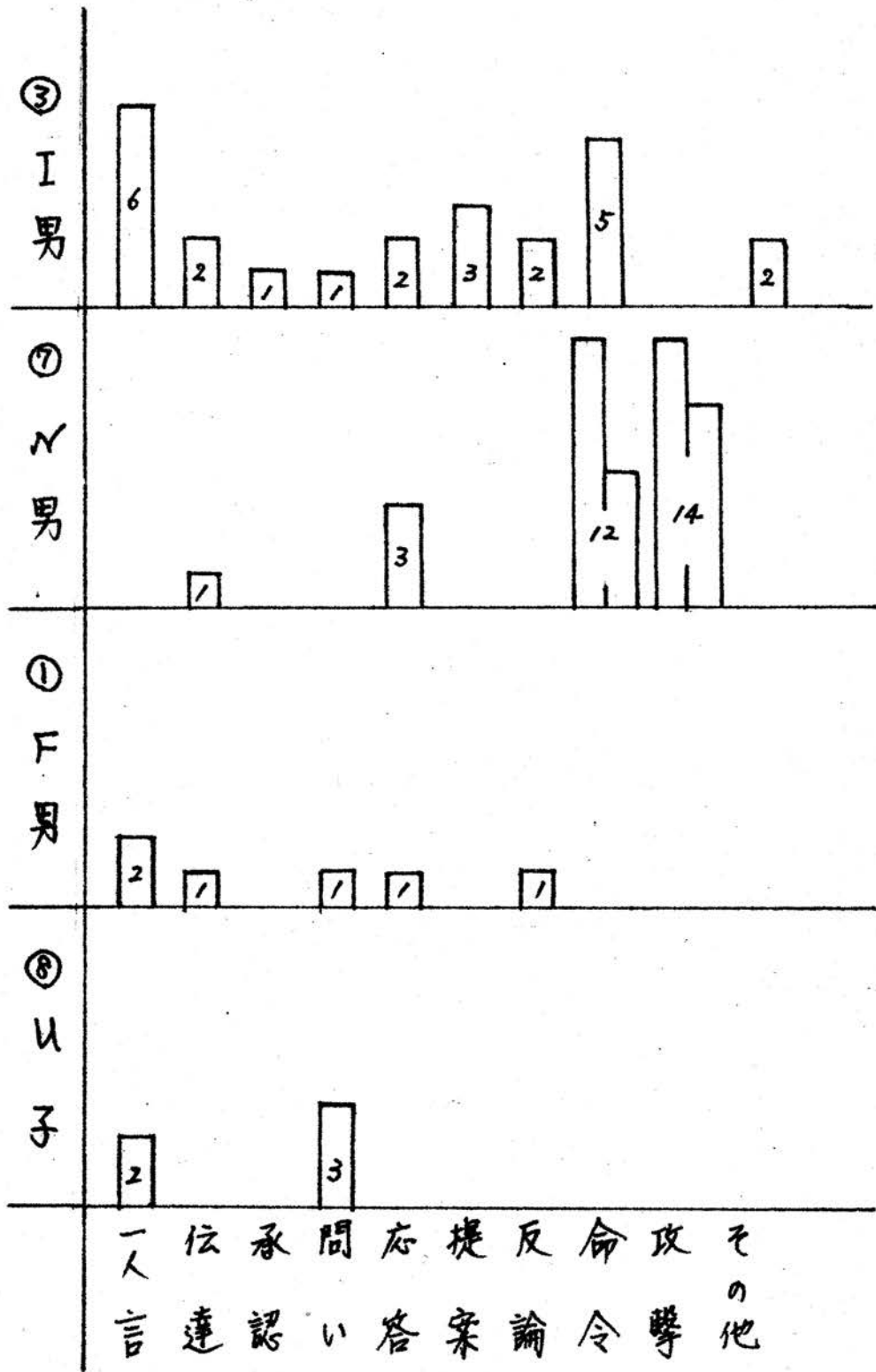
子供の状態

(記録者評価)

① T子 (す=3<)	② N子 (か=た)	③ N男 (す=3<)	④ U子 (か=た)
<p>す=3<作り</p> <p>と=3<か き=2<い</p> <p>1人もと と=3<作り</p> <p>回りの話</p> <p>す=3<作り</p> <p>T=見せ</p> <p>2人で=3<遊び</p> <p>バラバラ遊び</p> <p>か=た作り</p> <p>か=た</p>	<p>カルタ作り に 熱 中</p> <p>教室内 とび回りの</p> <p>か=た</p>	<p>氷とり</p> <p>す=3<作り</p> <p>T=説明</p> <p>す=3<作り</p> <p>す=3<遊び</p> <p>カルタや か=た 興味</p> <p>か=た</p> <p>す=3<遊び</p> <p>か=た か=た 作=3<見</p>	<p>友だちと 相談</p> <p>カルタ作り</p> <p>回りの話 か=た と話す</p> <p>T=見せ</p> <p>カルタ作り</p> <p>T=見せ</p> <p>カルタ作り</p> <p>友だちと話す</p> <p>カルタ作り</p> <p>T=見せ</p> <p>カルタ作り</p> <p>ホニヤリ</p> <p>カルタ作り</p> <p>か=た</p>

に熱心である

表3 発言内容カテゴリー分類



4. おわりに

幼児は、その環境、場、その他の諸条件によって、非常に変化しやすく、その指導もケースバイケースでなければ進めにくいものである。その上、それぞれの生活に即した総合的な扱いでなければならぬこともあって、その指導はむづかしい。しかし、とむかく具体的な幼児の実態を採りたいと考える。

表1の実践は、5才児が、それぞれのやりたいお正月遊びを自分で相談したり、工夫したりしながら展開した例である。その中で、頃から、何事にも積極的にリーダー的な子、やることは意欲的だが、だち関係のうまくいかなかったり、意欲もないし、だち関係もないような特徴のある幼児を抽出し、その言動の個人記録をとった。それを整理したのが、表2、表3である。

表2、遊びに対する意欲の状況というのは、どれだけ意欲的に遊びに取り組んだかを見ようとしたもので、抽出見の中で積極的な②T男③I男、④ふろ ⑦N男、④ひろらは、作業の中断は何回もあるが、自分の遊びに意欲的に取り組み、自分で工夫して遊びを私展させ、教師が入る余地がない程である。また、消極的な①F男④A男⑤T男らも、自分の遊びを見つけ、意欲的に取り組もうとしている様子が多くみられる。

表3、発言内容カテゴリーというのは、ことばの面から、主体性や、だちとのかかわりを見ようとしたもので、個々の差はあるが、一人言が少なく、伝達、承認、問い、応答のように、だちとのかかわりがあると思われるものや、提案、反論などのように、主体的にその遊びに取り組んでいると思われる内容がふまされている。

このように、5才児の3学期になると、クラス全体が教師のグループに命かけて、自分で相談したり工夫したりして遊びに取り組もうとする態勢が育ってきているようである。これは、あの情緒不安定な個人差の大きい3才の時期に、思いっきり好きな遊びを楽しませたと、4才になって、だんだんだちと一緒に遊びたいという要求の出てきた幼児に、遊びを楽しませながら人間関係を育てていくことを重視したことで、そして、自分で納得して物事に取り組みたいという積極的な態度が育ってきた5才児に、共通の課題をもたせて、遊びをさせたり人間関係を広げたりしたことなど、幼児の発達に応じて段階を造って指導してきたことがよかったのではないかと考える。

このように、先づ自分で納得のいくように遊びに取り組ませると、次に、だちとのかかわり合いを深めたり広げたりしながら、その中で話し合ったり相談したりして、遊びを作りあげたり展開させたりする態度の基礎を、丹念に育てていくことを、幼児期の教育の中で大切にしていきたいと考える。

消極的な幼児、人間関係のうまくいかなかった幼児などへの教師の働きかけのタイミング、グループの作らせ方など、問題は残っているが、今後、ひとりひとりの幼児の実態をよく把握し、その時性にあわせてよりよい指導を採っていきたいと考えている。

仲間の中で意欲的に遊ぶ子どもをめざして

龍野市立小宅北幼稚園 宮本 育子

1. はじめに

わが園は、すぐ面に鉄道線路があり、龍野市の中心部をなし、商業地域をひかえ、最も交通頻繁な市街地であるため十分な遊び場には恵まれていない。そのため子ども達も家に帰ってから外で遊ぶことが少なく体力的にもひ弱である。思いきり身体を動かして遊んだ経験の少ない子ども達は、はじめの集団生活では、じっと椅子にすわって友だちの遊びを傍観していたり何をするにも意欲がなく教師の指示を待っていることが多い。

2. 設定の理由

クラスの実態は、おとなしい子が多く、自分から何でもすすんでしたり、遊びを見つめる子が少ない。「外で遊ぼうね」と声を掛けても椅子から立ち上がる子は少ない。もっともっと元気一杯動き回る子にしたいと逞しい身体と豊かな心づくりを目標に仲間関係(社会性)を深めることをねらいとし、一人一人が意欲的に遊ぶよう心掛け実践してきた。

3. 実践例

(1) 集団遊び

4月当初、まず友達と親しむことを目標に、身体が触れ合う遊びを取り入れた。
・友達捜し……ピアノにあわせて自由に動き、2人組 3人組をつくる遊び。最初は友達に誘われるまでじっと立ったままの子や2人組になっていないのに座ってしまう子があった。しかし遊びのルールがわかってくるとスピードも出てきて自分から友達を捜す子も多くなってきた。「OOちゃん、XX君は まだ一人やで。」と友達に教える姿も見られた。

・2人組遊び……友達捜しで2人組になったあと2人で体操、じゃんけん遊び、手遊びなどをした。友達により親しみを持つことをねらいとしたが、手遊びなどは2人向き合っていると表情もにこやかで、はきり覚えていない子も向き合っている友達を見て覚えたり、2人で教え合ったりしていた。

てが終わると遊ぶ時の約束を話し合った。

① 順番を守る……したいところがあっても割り込みをせず 順番を守ること

② 危険なこととしない……友達を押したり、台の上でふざけたりしないこと

③ 友達のまねばかりするのでなく、違った遊びも考える

自由に遊び始めると子どもの好きなもの(はしご)に多くの子が固まってしまうダンゴ状態になってしまった。じっと様子を見てみると「どけどけ」と言て割り込む子、「押すな押すな」と言いながら友達を押している子が粉れていた。そこで又話し合いの場を持ち事前に話し合った約束を徹底させた。その後又自由に遊ばせると順番を待つことができ始めた。友達同志でも注意したり、教え合ったりしていた。自由に遊ぶと友達とのトラブルも多いが、そこから学ぶ仲間、友達とのかかわり方(社会性)も多い。体育遊びも技術を得ることだけでなく人間形成の一つの機会として仲間関係を大切にしたいと思う。

(4) リレー

運動会のリレー競技。一人でもなまけていたり一生懸命走らなかつたりすると大きく差がついてしまう。まづ組という一つのチームに対して一人一人をどう協力的な気持ちにさせるか、チームの和をいかに保つかが問題だった。そのためにはまずリレーのルールを知り、友達の走っている姿をしっかりと見ること、そしてこのリレーを通して自分の力を思いっきり出すことを身につけさせたいと思った。まず最初に男女対抗で走ってみた。すると自分が走ればあとはどうだろうとおかまいなしの子が多いのに驚いた。順番がきたから走る。走り終わるとすわりこんで砂いじりをしている。応援の仕方が全然できていなかった。そこで話し合いの場を持ち指導の手を加えた。友達の走っているのをしっかりと見て 追い越しそうになった時、追い越されそうになった時などは特に応援しようと約束した。リレーも回数を重ねると勝負もはっきりわかり、必死で走る子が増えたり、仲間同志 励まし合うことができるようになったが、勝負にこだわって ころんだ子や走るのが遅い子を責める子が出てきた。そこで話し合いをし約束事を作った。友達の中には走るのが速い子も遅い子もある。でも一人一人が一生懸命走っていればその努力をみんなで認め合おうと話し合った。そしてリレーのあとは話し合いを持ち、友達のいいところを認め合った。その際 チームとして頑張っていた面もとりあげるようにシグループが育つようにも心掛けた。

(5) おわりに

この半年間を振り返り、仲間の中で一人一人がどの程度意欲を持って遊んでいたかを思い浮かべると、友達の中にとけ込み、励まし合っている子は遊びも意欲的だったが、おとなしくて友達と接する機会の少ない子は指示に従っては遊ぶものの自分からすすんで遊ぶという態度には乏しいようだった。友達とともに励まし合っている子は、仲間意識が強く、仲間を支えられているという自信が遊びに対しても意欲につながっているようだ。そして仲間を育てることが結論的に技術、技能を伸ばすことになると思う。教師一人が技術、技能を教えるのではなく、仲間同志の磨き合いが大切なのだろう。子ども達一人一人が持てる力を出しきっているかどうかを正しく判断し、力を出しきれぬ助言、励ましを心掛け、グループとしての努力をほめる教師でありたいと思う。

研究主題

子供の学習意識の流れに沿った合科的な学習指導

提案者 隣相小学校 松尾佳信

1. はじめに

「1月9日、きょうは、あさからタコあげ大会です。タコをもって、そとに出てみると、とてもつめたいかぜがふいていました。うれしいです。だって、かぜがふくと、タコがよくあがるからです。おこめのとれた田んぼへ先生がつれていってくれました。糸をほどいて走ると、タコは、ものすごい力でほくをひっぺります。あんなにかるいタコなのに空にあがると、とてもおもくなります。ほくは、かぜがふいてくるほうに力いっぱい走っていたら、いねのきりかぶにつまづいてころんでしまいました。足にしもばしらがささっていました。……略」

この作文からもわかるように、低学年期的子供たちは、総合的に存在している環境の中で、総合的な活動をしていく。物事を分析的にとらえたり、関係づけてとらえたりすることができにくい。具体的な事物・現象を直接体験を通しては握っていく。即ち、この期の子供たちは、心身ともに未分化な状態にある発達段階なのである。

従来低学年期的指導をふり返ってみたとき、わたしたちは、次のようなことを謙虚に反省せざるを得ない。

- ・ これだけはおさえておかなければ……という余り、知識や技能の習得が授業の中心になったり、また、子供をぐいぐいと引っばっていく教師主導型の授業にもなったりしていた。
- ・ 学習の大部分は、机と椅子を使用し、同一方向を向く一斉授業が多かった。
- ・ 国語、社会、算数……というように、分科した教育課程で、1単位時間に区切られた時間割や生活時程になっているため、子供にとっては、時間的

にも精神的にも、ゆとりと充実感が得られなかった。

このような反省に立ち、全校的には「やる気をおしすすめる学習指導」を、低学年では「子供の学習意識の流れに沿った合科的な学習指導」を研究テーマにし、昭和54年度から実践研究に着手した。以後、実践をくり返す中で、必要に応じて軌道を修正しながら今日に至っている。

2. 本校における合科的な指導の基本的な考え方

- ・ 第3学年から分科した教科学習に入る前の学習として位置づける。
- ・ 現行の教科主義のたてまえは、そのまま残し、2つ以上の教科のねらいを効果的に達成できる場合に限って、子供の総合的な活動を通して関連的に指導する。そして、個性的で発展性に富んだ生きた学力を身につける。
- ・ 教材があるから教えるという教師主体の指導から脱却して、子供ひとりひとりの問題意識、活動意識によって学習を構成していく。
- ・ 配当時間は、子供にとって精神的にも時間的にも、ゆとりと充実感が得られるように配慮する。

3. 単元設定の観点

- (1) 社会科、理科、特別活動等、いずれかを核にし、指導していく際に他教科の指導内容をより効果的に実現するようにもり込む。
- (2) 子供の学習意識の流れを大切にし、連続的・発展的に追求していくことができるようにする。
- (3) 育てる、作る、探す、集める、見る、ゲームする等々、五官に訴える活動を通し、体験し、観察したことを、ことば・絵・動作等により表現する学習活動を無理なくもり込む。
- (4) 学校や地域の特性、季節や行事等を生かす。

4. 年間単元一覧表

上記の単元設定の観点をもとにして、第1学年と第2学年の年間にわたる単元を設定した。なお、原則として月/単元とし、年間にわたり片寄りのないよ

うに配列した。

月	第1学年 単元名	第2学年 単元名
4	<ul style="list-style-type: none"> 早く学校に慣れよう 春を見つけよう 	<ul style="list-style-type: none"> 花や作物を植えて育てよう
5	<ul style="list-style-type: none"> ほくらのこいのぼりを作ろう 学校探検をしよう 	<ul style="list-style-type: none"> 動くおもちゃを作ろう
6	<ul style="list-style-type: none"> 水遊びをしよう 	<ul style="list-style-type: none"> 動物園を作ろう
7	<ul style="list-style-type: none"> 夜店屋さんごっこをしよう 	<ul style="list-style-type: none"> 学年七夕祭りをしよう
9	<ul style="list-style-type: none"> 花や果物のしるで遊ぼう 	<ul style="list-style-type: none"> 秋の虫を飼おう
10	<ul style="list-style-type: none"> すごう川へ探検に行こう 	<ul style="list-style-type: none"> 秋祭りをしよう
11	<ul style="list-style-type: none"> 落ち葉で遊ぼう 冬を探そう 	<ul style="list-style-type: none"> パン工場を見学しよう
12	<ul style="list-style-type: none"> クリスマス会をしよう 	<ul style="list-style-type: none"> 楽しいクリスマス会をしよう
1	<ul style="list-style-type: none"> タコ上げ大会をしよう 	<ul style="list-style-type: none"> 手紙の旅を調べよう
2	<ul style="list-style-type: none"> 氷で遊ぼう 動くおもちゃを作ろう 	<ul style="list-style-type: none"> 寒さに負けず、元気に遊ぼう
3	<ul style="list-style-type: none"> おひな祭りをしよう 	<ul style="list-style-type: none"> 音で遊ぼう

5. 年間指導計画

この計画を作成していく手順として、まず、合科的な指導の中へ、どの教科の指導内容がどれだけ入ったかを、はっきりさせた。次に、入りこまない指導内容は、いつ、どの程度の時間で指導するかを検討していった。(計画表は、紙面の都合で割愛する。)

6. 実践例 「手紙の旅を調べよう」 第2学年

(1) 単元目標

- 郵便に携わる人々は、郵便物を早く確実に届けるように努めていることに気づく。(社会科)
- 文字の形に気をつけて、丁寧に書き初めをする。また、楽しかったトンド

祭りのことや郵便局を見学してわかったことを、順序をまちがわないように書く。(国語科)

- ・ カルタを作るとき、読み札に合わせて、できるだけわかりやすく焦点化した絵をかく。(図工科)
- ・ 友だちと仲よくトンド祭りやカルタ会をして遊ぶ。(特活)

(2) 指導計画

- ・ 「今年/年がんばること」を話し合い、短冊に書く ----- / 時間
- ・ 書き初め「北風に走る」をクレパスやマジックを使って書く --- 2 時間
- ・ トンド祭りを開く計画と準備をする ----- 3 時間
- ・ トンド祭りを開く ----- 7 時間
- ・ 親せきの人に手紙を書く ----- 2 時間
- ・ 郵便局を見学する ----- 3 時間
- ・ 郵便局を見学してわかったことをスゴロクやカルタにして遊ぶ --- 4 時間
- ・ 郵便について、いろいろ調べる ----- 2 時間

(3) 授業記録、(口頭で提案)

7. おわりに

本来、自然の事物・現象、社会的事象を子供たちに正しく観察させようとするには、そこには、必然的に言語的表現や絵画的表現等が伴うものである。これらの表現活動を行わせることによって、理科や社会のねらいが達成できるのである。わたしたちは、この表現活動を単に 社会科・理科のねらい達成の「手段」としてではなく、他の教科(国語、図工、音楽、体育)のねらいをも達成させるという「目的」と考えようとしたのである。

このような合科的な指導の実践を積み重ねてきた今、子供たちの学習の様子には、従来の教科学習と比べてみると、学習意欲、態度、観察、表現、仲間意識等々の面で、著しく良い結果が現われてきている。

しかし、その反面、一人ひとりの学習態度の評価、指導時間数、指導者の構え等のことで、問題点も多い。今後、これらの問題点を克服して、より望ましい合科的な指導をしていくために、いっそうの努力をしていきたい。

研究主題

何でも言える学級づくりと話し方

兵庫県竜野市立小宅小学校 古寺 真里子

1. はじめに

バス学習の研究や実践をはじめた動機

1. ひとりひとりの子どもを積極的に学習に参加させるために
2. 学力を伸ばす指導と、人間関係を高める指導との一体的な理論研究の結果から
3. 社会的人間育成の方法として

わたしの学級づくりの考え方

学級という社会生活の集団は、教師と子ども、子どもと子どもの人間交流の場であり人間関係の場である学級という生きた社会を創りだし、生活していくことが大切である。制度としての学級でなく、教師と子どもたちが互いに影響されながら、日々の成長と発散を自主的に創り出していくものとする。

こんな学級に

1. 代りよりどころ
2. 一人ひとりの個性を大事に
3. 誰もがリーダーに
4. 自由で多様な考えを
5. 誤りを大切に
6. 創る喜びを
7. 協力を
8. 厳しさと思いやりを
9. 人権を
10. 自律を

2. 実践

—実践1. 何でも言える学級づくりのために—

- 自由に言える雰囲気づくり
まらがいを受容するクラスに
友だちを認め、支え合うクラスに
- 楽しい学級に
歌、ゲーム、物語の読みきかせなど
- 自分の考えを言う場作りと意識化

○教科学習を通して

きめ細かい学習指導 落ちこぼしをつくらない努力

○同和学習を通して

○悩み願いを出し合って解決する場

学級会、終会で 日記の中から 一つの事、焦点をめてて調査

○「くらしの記録」を通して

子 親、教師のパイプ役 あいさつなど生活面の点検

○学級によりを通して

○ほかき通信

○学校での誕生会

○なかよし勉強

— 実践 2. 話す場の設定 —

○各教科の授業の中で

課題についての話し合い (個別 → グループ → 全体)

さし絵をみて 計算練習 など

○朝会、終会は当番制で

○毎朝、大きな声で生活原則を言う

健康はまず姿勢から

あいさつ、へんじははっきりと

よく見よく聞き進んで発表

勉強仕事は最後まで

友だち仲よく助け合い

○お話の当番

ペア、一人で前へ出て話す。

○楽しい活動を取り入れる。

ペアゲーム 劇化 人形劇

○朗読会

自作の詩 作文

◦ そうじバズ

◦ 終会時、となりの人のよいところを言い合う。

◦ 一日の発表を形にして刷ます。

くらしの記録の「一日二回以上発表」のところに()のシールをはる。

— 実践3. 話し方 —

◦ 聞ける子に

◦ 書ける子に

自分の考えを書く。意見が言いやすい。

◦ 話し合いの約束

	話し方	聞き方	バズ長の役目
一 二 年	1. みんなの方を見て話す。 2. みんなに聞こえる声で話す。 3. 最後まではっきり話す。 — です。 — ます。 — ました。 — と思います。 4. わからないことは たずねる。 — わかりません。	1. 話している人の目を見て聞く。 同じ考えのときはうなずく。	1. 仲間のせ話が出来る。 ◦ 作業がみんなできているか確認する。 ◦ 話し合うところや、考えるところなどメンバーに伝える。

日・週により重点的に指導していく。

バズ長は固定しない。

◦ 声のものさし

0の声	—	口をとじる。
1の声	—	となりの人と話す。
2の声	—	グループの人と話す。
3の声	—	教室の中で話す。
4の声	—	教室の中で号令
5の声	—	運動場で号令

3. おわりに

歩みのあと

- 楽しい学級に
- 全員が話せる子に

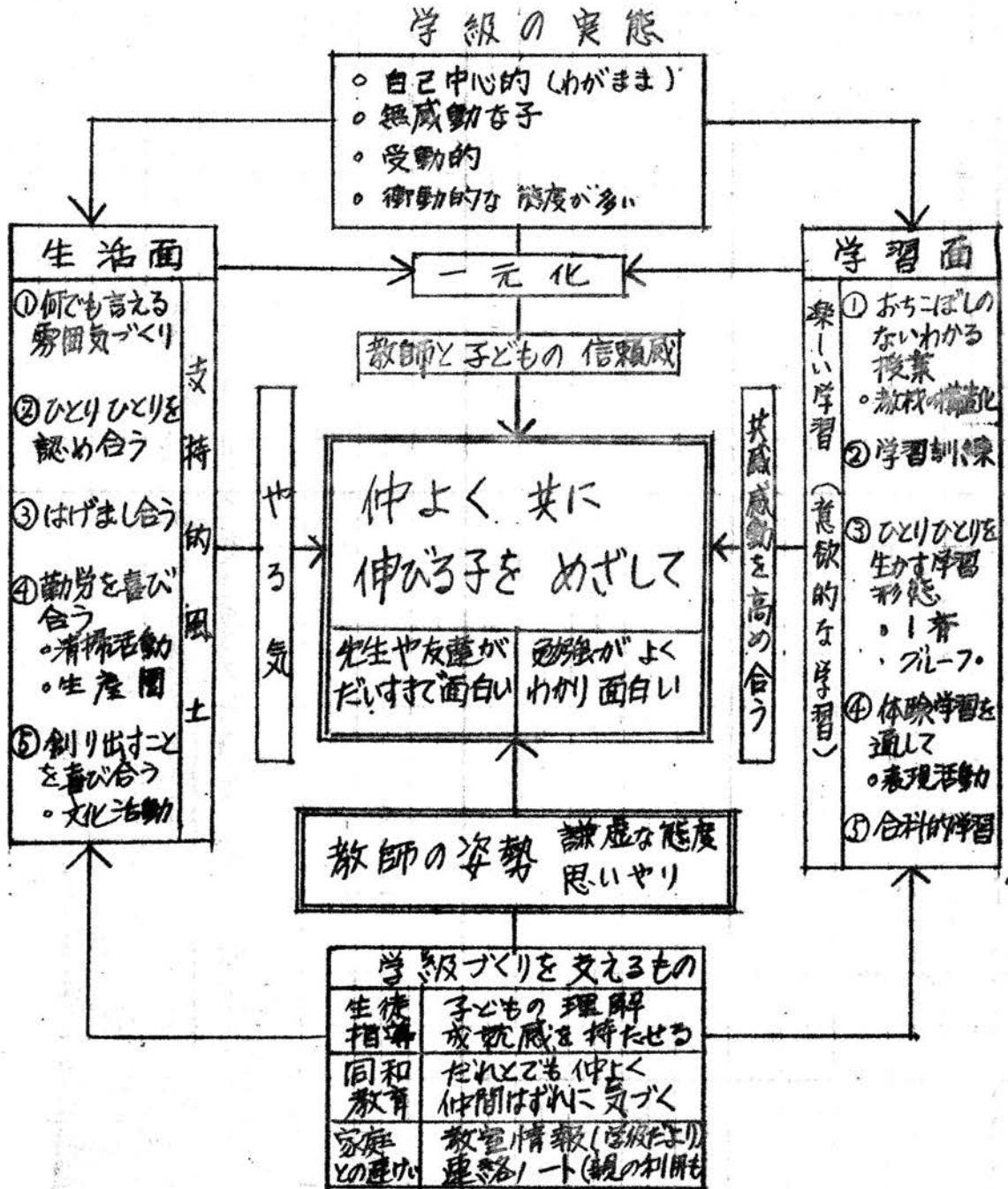
今後の課題

- グループバスの高まり
- 全体バスでの深まり

研究主題 力を生かし 全員参加の学級づくり (2年生)

加古川市立神野川学校 高橋 美美子

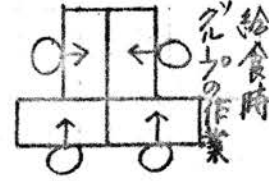
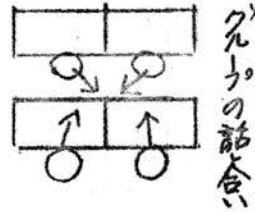
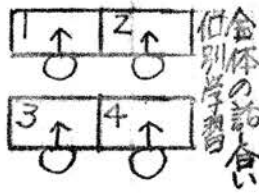
はじめに



(1) 何でも話せる 雰囲気づくり

① グループづくり

○ 話し合いの型



○ 話し合い

・リーダーの司会で話し合いを進めていく。そのうちに、司会者がなくても話し合いが進んでいく。

・発表の苦手の子から

「〇〇さんは、どう思われますか」と引き出してやる

・「ほくも同じです」でも、はじめから話させる。

謙虚な少教意見を大切にすると雰囲気づくりが話し合いを深める要因になる

○ グループのリーダーと仕事

・一週間おつ交代である。「今日の当番は」「3番」

・話し合いの司会、まとめ、全体の場へ出す。

・グループのお世話
 ・色々のものをくばる
 ・給食時の机の用意
 ・家庭学習のたしかめ

相手の立場が理解でき、協力的になる

○ 編成がえ

編成がえの達成目標

4人が仲よくなり、意見が出て、話し合いがはじまらなったら

↓
 ・給食時の楽しい雰囲気
 ・待活動の活発な動き

↓
 ・話し合いにすぐとり組める
 ・4人共意見が出せる

一学期間に2回かえる

○ 話し上手は聞き上手

・話している人の顔を見て聞こう（うなずいて聞く）

・質問、意見を出す

ボヤッと聞くのではなく意識をもって聞きのがさない姿勢

[2] 授業と授業外を通じて

① 共感しあう授業の中で (同一体験を生かして)

見学日程

5.6月 田ではたらく人たち

苗代のようい 一斉見学
 田植えのようい } 登下校時
 田 植 え }
 野菜づくり 一斉見学

土よう日かえる時まだ土が見えていたのに月よう日、土よたら田うえがもうきれいになってた。もうびっくりした

課題 田うえはらくたろうか
 子どもたちから出てくる課題で、
 活気のある、やる気のある学習が進む。

対之意見を大切に (学習に深まりを) 「お女さんしんどいゆとりで」「でも、3日ぐらいて、すんでしまうのに」

9月 こうじょうではたらく人たち

パン工場 } 一斉見学
 タオル工場 }

比較思考 (多面的な教材)

「田うえは日よう日がいいが、いいにエは、お休みや」
 「エはの人は、時間が決まっているけど、お女さんは朝早くからおくまで田んぼにいらして」
 「工場には、社長さんいらして」

11月 みせではたらく人たち

神野市場 家庭から見学
 スーパーマーケット 一斉見学

自主的に問題をみつけ解決していいこと
 お誕生 (ひとりひとりのたしかる歩み)

よく売れる魚屋をつくろう
 ・「2匹ずつ ざるに入れよう」
 ・「おつりのよういも、しよう」
 ・「ねだんもつけよう」「新しい魚をさがす」
 ・「やあやさんとよくにているな」
 ・「長ぐらや、ゴムのエプロンを 作るよ」

「みせやではたらく人たち」一単元を通して 学年で研究をはじめ。
 ・見学の下見 店との交渉、写真をとりスライドに
 ・VTRとりに、午前、6:30分より青果市場へ。(教師の感動が授業へ児童へ)

子どもたちの学級づくりに苦心している間に、気がついてみたら、教師集団ができていた。子どもたちの学級づくりも教師集団づくりも本質的にかわらない。教師がかわらないと子どももかわらない

2月 えきではたらく人たち

神野 ← → 滝野 電車に乗

学年全体で取り組んできた体験学習で
 学級づくり → 学年だより → 教師集団づくりと発展した。

② 清掃活動を通して

罰で 絶対 掃除をさせない

清掃が 終ると 右の表にしたがって 1つ1つ したしかめていく。(教師と当番全員)

全部できていたら、4重丸をつけていく。

時計と 右の表をにらみながら、掃除が進んでいく。15分頃になると、

「どこも ふいてあるか」「ゴミ とってあるか」「あとしまつ(窓しめ、バケツの水すて)してあるか」と 知らず知らずうちに、表にしたがって いそがしく働いている。

終了すると 1つ1つ したしかめながら、できぐわいをいっしょに見てまわる

くつ箱ふきのを忘れていほことがある。「一点 減点」

「チェックシート 今度 気をつけてようぜ」

と 譴責めることなく、汗ばんだ 顔に 役割、分担 協力によって できた 満足感があふれている。

すんだ 後の しめくくりを。 労をねぎらう

先生「ご苦労さんでした。きれいにできたね」

見「ご苦労さん」「ご苦労さんでした」

と口々に言う。

勤務で育った 仲間 の つながりが いっそう 濃く 感じられた

③ 係活動の中で

「自分たちで できる 仕事を みつけよう」

「どんな 仕事があるか 考えよう」

一年生を ふまえて、色々な係りが できてきた。

話し合いによって 統合して一つにしたり、分割したりして、10の係が できた。

ケルブ・デーの一つの係の仕事を 分担することにした。

○○○がかり
 ・マスクをしらべる
 ・ストローをくぼる
 ・ストローがおちていたら
 　　ひろう

 ○○○○子
 ・・・・男

仕事の内容はグループで話し合いみせていった。

大きさ、形、書き方も、グループで割り振っていく。

各グループの特色がでて愉快なカードが(仕事)出来上がった。このカードを自分たちの好きな場にはらしてほしいと子どもたちの希望。

給食係 → 配膳台の右側 テレビ係 → スイッチの下に
カーテンの係 → 柱

④ 文化活動の中で

10月の1ヶ月間 教育実習生が来た。

もうあと1週間でおわかれという時 終りの会で 11つかお別れ会をしようという意見が出た。すかさずの拍手で賛成。

- ・手づくりで先生にプレゼントをしよう。
- ・グループで出しものをやろう
- ・用意するのは〇班、司会は〇班で、先生へあいづつは〇班かざりは〇班と〇班

当日 歌をうたう班、クイズをする班、本を読む班、
ハーモニカを吹いて他の子が歌う、etc.

五班の A男 (不器用でリズム音痴 白い紙をよごしたり、破ったりなくす) (の一番。教科書もうすよごして 角はボロボロ。無邪気な子)

A男が朝から机の中をすぐ気にしている。その中にガラスのジョブがあり、白い紙が入っている。そわそわとして 落ち着かない様子。司会の声で 出番になると、A男が出てきて、突然 シャボン玉を吹き出した。すると他の3人がシャボン玉の歌を歌い出した。このアイデアにおどろいた。そして惜しみなく 一段と大きな拍手で賞賛している学級の仲間にも二度おどろかされた。

略……Aくん あの シャボン玉の アイデアは ばうくんでしたよ

わすれることはできません。……略…… おもしろくて、ヤンキーで、でも
みんながみんな それぞれにのびのびとした。子どもらしく、満みあふいて
いる二年1組のみなさん。……略…… 教生より(手紙)

⑤ 育ってきた子どもたち。

—ある母親からの便りから—

……夕方5時頃になると 私は夕食の用意をしながら 彼女の話を聞いてやるのが
日課です。…… グループのひとりが 忘れ物をして迷惑をかけたら、他の三人が
ジロクといって やさしくにらむとか。みんなが宿題を忘れなかつたら、10枚もポイント
が残っているのに 誰も忘れた人がなくて つまんない つまんないと 先生がほやいていた
とか、先生はつまんないといっても、本当は そうじゃないんだよねと、私に、先生の心の内を
説明させました。

私は そうよ 先生は皆が宿題を忘れなくてうれしいのよ、でもねと そういって 楽しく勉強が
出来るように 努めているのよと、いって プーンと納得した様子……

豊かな心情を育て 自己実現をめざす教育活動
— 個を生かす集団を求めて —

兵庫県姫路市立城陽小学校

岩田 好

1. はじめに

すべてのものに興味・関心を示し、積極的、意欲的で活動性の伸びるのが小学校の時代とも言われている。調和のとれた豊かな人間を育成することが強く叫ばれている現代。児童の1人ひとりが自己実現をめざして精いっぱい活動できる場づくりをしてやることが我々のつとめでもあろう。個人の成長と同時にその個が集団の中で埋没することなく、より一層の成長をはかるよう両面のおさえを忘れてはならないだろう。

本校児童には、純て素朴な一面を持ちながら

- ・ 基本的な生活習慣の欠如
- ・ 創意工夫がなく、自主性、自己表現力ともに乏しい
- ・ 自己中心的で集団の一員としての協調性が不足

といった実態がみられる。またその原因として、

- ・ 教師中心的で、児童の思きわめが不足してしまっただけ(児童理解不足)
- ・ 児童相互間の認め合い不足
- ・ 地域特性

などが考えられ、これらの見直しをほかり次のような目標を設定しとりにている。

2. 研究のめあて (努力目標)

- 進んで学習にとりくみ、お互いに考えを出し合い活動できる場づくりをする
- 自分の生活をよく見つめ、友達と共に高まり合う集団づくりをする
- 自分の体を知り、進んで体力を向上させるための動きづくりをする。

人間関係をととのえる基本は対話であることを認識しバス学習をとり入れて実践にとりこんでいる。

◎ 低学年のめらい

(1年) 基本的生活習慣の形成を一つずつ進めていく中で「自分のことは自分で」をかけ 学級の友だちの様子や自分の立場を反省させながら明るく行動できる集団づくりをする。

(2年) 自分の考えをしっかりと持ち グループの中で出す力を高め、互いに認め合い 支え合い 励まし合う集団づくりをする。

3. とりくみ

(1年) 基本的生活習慣の定着化 (家庭の協力と点検活動)

- 毎日かならず名前をよび 大きな返事を

(人前で話すことに慣れる手立て……)

- 給食時 4人グループを編成 各自係を持って協力、楽しい給食活動とする

- 朝の生活バスの中で 昨日のできごとを中心に

(個人思考・ペアバス)

- 終りの会

・ 1日のくらしで よかったこと、楽しかったこと、うれしかったこと、いやだったこと、困ったこと……を話す中心人の気持ちを考えて、自分の考えがよりはっきり言えるように。

(個人、ペアバス 全体で)

(2年) ○ 1班4人編成 班長が司会 (班長交替制)

○ 朝の学習バス (10分間)

・ 算・算の基礎的課題にとりくむなかで

○ 朝の生活バス (10分間)

・ 1日の目あて

・ おしらせや ニュース (個人日記の活用)

○ 授業の中で

・ 課題をはっきりつかむ — 個人思考と深める —

— グループバスで深める。

まちがった反応を示すことの大切さを周知徹底させる

まちがいを学習の高まりにつなげることを...

・ 教師対児童より、児童相互のやりとりこそ学習の高まりが期待される

4 歩みのあとと問題点

(1年) ○ 基本的な生活習慣は著しい進歩が見られ、学校生活の中で自立的な心構えが徐々に育ちつつある。

↳ 夏休みの生活へしつなげた。

◎ 返事、本読みの声が大きく、はっきりできるようになった。

◎ 友だちの前で意志表示が、かなりはっきりでき、その場、その場に通じた話しことは使いわけもできた。

◎ 自分の行動がすばやくとれたり、問題がはやくできた場合、遅れている子への援助の目せ向くようになった。(協調、支え合いの芽はえ...)

・ 基本的な生活習慣については、かなりの協力を得られるようになったが、留守家庭が多く徹底しにくいややみがある。

- ・物の見方、感じ方等 戒性の育成にも心がけたが、差の大きさに問題がある 今後の課題。
- ・朝バス、終りのバスで生活を中心にとりくんだが 時間不足が問題。

(2年.) バス学習についてのアンケートより (27名の学級例)

◎バス学習が好き 24名

- ・人の考えを聞いたり自分の考えを言うのは勉強になる。
- ・自分の考えに賛成してもらえたい。
- ・自分の気がぬい意見や考えが聞ける 1人よりいい考えが出る。
- ・班長になると話す機会も多く、グループ発表もできるのがいい。
- ・4人たいていこちゃこちゃしたことでも何でもしゃべれるので楽しい。

◎バス学習がにがみ 2名

- ・考えがまとまらない時に発表の順がまわってまた詰まる。
- ・意見が多くて班がまとまらない。

(戒性の強さ等、発達段階的にも無理な面もある)

- ・グループバスで発言できても全体バスの場ではまだ抵抗がある。
- ・課題の手の方、児童相互の支え合いについて一考を……

○前より意見がよく出せるようになったが

なった 28名 まだ 9名

○グループバスでの発言ははすかしいか

はすかしくない 32名 はすかしい 5名

○全体バスでの発言ははすかしいか

はすかしくない 11名 はすかしい 26名

本校ではバス学習の門をたいたばかり、そのとりくみについては、極めて浅く、すべてがこれからといった現状である。

研究主題

課題への取り組み

～ 小学校3年 算数科「かけ算のひっ算」の指導を通して ～

提案者 滋賀県神崎郡五箇荘町立五箇荘小学校 福島千代子

1. はじめに

昭和45年度以来取り組んできたバス学習の研究は、豊かな人間形成を目指して、認知的目標と態度的目標の同時達成をねらった日々の実践の累積であった。

昨年度は、バス学習指導研究 / 0年の歩みを省みて、再びバス学習の原点に立ち返って、虚心にその成果を点検し、新しい教育課程のもと、子どもが力生きて働く力強いバス学習のあり方を求めて研究を進め、昭和48年度に続き2回の全国発表を行い、一応の成果と評価を得た。

そこで、本年度は研究の視点を評価におき、たしかな指導を目指す具体的標榜内容とその方法の研究を進めている。

2. 研究仮説

バス学習指導を根幹とする指導研究において、研究のよりどころとなる4つの仮説を定めて、どの学年においても4項のすべてを実証し、指導の累積を図ることに努めている。

- (1) 児童自らが学習目標を知り、学習の見通しを立て、協同して課題づくりに取り組むことによって、学習の追求意欲を喚起し、高めることができる。
- (2) 課題解決を目指して、児童ひとりひとりの個人学習を充実させることが、相互学習をより高めるであろう。
- (3) 児童が所属する集団の中で、他とかがわり、相互作用を密にすることによって、学習効果を高めることができるであろう。
- (4) 児童が即時評価することによって、自己調達し、学習活動をより効果的にすることができるであろう。

すべての授業の中で、認知的目標（知識、理解、技能）と態度目標（A. 学習に対する態度、B. 社会的態度）を学習目標の両輪と考え、どの教材で指導する場合でも、必ず二つの目標達成を目指し、課題提示、個人思考、グループ思考、全体思考、確認の過程を学習展開の基本的な流れとする。

3. 課題作りと学習の見通し

課題作りは、プリテスト後に子どもと教師の援助のもとに作るのであるが、子ども達にとっては学習の全体も見通すことになり、学習目標が具体的にわかって学習意欲を喚起し、学級全体が1つの目標に向かう連帯性が強化されるという効果をもつ。この段階においては「課題の解きほぐしていく方法についての情報を交わし合う内容」も集中して協議することが極めて大切となる。

この学習を進めていく過程においては「全体の流れの中の本時の学習の位置づけ」が明確にされ、的はずれのない深まった追求をすることが可能となる。

学習の達成度を、プリテスト・ポストテストから考えてみると、両テストの進

歩率がほとんど通過点の75点を上回る結果となっている。

しかし、問題別に個々の子どもの結果を見て、理解の状況によってフィードバックすることは、目標達成状況を自分で十分判断し、自己調整能力を育てることにもかかわって重視する必要がある。

※ プリテスト・ポストテスト
を基にした進歩率

$$\left(\frac{\text{ポストテスト} - \text{プリテスト}}{100 - \text{プリテスト}} \times 100 \right)$$

4. 指の実践から

(1) プリテストにより学級の傾向をさぐる

① ①	(何十) × (何)	50 × 8	正答人数 30 (人)
②	(何百) × (何)	300 × 7	27
②	かけ算の仕方	56 × 5	12
③ ①	ひっ算の仕方	$\begin{array}{r} 21 \\ \times 4 \\ \hline \end{array}$	32
②	ひっ算の仕方	$\begin{array}{r} 72 \\ \times 2 \\ \hline \end{array}$	25
③	ひっ算の仕方	$\begin{array}{r} 97 \\ \times 6 \\ \hline \end{array}$	14
④	ひっ算の仕方	$\begin{array}{r} 607 \\ \times 9 \\ \hline \end{array}$	15
⑤	ひっ算の仕方	230 × 6	11
⑥	ひっ算の仕方	834 × 6	5
④	かけ算の適用題		29
⑤	かけ算の適用題		14
⑥	かけ算の適用題		11
⑦	かけ算の適用題		6
⑧	かけ算の適用題		2

プリテストの結果をみると、③の①②のようなくり上がりのないかけ算
(2)

はよくできている。しかし、内容がわかってできているかどうかは疑わしい。
 ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ の適応題では、式は立てられるが計算ができないために
 正答が出せなかった子どもが多い。その中で ④ は 29 人もできているが、こ
 れは ① の ① ② と同じで (何十) × (何) の計算のできる問題であり、既習
 知識からでも答えが出しやすいからであろう。

このような実態をみんなで話し合い、単元全体を見わたして、どこにより多
 く時間をかけて学習すればよいかを教師自身はもちろん、子どもたち一人一人
 が自覚して学習計画を立てる上での参考にしている。

(2) 「かけ算のひっ算」の学習計画を立てる授業から

(認知的目標)

かけ算のひっ算に関するプリテストの結果から単元全体の見通しをもち
 学習計画を立てることができる。

(態度的目標 A)

プリテストの結果から学級の傾向と自分の問題をはっきりと知り、課題
 づくりをしようとする。

(態度的目標 B)

ノートをみんなの前に出して、指でおさえながら話そうとする。

(展 開)

学習課題 .. 単元 「かけ算のひっ算」のところの学習計画を立てよう			
区分	学 習 活 動	指導上の留意点	評 価
準備	1. 学習課題を確認する	・「かけ算のひっ算」 のところの学習計画を 立てる課題であることを 確認させる。	・本時の学習すること を知ったか。
	2. プリテストの結果から 知りたいこと、わから ないことを見つける (ひとり学習)	・プリテストの結果から 知りたいこと、わから ないことを集めさせる ・学級全体のプリテス トの結果の集計表から 問題点を見つけさせる	・知りたいこと、わか らないことがはっきり したか。 ・学級全体の傾向はつ かめたか。
中心	3. 各自の問題を出し合 う。(グループ学習)	・問題集めをし、カー ドに書かせる。	・話し合いに進んで参 加しているか。
	4. 単元全体の見通しを もち、学習計画を立て る。(全体バス)	・わからないこと、知 りたいことをもとに、 単元全体を見通して、 学習すること、学習す る順序を考えさせる。	・単元の学習内容が落 ちなく出せたか。
確認	5. 本時の学習の確かめ と反省をする。	・確かめバスをさせ、 ノートに整理させる。 ・自己評価をさせる。	・ノートは整理できた か。 ・自己評価はできたか。
	6. 次時の学習課題を確	・次時の課題を確認す	・次時の課題はわかっ

かにする。

る。

たか。

(個人思考) 各自がプリテストからもらった問題

(わからないこと・知りたいこと)

- 今まで習った (/けた) × (/けた) でなく、2けたや3けたになって位が多くなったから、かけ算ができない。
- プリテストの [3] の $\begin{array}{r} 607 \\ \times 9 \\ \hline \end{array}$ のようなかけ算の仕方がわからない。
- プリテストの [3] の ⑤⑥ のように、式からひっ算の式に書く書き方がわからない。
- プリテストの [1] の 50×8 、 300×7 のように、2けた、3けたのかけ算がわからない。
- プリテスト [3] の $\begin{array}{r} 97 \\ \times 6 \\ \hline \end{array}$ のような、くり上がりのあるひっ算の仕方や意味がわからない。
- ひっ算で、はじめにどれとどれをかけるのか かける順序がわからない。
- プリテスト [3] の ⑥ の 834×6 のように、(何百何十何) という大きな数がでてくるので、どうかけるのかわからない。

(グループバス / / 班)

司 プリテストから わからないこと、知りたいことをいっぱい集めます。先ずはじめに C1 さん、言ってください。

C1 はい、わたしはプリテストの [3] の ⑤⑥ のやり方、答えの出し方がわかりません。

司 プリテストの [3] の ⑤⑥ という番号で言わないで問題で言ってください。

C1 はい、[3] の ⑤ は 230×6 で (3けた) × (1けた) のかけ算のひっ算の仕方やひっ算の式に書く書き方がわかりません。

もう一つあって、[6] [7] [8] の問題で、式はできるのですが答えの出し方がわかりません。

まとめて言うと、かけ算のひっ算の答えの出し方と、かける順序がわからないのでわかるようにしたいです。

司 C2 さんはどうですか。

C2 わたしもC2 さんによくにいて、プリテストの [3] で今までに習った (/けた) × (/けた) でなく、2けたや3けたのように位が多くなったかけ算ができないのです。

司 C3 くんはどうですか。

C3 はい、ほくも C1 さんたちと同じで、プリテスト [3] の $\begin{array}{r} 97 \\ \times 6 \\ \hline \end{array}$ とか

$\begin{array}{r} 607 \\ \times 9 \\ \hline \end{array}$ などのかけ算のやり方がわかりません。

それに、プリテスト ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ のお話の問題は、式は立てられるのですが答えが出せないで、ひっ算でできるようにしたいです。ほくもまとめて言うと、(何十) × (何) や、(何百何十何) × (何) のひっ算の仕方がわかるようにしたいです。

司 最後にはくが言います。ほくも今まで言ってくれた人たちと同じで、プリテストの ③ ほんの ③ ④ ⑤ ⑥ のように、くり上がりのあるひっ算の仕方がわからないことと、⑥ ⑦ ⑧ の問題が大きな数だから、答えを出すのがややこしいです。

司 今、わからないこと、知りたいことをたくさん出してもらったのですが、質問や意見はありませんか。

全 ありません。

司 それではまとめます。このグループでは、③ の ⑤ ⑥ のような式からひっ算に表す仕方がわかりたいことと、ひっ算の計算の仕方で、くり上がりのあるのとないのと両方ともわかりたいとまとめてよろしいか。

全 はい。

司 これで、グループバズを終わります。

このようにして、グループでまとめられたことをカードに書いて、みんなで確かめ合う。そしてこれが全体バズへ出されるのである。

(全体バズ)

各グループから、グループバズを通してまとめられたカードを提示し、グループ内の問題を学級全体のものへと広め、共通意識のもとに学級全体の学習課題へと発展させていく。

この段階では、子ども相互に知りたいこと、わかりたいことの検討を加える活動を通して、「それでは、何を学習していけばよいのか」についての意識を高め、確かなものへとしていく。これに教師の助言が加わり、教科書などを参考にしながら具体的に学習課題、学習方法、学習の順序、予定時間数にも配慮して、子どもなりに単元全体を見通した学習計画が出来上がるのである。全員参加のもとに出来上がった学習課題は次のようなものであった。

- (1) (何十) × (何) の答えの出し方を考えよう。 30×4
- (2) (何百) × (何) の答えの出し方を考えよう。 400×3
- (3) (何十何) × (何) の答えの出し方を考えて、それをひっ算でしよう。
 23×3
- (4) (何十何) × (何) で、くり上がりが1回あるひっ算の仕方を考えよう。
 23×4
- (5) (何十何) × (何) で、くり上がりが2回あるひっ算の仕方を考えよう。
 46×3
- (6) (何百何十何) × (何) の答えの出し方を考えて、それをひっ算でしよう。
 324×2
- (7) (何百何十何) × (何) で、くり上がりのあるひっ算の仕方を考えよう。
 654×3

(5)

(8) 405×9 や 340×5 のように、1の位や10の位に0のあるひっ算の仕方を考えよう。

(9) まどめの練習をしよう。

(10) ポストテストをしよう。

5. 考 察

プリテストとポストテストの結果（別紙参照）から考察してみると、学級全体ではプリの得点平均43.5点からポストの92.2点とその進歩率は87.4%でかなり高い進歩を示している。また、班別についても5班がポスト82点、7班がポスト87点で、その他の班は90点以上をとり、8班では98点という高い得点である。

これらの結果からみる限り、授業実践における認知的目標はほぼ達成されたと考えられる。単元全体に見通しをもった子どもたちは、ひとり勉強への取り組み意欲を増し、自分の考えがしっかり持てて学習に臨むことから、グループバスや全体バスも活発になって、密度の高い相互活動ができたであろうと考えられる。

7班の28児は、能力において低く、かけ算の九九（6・7・8・9の段）も不正確であるが、グループ員のはげましや援助でクラスで最低点ではあるが一応65点の得点が得られた。低いなりにも見通しをもち、きょうは何を学ぶのか、わからないことは何か、を明確にすることができた。このことは、グループバスや全体バスの中で、さかんに質問をしたり、意見を出したりしていたことで証明されると思う。

28児は自己評価の中で

わからないことは、グループの中でも全体バスでもよくたずねられたし、グループの話し合いでは、ゆびでノートをおさえながら話せたので、みんなよくわかってくれてよかったです。

と記している。

一方、1班の①児は、プリ35点、ポスト65点と振わず、進歩率も46%の低さにとどまっている。①児は性格的にみて内向性であり、平素から無口で、学習時においても積極的に発言しようとはしない方である。当然、わからないことがあっても、それを友だちにもちかけようとしたがらない。その上、①児の属するグループ内では②・③・④児の適切な支援がなかったことにも問題があったと考えられる。

6. ま と め

子どもたちに確かな学力を身につけさせるためには、認知的目標と態度的目標の同時達成によってはじめて可能となることは、私たちがバス学習の実践をする上で基本としていることである。

- 問題解決を目指して、子どもひとりひとりの個人学習を充実させること。
- 子どもたちが所属する集団の中で、他とかがわって相互作用を密にすること。
- 即時評価により、自己調達をはかること。

が、子どもたちの学力を確かなものにしていく上で大切なことは言うまでもない。しかし、「課題づくりのための学習活動」を充実させることは、子どもたちに単元全体の学習に見通しをもたせると共に、学習に取り組むための動機づけを高めることであり、目的意識を明確にする上で極めて大切な学習活動と考えるのである。こうした点をふまえて、より一層の努力をしていきたいと念じている。

3年 算数科プリテスト (かけ算のひっ算)

1 かけ算をしなさい。

① 50×8

② 300×7

2 かけ算のしかたを考えて、 にあう数を書きなさい。

56×5 のこたえは、 $50 \times$ のこたえと $\times 5$ のこたえをたした数です。

3 かけ算をしなさい。

①
$$\begin{array}{r} 21 \\ \times 4 \\ \hline \end{array}$$

②
$$\begin{array}{r} 72 \\ \times 2 \\ \hline \end{array}$$

③
$$\begin{array}{r} 97 \\ \times 6 \\ \hline \end{array}$$

④
$$\begin{array}{r} 607 \\ \times 9 \\ \hline \end{array}$$

⑤ 230×6


⑥ 834×6


4 1ふくろ20こいりのあめのふくろが6つあります。あめはぜんぶで何こですか。

(しき)

こたえ ()

5 ひろみさんの学校の3年生が、1れつに34人ずつ7れつにならんでいます。ぜんぶで何人なっていますか。

(しき)

こたえ ()

6 1こ 405円のプラモデルを4こ買います。だいは何円ですか。

(しき)

こたえ ()

- 7 / さつ 980 円の本を 5 さつ 買います。だいは ぜんぶで 何円 ですか。
(しき)

こたえ ()

- 8 / こ 600 円のボールを / こにつき 25 円ずつ つけてもらって、5 こ 買いました。ぜんぶで 何円 になりましたか。
(しき)

こたえ ()

第16回 全国バス学習研究集会 分科会(4)

研究主題

小学校3年社会科における課題設定についての一考察

徳島市千松小学校 杉本昌弘

1. はじめに

社会科の学力とは、社会事象の認識をとおした問題解決力であるといえよう。問題解決力とは、知識、理解の能力、観察、資料活用、思考力、判断力、表現力などが総合されたものである。しかし、ややもすると知識、理解の面に偏り、授業が教師からの一方向に陥る傾向にあるのではなからうか。教師の一方向的な解説や説明に終始すると、大部分の子どもたちは、傍観者の立場においやられ、学習意欲は減退してしまうであろう。そこで子どもたちが、学習の主体者として、主体的、意欲的に取り組み、学習課題を解決し、確かな学力を身につけることができるような社会科学習とするには、どのような工夫が必要か考察する。

2. 設定の理由

3年生の社会科では、自分たちの住む地域を観察や調査という方法で理解させることを目標としている。子どもたちが、主体的、意欲的に学習に取り組み、学習課題を追求するには、まず一人一人の子どもが追求すべき学習課題をもちなければならない。学習課題が明確でなければ、観察や調査も十分な成果をあげることができないであろう。自ら問題意識をもち、学習課題が明確になったとき、学習意欲が旺盛となる。そこで学習課題の設定、把握が社会科学習にとって大変重要であると考へ、このテーマに取り組んだ。

3. 実践例

(1) 単元、木製品工場のこと

(2) 目標、木製品工場のことと自然環境との関係、原料や資源の利用及び生産品の販売や輸送の面から理解させ、生産活動を通して、徳島市と他地域との結び付きについて考えさせる。

(3) 展開 (略)

4. まとめ

学習課題を一人一人の子どもが把握したことにより、学習活動が活発になった。しかし、地域教材をあつかうため、素材の教材化が重要な課題となった。

第16回 全国バズ学習研究集会 (分科会4)

課題設定へのとりくみ

— 社会科・見学学習を通して —

愛知県春日井市立味美小学校

田本安廣

1. はじめに

私の勤務校は、名古屋市に隣接する春日井市の西部にある。以前は、河や畑が多くあったようだが、ここ数年の住宅地化により、今では学校のまわりから緑の姿を消しつつある。学校のすぐ近くには名古屋空港があり、一日に何回となくジェット機が校舎のすぐ上空を、爆音をたてて通過する。その爆音の大きさは、しばし授業を中断せざるを得ないほどである。このような環境で育ったため、集中力・粘り強さに欠ける児童が多くみられる。

2. 設定の理由

教師は、児童の学力を伸ばそうと努力をしているはずである。ところが、教師の意図に反して、学習に対する意欲がなく、理解力も劣る児童が増えてきているように思う。その原因の一つとして、課題設定の悪さをあげることができるであろう。

課題は、設定さえすればよいというものではない。児童に受け入れられるければ効果がないのである。日常の授業において、教師だけが独走していることが、病としてあるのではないだろうか。

課題とは、授業を成立させるための基本構造である。授業は課題の良し悪しにより、決定づけられるものであるといってもよいだろう。

そこで、課題に対して、ひとりひとりの児童が意欲的に取り組み、思考を深めさせることができるような学習態勢をもっていくために、相互活動を取り入れた学習指導法を試みることにした。

3. 学級児童の実態 (社会科学習において)

(1) 教師から見た児童

児童は、学力優秀児の発言を、即、正答と思いつ込んでいるようである。特に、一斉学習形態をとっていた年度当初に、その傾向が強かった。よって、学習時においては、一部の児童の発表だけで授業が終了してしまうということが多く、「話し合う」「深く考える」という段にまでとてみ達しなかった。そこで、優秀児と思われる子どもの発言が、必ずしも正答でない場合があること、正答を一つと限定してはいけないこと、あきらめてはいけないということなどを話して聞かせた。

(2) アンケート調査から (5月実施)

3年生になって好きになった教科と、嫌いになった教科を答えさせた。その結果わかったことは、社会科学の学習が好きになった児童が7名いたのに対し、嫌いになった児童が、学級児童の四分の一にあたる11名いたことである。嫌いになった理由は、「わからないから」「難しいから」というものが圧倒的であった。

4. 実践への手立て

(1) 雰囲気づくり

- ① 一斉学習形態から、バズ学習形態への変更
- ② 月一回程度グループがこぞし、なるべく多くの児童と交流できるようにした。(グループは4人編成とし、原則として男女各2名ずつにする。)
- ③ 学習中、挙手をしていない児童にも指名して発言の機会を与えた。意欲をもって学習にのぞませたいからである。
- ④ 誤答をした児童に対して、批判ではなく、励ましの言葉をかけるようにした。
- ⑤ 自分の意思をはっきりさせるために、ハンドサインを取り入れた。
- ⑥ 児童全員に班長を経験させることにより、責任感と協調性を養うことを考えた。
- ⑦ 学習の区切りをはっきりつけるよう様をした。
- ⑧ ノートには板書事項を転記させるだけでなく、自分の考えを書きこませるようにした。

(2) 見学学習の導入

3年生の社会科学学習は、自分たちの家や校区といった狭い地域をみつめるだけでなく、市全体や他の市町村といった広い地域社会へ視野を広げる必要がある。行動範囲の限定されている児童にとって、これらの地域の事象を理解することは、難しいことである。

そこで、資料を使って授業を進めることになるのであるが、一方で可能な限り、見学学習を取り入れ、社会科学学習を身近なものとして感じとらせることにした。

- ① 校舎屋上からの市内展望
- ② 市内巡り バス利用
- ③ 工場見学 アサヒビール名古屋工場
- ④ 農協見学

5. 授業の実践 (工場見学について)

(学習のながれ)

(思考の過程)

(課題)

ビール工場を見学して、わかったことを発表しよう。

- ・各自、工場見学のことを思い出す。
- ・発表する。

個人思考

準備課題

- ・サターとビールをつくらっている。
- ・ビールの原料として、ホップやこうばちが使われている。
- ・大きな機械があった。
- ・1分間に16本のビールをつくらることができる。
- ・コンピューターが使われていた。
- ・人が10人働いていた。
- ・働いている人は96人である。

大きな工場なのに働いている人が96人であるのはどうしてですか。

- ・各自考える。
- ・とまり同志で話し合う。
- ・発表する。

個人思考
隣接法

中心課題

・大きな機械があったから。 — 3 —

- ・機械が人のかわりにしているから。
- ・コンピューターが使われているから。
- ・給料をばらえなから。

機械をつかってせいの品をつくるのはなぜですか。
話し合いの結果、あかしのいうことになった。

- ・各自考える
- ・班で自由に話し合う、
- ・発表する。
 - ・給料をばらめなくてすむから。
 - ・速くつくれるから。
 - ・多くつくれるから。
 - ・よいものをつくることができるから。
 - ・安くつくれるから。

個人思考
自由会話法

工場の工夫

ビール工場、松下精工、王子製紙工場で工夫していることを比べたがい。

- ・各自考える
- ・発表する。
 - ・3つの工場はトである。

個人思考

確認課題

よい品を安くつくる、節約ね。

6. 実践の考察

この時間設定した課題は、本学校としてはかなり高受のものである。しかし、予想以上に意見が多く出され、話し合いも活発なほうであったと思う。

- ① 工場見学をしたことにより、印象度が高かった。—— 学習意欲の盛り上がり
- ② 見学した工場が児童にとって親近感のわくものであった。
- ③ 課題に具体性がみられた。—— 取り組み易い課題
- ④ 課題の配列がスムーズであった。

王子製紙、松下精工、ビール工場のうち、一番心にのこっているのはどの工場ですか。

・アサヒビール工場	33名
・松下精工	2名
・王子製紙	2名 無答3名

(授業後のアンケート)

7. おわりに

まだバス学習を取り入れて半年しかたっていないため、話し合いや発言のしかたなどが上手でない。また、テーマに十分せまった実践とはいえないが、児童の思考を深めるために多々は役立ったと思う。

しかし、難度が高い課題につつまの児童の取り組み方指導、話し合いに参加できない児童の指導など、問題点がたくさんあることを忘れてはならない。

研究主題

学習の質を高める話し合い

— 意欲的に課題に立ち向かい、自己実現をめざす子の育成 —

兵庫県姫路市立城南小学校 山下美佐子

1. 本校の実態

本校は市街地であり、ドーナツ化現象で年々人数が減少しているという典型的な都心型の学校である。家庭の職業は、70%が商売を営んでおり、親の労働時間は長く、忙しい。そのため、家庭での話し合いが少なく、学習は塾にまかせ（学習塾に行っている児童は全学年にわたり、他校の2~3倍）極端には、三度の食事や親子が一語にとれない家庭環境の児童も多い。なおかつ、校区外通学者が8%おり、適当な遊び場所も少なく、学年のわくをはずした遊び方や、集団でチームワークをとる様なスポーツをするといった遊び方も非常に少ない。これらの要因から本校児童は、自己中心的な考え方の強い子が多く、友だちと共に知恵を働かせ物事を解決しようとする態度が育ちにくい。本校では、その様な児童の実態をとらえ、バス学習を適切な場でとり入れることにより、共通の課題に向かって相互に、活発に作用し合いながら共に力いっぱい伸びようとする態度を養うことをねらっている。

2. 質の高い話し合いとは

意欲的に課題に取り組み、自分の考えや疑問をはっきりと持ち、友だちに話す。そして、友だちの考えをも主体的に受けとめ、その考え方を理解しようとする努力し、自分の考えをより広く、深く、確かなものにしていく。

そういった集団思考の面白さがわかり、自主的に考え、学ぼうとする気持ちを高めることをねらいとしている。従って、バスの際、どのような考え方にまで高まることができたかということも大きなねらいではあるが、むしろ、いかに自分の考えを相手にわかるように工夫して話したか、相手の考え方が納得できるまで質問したか、クルーズのみんなが、わかり合いながら真剣に話し合ったか、などの経過を大切にしていきたい。

3. 実践

話し合いを活発なものにするためには、児童にバス学習のあり方について理解させておかななくてはならない。何のために行うかの自覚を高めることが、話し合いの質を高めることに結びつくからである。また一方、学習に意欲的に参加させ、問題意識を高める工夫も必要である。その二点についての実践の例をあげたい。

(1) 児童の意識のたがやし

① バス学習の目的を意識づける。

- ・ 自分の考えを聞いてもらおうね。
- ・ わからないところは、わかるまで教えてもらおう。
- ・ わからない子には、わかったと言ってもらえるまで、工夫して説明しよう。
- ・ ちがった考えの子とぶつかり合おう。
- ・ みんなが納得するまで話し合おう。... etc

② 話し合いの進め方を理解させる。

・ 基礎的な話し合いの型の定着

論理的に問題解決していくための考え方ができるよう、表現形式やことばを知らせる。もちろん、この型に固執するのではなく、討論が自熱すると自然に型からぬけ出ているが、基本を押さえておくことにより、深め方の要領が理解させられる。

- ・ 考えを豊かにするために「言い方をかえたら」「うり...ともしつて」

・ 考えを深めるために

「質問があります。なぜ…ですか。」 「もう少し詳しく教えてください。」

「少し違って」 「…につけたして」 「よく似ているけれど。」

「その意見に反対です。それは…だからです。」 「もう一度お願いはあ。」

「…についてわかったけれど、…は、どうですか。」

・ 考えを確かめるために

「…という考え方がですか。」 「…ということによろしいか。」

・ みんなが発言できるように

「Aさんはどうですか。」

○ リーダー会議による問題点の把握

<問題点>

自分の意見だけ言って
友だちの考えを深く
考えない子がいる。
(1, 3班)

質問しても、怒って、わか
る様に話してくれない
子がいる。
(5班)

結論がでてしまつたら、
お話をしていることが
多い。
(1, 7班)

<解決策>

・ 「考えてよ、一と思ふんやけど」
どう思う。」と言って、特にその子に
話しかけていこう。

・ 漠然と質問しないで、自分もよく
考えて、尋ねよう。

・ ものの言い方が大切だな。

・ 本時の本読みをしり、話し合つて
わかったことを書く用紙を作って
持っておこう。

・ 役割を一週間おつ変えた方が、全員が
活躍しやすいだろう。

・ 翌日の朝バスで話し合いの
内容を伝え、質疑応答、意見
交換する。

○ 相互評価 … /グループの討論の仕方をサンプルにして

① 1つの課題について、ある班にだけ話し合わせ、それをもとに全員バスに入る。

② テープを利用し、クルバスの後の全員バスで聞かせ、それをもとに
意見交換する。

③ 話し合いの仕方についてのみ、別指導を行う。

・ 教師の参加

- 意欲的に臨んでいない子 … 問題意識をほおごす。
- うまく意見が述べられない子 … 説明の仕方の手本を示す。
- 深まっていない時 … 考える観点を明らかにしてやる。

(2) 学習への意欲づけ

・ 課題意識を強める。

児童の疑問や感想から課題を設定する。(別紙)

4. 国語科におけるバズ学習の事例 (別紙)

< バズの位置づけ >

① 読み取ったことや疑問点を **出し合うバズ**

- ・ 本時学習に対する自分の問題点を明らかにし、「自分の学習だ」という自覚を高める。
- ・ 友だちの読み方を知る。

② 中心課題について、**ゆさぶり合うバズ**

- ・ 深く考え、問題点、対立点、同意できた点を明らかにする。

③ **質問バズ**

- ・ 各児の疑問を解決し合う。

5. 展望

友だちの考え方への関心や、問題解決への意欲を強く持たないとバズは活発で質の高いものとはならない。この知識欲をそそる様な、たくみな学習の展開や、自分の考えを言わずにはおれない様なかり立て方を、いかに工夫するかは尽きるところを知らない。また考えを出し合い、認め合い、遠慮なく指摘し合える人間関係が基盤であり、雰囲気づくりを常に心がけていなくてはならない。

思考力を育てる 学習方法

愛知県春日井市立北城小学校

加藤 淳二

1. はじめに

本校は昨年度、2校の児童を集め新設された学校であり児童数は、約700名。

A B両校よりほぼ同数の児童が来ている。A校からの児童は、春日井市の中でも古くからの集落の地域から B校からは、松林を宅地化した市街地域から通学して来ている。

193級

本校の現職教育では、テーマに「ひとり、ひとりを生かす授業法」を掲げ昨年度より継続して取り組んでいる。このテーマの中でのひとり、ひとりを生かすために、バズ学習を授業に取り入れて組み立て実践している。

2. 昨年の研究のまとめ

191543274617?

- (1) バズ学習での班編成について。(2人・4人の班)
- (2) ハンドサインの確認(ゲー・反対)(チョキ・賛成)(パー・意見)(1本指・質問)
- (3) 課題(目標)の設定について。(指導案上での明確化)
- (4) 評価方法の重要性について。(ハンドサイン・反応器・評価表など)

3. 学級の現状

男子20名・女子18名の学級・5年生・全体は、114名3学級である。

38名中、母子家庭・3名飲食店経営(店と住居と同じ)5名。この他はサラリーマンの家庭であるが、母親がパートなどで児童が帰宅する時刻に不在20名である。

この5年生の学年は、今年度学級編成をしている。4月学級全体は、落ちつきが無く、学習意欲に欠けていた。家庭での学習時間0という者が、5・6名も

おり、九九のはっきり言えない者4名・漢字の小テストをすれば0点続出の
状態であった。6月に、2泊3日の野外学習に行ったが、集団行動のできない者
がたいへん目につき学校内でも有名になっている学級である。

4. 実践経過

(1) 4月の学級の状況から重点的に指導する点を考えた。(2) 実践内容

- | | | |
|---------------------------|---|------------------------|
| ① 仲間意識を持たせる。(学級編成後・新設2年目) | } | 班ノートによる日記指導 |
| ② 基礎学力の充実。(漢字・九九) | | |
| ③ 毎日の生活に目標を持たせる。 | → | 朝・帰りの会にて、目標の
設定と反省。 |
| ④ 学習の理解力・思考力を深める。 | → | バスを取り入れた授業 |

(3) バスで留意している点

- ① 毎時の目標について、明示する。(板書し、さらに確認させる)
- ② 課題を明確にして授業に臨む。 **導入課題** → **中心課題** → **まとめの課題**
- ③ 課題解決のために、グループバスを実施する。多くは、導入・中心課題にて。
しかし、この前に、自己思考の時間を必ず設定するようにさせている。
まとめの課題では、簡単な相互活動とする事が多い。
- ④ 課題実施後の評価を必ず実施する。(ハンドサイン等)

(4) 児童の反応(アンケート)

- バスを取り入れた授業の方が、
良い、28名 (課題がよくわかる 6、
他の人の意見でまちがいに気づきなおせれる 15、その他)
- 良くない、10名 (話す事がへた 4、さわる人がいてイヤだ 2、
可会がイヤ 2、その他)
- 個人思考はしっかりできているか、
できている 21名・できない、17名 (考える気がない 3、課題の答えを出せか! 3、
わからないことが多い 8)

(5) 悩み

児童なりに、バス学習に対して理解しているし、相互活動での変革を実
行している。しかし話がへただから・可会がイヤだなどの児童の指導である。
どうしたら話し合いに参加できるだろうか?

研究主題

評価の工夫 評価の結果を生かすために

愛知県豊川市立千両小学校 丸山正克

1. 実践の動機

評価活動は、これまで教師サイドのものであった。自己評価をさせるとか相互評価をさせるということはあるが、その方法も内容も極めてあいまいであり、場当り的であった。

従って、自己評価させても相互評価させても、その結果を生かすことが十分できなかったし、子ども達にとっても、その必要を感じないというのが実態である。

これまで用いてきた方法は、O×方式のチェックリスト法である。しかしこの方法には、いくつかの問題のあることに気づいた。

- (1) リストに記載された項目が、いつでも、何にでも適用されるようにすることが困難である
- (2) O×式は、とかく形式的になり、いいかげんな判断に基づくものになりがちである
- (3) 評価の基準があいまいであり、全く、自分の判断に基づくものであるから、過小評価になったり過大評価になったりし、なかなか自分を客観視することができない。

これらの事を土台に、自己評価のさせ方と自己評価の結果を生かすことのできるような評価の方法、更にそれを支える学習活動について実践しようと考えた。

2. 実践の構想と試行

本来ならば、実践の仮説としたいところであるが、そこまで考えがまとまっていないので、ここでは、試行のための構想に留めておく。

(1) 望ましい評価活動

- ① 即時的事であること
- ② いつ、何にでも適用できること
- ③ 認知、態度両面にわたること
- ④ 評価の結果が次時のベースになること
- ⑤ 自分の学習の成果を自覚させることができること

この考え方のもとには、授業に積極的に参加し、自分の変化を自覚し更に、自分の課題をもって学習に参加する。つまり、自己実現への努力と、その保持を どうやってさせるかという願いがある。

(2) 評価のさせ方

自由記述とする。但し、内容は次の様に指示してある。

- ① 始めに考えていた事がどう変化したか
- ② 本時の学習の成果は何か (覚えた、わかった、疑問、失敗の原因)
- ③ 次時の学習課題は何か

課題が提示されたあと、課題解決のために、自分は何に留意するのが
ベストさせる。

これは、全く個人の能力の範囲で考えることである。例えば、割合を
求める課題では、

- ・いつも、比べる量ともとになる量をまちがえるから よく問題を読む。
- ・割り算と間違えてしまうので気をつける。

授業が終った時、この事を中心に、始め考えていた事がどう変化した
か記述をさせる。

そうすることによって、下位群児が、いつも、できませんでした ×
ですという段階から一考でもぬけ出させ、少くとも、自分の考えていた
ことは、うまくできたという満足感を持たせることができる。1時間が
無駄ではなかったのだということも自覚させたいという意図がある。
従って、授業過程は、およそ次の様になる。

前時の自己評価の結果の発表

できるだけ、どんな事に気がついて、どんな課題にとり組むうとしているか、という内容を発表させる

(事前にノートを点検し、おおよその事は把握しておくことが必要)

課題提示

(子ども達の自己評価の結果を大巾にとり入れて、課題を設定する。)

自分の課題を明確にさせる。

学習活動

自己評価をさせることは大変むずかしい。それは自分を客観視できないからである。

そこで、授業の途中で、即時評価をさせ、授業後の自己評価の情報を提供するような努力をしてきた。

例えば「わかった」ということについて。

- A 自力で全て解決し、やったことについて説明できる
- B 自力で解決はしたが説明はできない
- C 一部、友達のを見たり、聞いたりしてヒントをもらった
- D ほとんど、まねしてしまった。
- E 全く手もつけないボンヤリしていた。

この様なカードを提示して、自分の理解の程度というものを自覚させて来た。これについては現在、試行錯誤を繰り返して研究中である。

(3) 評価の結果の生かし方

評価活動をより活発にしたり、形式的なものにならないようにするためには、どうしても評価の結果を受けとめてやらなければならない。しかし現実には、1つの課題に対して

- ① わからないからもう一度
- ② 自信がないからもう一度
- ③ 今はわかった、もう少しむずかしいものを
- ④ わかったから次へ進め

少なくとも、この4通りは出てくる。これを全て満足する授業を成立させることは至難である。

そこで、あらかじめノートを点検してあるので、課題の設定と授業の進め方の上で、いくらかでも子ども達の問題としていることにふれるような配慮をする。(しかし、これは非常にむずかしい事である)

そのために、子ども達の問題とある程度集約し、それを1単元としてユニット計画(仮称)を作っているが、これを常に修正していくという作業を通し、子ども達の持つ課題の解決につとめるようにしている。

課題

主な内容
主な活動

到達目標

子ども達のこうした活動の累積の中から、子どもの特性の発見につとめ、授業時間内での適切な援助によっても問題の解決は可能である。

3 考察にかえて

これまでの実践の中で、ある程度わかってきたことがあるので、それを述べて考察に代えたい。

- ① 何をやったのが焦点の定まらない授業では評価活動は成り立たない。教師の授業評価の資料である
- ② きょうは、これがわかった、楽しい、うれしいという満足感を持つようになる
- ③ 情報提供の意味での即時評価(相互評価が比較的多い)によって、グループ成員への援助が活発になる。

授業改善と評価

広島県豊田郡豊町立豊小学校

土井紀美子

1. はじめに

評価のない指導は、あり得ない。つまり、学習過程の全てが評価の場であり機会である。だから、評価によって軌道修正をはかっている。評価を指導の手がかりにしたりして、子どもの力をつけている。本校では、ここ数年、到達度評価の考え方を取り入れた指導計画案(指導プログラム)を作成して、学習の効率化をはかる指導法の研究に取り組んでいる。この研究こそが、授業を見る眼、授業を診断する眼、授業を直す眼をつくっていき、授業改善への糸口になることと思える。ここでは、「授業改善と評価」の問題を中心に、第6学年社会「元の衆来と鎌倉幕府の衰え」の学習をもとにして発表したい。

2. 授業評価

私達教師は、子どもの成長が見える時、生きがいを感じる。そのために、よい授業を求めて努力を続けることが教師に求められた使命だと思ふ。だから、授業を評価することにより、教材解釈の未熟さや、学習者への理解の浅さを自覚し、それを反省材料として自己の教授能力を高める契機としている。

(1) 「誰が、何を、どのようにして」評価してきたか

主体 \ 対象	授業者	学習者	学級集団
授業者	指導 形成的評価	プログラム イメージテスト	観察による即時評価
学習者	内容分析		
観察者	評定尺度法による授業評価		

(2) 学級についての評価

学級経営こそ、よい授業の基盤である。よい授業の下地は、学級づくりにあると思ふ。私は、授業設計、分析以前の問題として大切にしている。そこで、子供達に学習をしやすくさせることが重要なので、学級への所属感、連帯感等の満足度を知り、学級の人間関係、雰囲気づくりに配慮したいと思ふ。学級について児童に評価させて

いる。

(3) 授業者側からの評価

① 指導プログラム

研究の視点を明らかにした指導案(具体的に、内容、方法がわかり、評価の観点をも含むもの)を作成し、参観者もその視 points に印した目でとらえていく(目標の達成度を具体的にとらえ、指導法を検討することができる)指導案にしている。

② 形成的評価

指導過程において、子供が目標に向かってどのように進歩しているかを評価している。それが、授業の展開途上で行う評価反応では、欲求性が求められる。この時、教師の経験や勘を統帥して児童の表情、挙動、挙手の状況を観察、診断したりすると誤診もある。本校では、AN、AQを用いて、全ての学習者に、自己の意思で反応させている。それが「わからぬ」と答えたのか診断を下し、誤答者が多い場合は、誤答傾向に気づいた治療と補足説明を行ない、学習者ひとりひとりに心を感ずる付与し、また、正答者が多い場合は激励の言葉をかけて学習に意欲的にとり組む工夫をしている。この学習の節々で即時評価をして授業を進めることは、落ちこぼしをなくする点からも大切なことだと思う。

③ イラストによるイメージの表出

授業改善を目指した評価のねらいは、「評価が授業によって児童にどのような変化を生じさせたかを確かめ、授業のどこをどのように修正すべきかを明らかにする」ものでなければならぬ。

この点から考えると、このテストは、指導効果、反省点などわかり、その上、思考や概念の形成度を測定していきるので、個々の子供に対して指導を試みるのによい。

④ 観察による即時評価

机間巡視、発表内容等により、「協力し合うようになったか」「授業への集中力が高まったか」「班活動が活発になったか」等々、学習への参加度、集中度、理解度、学習意欲及び班での話し合いの深まり具合を知り、集団への高まりをとらえている。

(4) 学習者側からの評価

○ 内容分析

——④ 学習者が授業者の教授活動を評価する——

教師の独断を排するには、学習者がどう受けとめたか、その評価を大切にしたい。

「先生の説明がわかりやすかった」「OHPの使い方がよかった」「A/Vの使い方がよかった」「先生の質問の意味がよくわかった」「考えたり予想する時間は十分あった」等々の質問項目を作成し、授業評価に用いた。

——⑤ 学習者が自分の学習行動を評価する——

授業の中で、子ども自身が自分の行動をどのようにとらえていたか、またどんな反省や逆に意欲をもつに至ったか、子どもの証言として大切にしたい自己評価である。

「習ったことはまとめられた」「発表が十分できた」「聞きたいことは聞いた」「社会の勉強は楽しかった」「社会の授業に真剣にとりくんだ」「友達の発表はよくわかった」等々の質問項目を作成し、調査した。

子どもの理解度、興味、関心、意欲、参加の程度がとらえられた。

——⑥ 学習者が自分達の学級全体を評価する——

授業を通じて、子ども達が学級全体の雰囲気についてどんな進歩を感じとったかを調べ、それによって授業評価をする。

「学級の人々はよく勉強した」「班の人はまじめだった」「班の人と協力できた」等の評価を子ども達に相互に行わせることにより、集団の高まりをとらせることができる。

教師側からの学級集団評価に終わらず、子どもの側からそれを裏付けることも大切かと思う。

(5) 観察者側からの評価

○ 評定尺度法による授業評価

参観者に、「児童について」「教師について」「授業時間全体について」の視点表に記入してもらった結果をもとに集計したもので、この評価により、授業者には見えにくい授業の実態を多く目の目でとらえ、児童の実態やゆらぎに即した指導のあり方を追求できる。

3. おわりに

評価とは、児童にテストというものさしを当てて、できる子どもとできない子どもに分類することではない。

教師の側からは、評価の結果による資料に基づいて、授業の指導計画や指導方法の改善をはかり、児童に進歩や欠陥などを知らせ、各自の指導に役立てるためのものである。

また、児童も自分を評価することによって、自覚的な学習が進められる。
だから、子ども達の学習意欲を高め、方向づけていくには、的確な評価が大切だと感じる。この評価により、ひとりひとりの子どもの学習が成長するようになり、ひとりひとりの学習が互いに深まるものと思える。「イメージテスト」が、児童の成長を促すのに役立つ。授業の中で、児童の成長を促すために、授業の進め方を工夫し、児童の成長を促すようにしたい。

研究主題

評価の工夫

— プリテスト・ポストテストの方法による評価の有用性 —

兵庫県龍野市立龍野小学校 教諭 八瀬 典喜

I はじめに

評価は元来価値を判断し決定するという意味である。教育における価値は、目標であり指導によってこの目標がどれだけ達成されたかを判断し決定するのが教育評価であるといえよう。

学期末になってあわててテストし、ただ通知票や指導要録につけるための「成績を知る」ことに終わってしまうような評価(管理評価)でなく、学習効果の判定を資料として、教師の指導に対する反省と今後の指導に役立てると共に、児童の自己反省と向上に役立てる指導評価を私は大切に考えたい。

従来私は、授業の組み立てとして、課題提示→個人で考える→グループバズ→全体討議というパターンを取り入れてきた。反面、行事等で時間がカットされた場合など、グループバズを割愛して課題提示→個人で考える→全体討議という形態で進め、子供達を算数ざらいに追い込むような無暴な授業を行い、また最初からやり直すという苦い経験をもっている。

子どもひとりひとりが、問題に真剣にとりくみ、定着させるためには、従来の授業の上へ 目標→評価の位置をはっきりさせる必要を感じた。そこで、プリテスト→課題提示→目標→個人で考える→バズ→全体討議

→ポストテスト→ポリテストのように授業を組みかえて行った。ここはプリテスト・ポストテストの方法による評価の有用性、児童の自己評価相互評価（特に態度目標について）の有効性についての ささやかな実践を記してみたい。

2 児童の実態

6年八瀬学級 男子18名 女子14名 計32名

IQ	段階	人数	%
120以上	5	0	0
107~119	4	11	34
93~107	3	13	40.6
80~91	2	6	19
55~73	1	2	6

算数学力診断 1980. 7. 3実施

段階	人数	%
5	0	0
4	12	37
3	13	40.6
2	5	16
1	2	6

1980. 6. 24実施

- ・ 計算は好きが こみいった応用問題をとくのは苦手な児童が多い。
- ・ ここまではわかるが ここがわからない といえる子が 徐々にふえていくが 頭からむずかしいと思っている子が数名いる。

3 6年算数「変わり方を調べて」の学習

—プリテスト・ポストテストの方法による評価—

イ 単元の目標

2つの数量を変化させて、その和や差や積などの変わり方を調べて問題が解けるようにする。

ロ 指導計画（4時間）

2つの数量の和や差の変わり方のきまりをみつけて解く問題……2時間

2つの数量の積などの変わり方を調べて解く問題……………2時間

ハ 数量の変化の「表」を利用して解く問題について
段階

- ①「表」を書いていって、表から解を見つける。
- ②「表」を書いていくうちに 変わり方のきまりをみつけて、そのきまりを使って解を求める。
- ③「表」を詳しく書かなくても、変わり方のきまりをみつけて式を見出し解を求める。

変化のきまりを見つけたり、確かめたりするための「表」の役割は大切で、数量の関係を見ぬく力を育てることができるので、本单元でも表をかいたり表したりすることを重視して進めることにした。

ニ プリテストとポストテストは 同一の問題を教科書の中からとりあげた。把持テストは 他の問題

問1. 問2. 問3. 問4 別紙

- ・プリテスト… 学習前の学力(知識・技能)を診断する。
本時の学習目標(学習内容, 見通し, ポイント)を把握させる。
- ・ポストテスト… 学習したことを話したり、書いたりすることによって、認識させていく。知識・技能の確認と定着をはかる。

・結果 (個人別得点)

把持テストは10日後に実施

班	氏名	事前テスト	事後テスト	把持テスト	班	氏名	事前	事後	把持	班	氏名	事前	事後	把持	班	氏名	事前	事後	把持
1	1 YIA	50	100	85	3	9 野	100	100	100	5	17 藤永	50	75	55	7	25 藤原	75	75	50
	2 内海	50	100	70		10 春名	50	100	70		18 伊藤	50	100	100		26 遠山	0	100	70
	3 土居	0	50	70		11 上谷	0	100	100		19 湯浅	65	100	100		27 有元	75	100	95
	4 神田	50	100	85		12 西川	0	75	20		20 西井	25	85	35		28 藤田	50	100	80
2	5 松本	75	100	100	4	13 平岡	25	100	90	6	21 飯田	100	100	100	8	29 若松	75	100	100
	6 井上	75	100	100		14 島津	50	100	65		22 藤井	0	100	70		30 青木	75	100	100
	7 田口	50	75	100		15 鎌田	75	75	100		23 中野	25	100	85		31 谷口	50	100	100
	8 大井	0	25	10		16 松井	25	50	70		24 森久	100	100	100		32 塚本	70	100	90

・結果 (正答率)

	プリテスト		ポスト		変化	
	式と表	表のみ	式と表	式と表	表のみ	
問 1	7: 22%	14: 44%	29: 91%	69%	47%	
問 2	2: 6%	9: 28%	29: 91%	85%	63%	
問 3	1: 3%	11: 34%	28: 87.5%	84.5%	53.5%	
問 4		14: 44%	28: 87.5%		43.5%	

ホ 「事前テスト」「事後テスト」に係る児童心理調査

プリ・ポストテストを行ったことが、どれだけ授業にいかされているか、児童の心理調査を試みてみた。その結果は次の通りである。調査問題は別紙。

人数は32名中

事前テスト		事後テスト	
項目	人数	項目	人数
1	5(名)	1	23(名)
2	0	2	21
3	24	3	8
4	27	4	11
5	24	5	1
6	12	6	20
7	必ずしも表が何と何が解らなくて悩んだ、等	7	前に一度はテストなので、思い出し考えよくわかった、等

へ 考察

○ プリテストは、この授業の中身を学習することによって解ける問題をテストするのだから、プリテストの段階では解けないのが普通である。しかし、子供達は従来の経験を総動員して、アイトをもちとりにくんだ。そして考えていくうちに、本単元の目標がなんであるかをとらえ、学習する事がらがはっきりしたのでよかった、と

いうことを調査で指摘した児童が多かった。(プリテストの有用性)

- プリテストによって、本時の目標がはっきりしているので、積極的にとりくもうとした児童の姿が伺えたし、テスト結果にも表われている。
- 目標→取り組み→評価の流れがはっきりしたことと併せて、バズによる相互援助により理解度が高まったことは確かである。
- 教師も、授業の良否を自己評価し、子どものつまずきがより明確になり、次時への指導の手だてが生み出されていった。
- 把持外が真の学力につながるものであると考える時、授業後の練習、応用についての工夫が必要である。

4 自己評価・相互評価の有効性

—特に態度評価について—

イ 自己評価… 自他の優劣の比較はしない。
 自分は「どれだけのびたか」をみるのを主眼とし自分を
 見つめる評価をする。

例1 自己点検表 学習後行う。3, 2, 1で記入

項 目	月・日・曜			月	火	水	木	金	土	日	月	火	水
	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()
1. きの勉強はよくわかりましたか。	よくわかった	わかった	わからなかった										
2. 自分の考えと比較して友達 の考えをいっしょにめいきましたか。	よくきけた	きけた	きけなかった										
3. きょうはよく発表しましたか。	よくできた	できた	できなかった										
4. ひとり調べ学習の用意ができましたか。	よくできた	できた	できなかった										
5. 質問に対して説明方法を考え援助されましたか。	よく考えた	考えた	できなかった										
計													

例2 生活点検表 終会で〇×で記入

学校の目標	増 進 目 録	日 記	漢 字	自 学	あ と ま つ	目 標	返 事	ハイ イレ の	あ と ま つ	あ と ま つ	あ と ま つ	あ と ま つ	あ と ま つ	あ と ま つ	あ と ま つ	あ と ま つ	あ と ま つ	計	
																			月
個人の目標	月																		
	火																		
	水																		
	木																		
	金																		
	土																		

ロ 相互評価… グループで協力して行うこと。助け合いはげましながら
 行ったことについての評価をする。

例1 ミニテスト（漢字・計算） 基礎的な面の定着をはかることをねらいとする。
 朝の会のあとに実施、グループ平均ののび率を評価する。

例2 清掃態度の点検表 終会に発表する。

2班 氏名	目 標	月	火	水	木	金	土	日
山口	口をとじてする。							
大井	おじ場所へ早く行く。							
井上	すみすみをきれいにする。							
松本	あとしまつをきちんとする。							

- AA君は少し怠けたので注意しました。そのあとはきちんとできました。
- OOさんは放送の用事でできなかったが、XXさんが援助してくれてよかった。
- 協力はよくできたけれどあとしまつがおしかって注意されました。

5 おわりに

45分の授業時間が限られているので、プリ・ポストテストの時間をあまり多くとれない悩みはある。しかし 時間がないとは言いつつも、この事前テストが子供への意欲づけに 大きな影響を与えていることを考える時、事前テスト実施のための時間が無駄ではなかったといえる。今後とも 教師の指導の良否を自己評価すると共に、児童の授業へのとりくみを より積極的に進めるためにも、プリ・ポストテストを数多くとり入れた指導を押しすすめていきたいと考えている。

把持テストの結果、定着度の低い児童に対して、その原因をさぐり、自己評価、相互評価の上に立った適切な方策を講じたい。

中学・高校の部

主 題

生徒の主導性を生かした柔道指導の検討

—— バス学習の教育心理学的研究における
アクション・リサーチの一環として ——

三重県立朝明高等学校 伊藤三洋

1. はじめに

本授業の目標は、1)寝技の技能を試合を通して実践的なものとして定着させる。2)チームによる学習活動と団体戦を通して、協力して互いの技能を伸ばす態度を養う。3)自己の技能を正しく知って練習を工夫する態度を身につける。の3点である。

この目標下において、生徒の主導性を生かすことを目的として、異なる3タイプの授業を実践し、授業間の比較検討を行なうとともに、事前-事後のテストを用いて、実証的な検討を行なった。

2. 本校生徒にバス学習を導入することの意義

バス学習は学校黒板追放にも有効である。また、バス学習における教育心理学的な研究からは、学習課題を明確に提示することの重要性が明らかにされてきている。

さて、本校は、創立4年目の大規模な普通科の高校である。したがって、本校生は、これまでには高校へ進学できなかった能力の生徒である。当然のごとく、彼らは、本校の名前を三面記事へ提供している。

筆者は、盛岡先生の下を離れて、本校に赴任したが、本校生の学力の低さとそれからくる教師に対する反発におどろいた。

学校生活を通して、生徒を観察するに、教師の指導目標を明示すれば、生徒連なりに考え、討議して、それなりの成果をあげる。という様子が見えたと、本校にバス学習を導入する意義があると思える。

3. 授業条件設定の理由

当該教科の内容の習得と、その習得過程で同時的に行われる社会的諸態度の形成という2領域の同時達成に有効と思われる示唆をLindgren (1972) から得た。彼は、生徒-教師間の相互作用のネット・ワークを織糸にしたものを提案している。それを具体化した形態として、小集団を活用する指導が最も適いと考えられる。しかし、学級内をいくつかのグループに区切って、課題を与え、授業を行なったとしても、小集団の持つ積極的な機能の発揮は期待できない。

さて、集団とは、Kelley & Thibaut (1969) の「成員が共通の課題を受け入れ、その達成に相互依存的になり、その成備を促進するように、互いに相互作用を営むことにより、集団となるもの」であれば、本授業で扱う渠道は、二人が組み合っているという外觀のみをもって、そこに集団の多様な効果を期待するということはできない。即ち、それだけでは、前述の集団としての条件を備えていないからである。

したがって、渠道における対人的形態を小集団にまで組織した形での指導を検討することは、有効な小集団活用条件を求めると方向の上で意義がある。

本授業実践は、渠道指導に小集団組織を導入し、小集団をより効果的に活用し得る条件を求めると2つの問題を取り上げた。一つは、編成した小集団の組み替えの時期である。適度な小集団の組み替えは学級集団全体の成長に重要な意義を持つことは塩田・阿部 (1962) で指摘されている。渠道では、一般的にできるだけ多くの相手と関わりを奨めるが、その学習単元を見通すという観点から、1単元程度の期間では、小集団を固定し、集団成員間関係の成熟を図る方がその機能を十分に発揮できるという報告がある(阿部)。

今一つは、小集団活用上の条件の一つである「明確な集団課題を提示」した上で、小集団内成員による活動の自由度の高・低いずれが有効であるのかとする問題である。

「(生徒の)自由な立場から生徒の内発的動機とか、自主性を生かした技能の追求の場を多く設定してやる」ことか柔道指導にも大切であるという所部(1981)の示唆から、授業展開の過程で、このような機会を準備することによって、生徒による学習手順の工夫、個々の得意技の発見、或費用の自由な相互作用、或費用々に応じたペースによる授業展開など可能にする条件が生まれ、技能領域、態度領域の同時達成に有効と予想する。

4. 方法

表1 設定した条件と指導過程の概要

条 件	I	II	III
集団編成の条件	単 元 内 固 定	時 限 毎 に 編 成	
指 入	<ul style="list-style-type: none"> 出席点呼 礼 準備運動 本時目標の「本時の目標」を掲示により、技名、秘 		
指 入	<ul style="list-style-type: none"> 一斉指導形態による教師主導の指導をおこなう。 		
指 入	<ul style="list-style-type: none"> 既習技の復習、練習の組み 練習相手はチーム内で選 		
指 入	<ul style="list-style-type: none"> 合せ、技の進ぶが、練習の手順は教師が 否のチェック指示する。 等、チーム内 技の手順についても教師 の話し合いには細かく介入し、チェック 		
指 入	<ul style="list-style-type: none"> よって運営。しながら指導する。 		
指 入	<ul style="list-style-type: none"> 試合のため、次の試合(団体戦)のための出場オー ダのオーダー決一を、チーム成員の技量と相手チームの メンバーを材料に、チーム内で話し合い 、作戦を練り、決定して、オーダー用紙 		
指 入	<ul style="list-style-type: none"> に記入する。 		
指 入	<ul style="list-style-type: none"> 試合(団体 教師の指示にしたがって、試合を進行 戦) する。 		
指 入	<ul style="list-style-type: none"> 試合の反省 チーム成員間で話し合う。反省事項の 記入。 		
指 入	<ul style="list-style-type: none"> 整理運動 整列正座 礼 		
指 入	<ul style="list-style-type: none"> 一斉指導形態による教師主導の指導をおこなう。 		

筆者が満足に授業を行ないえた高校2年Bのクラス、3学期のうら、満足な資料を提供した119名を対象とする。

各クラスとも、技術的側面を集団的側面となる5人集団を構成し、教材は寝技(寝技間、上四方固)の復習と団体試合を、表1のごとく手続きて、取扱う。指導の物質は技能的側面の事前、事後テストと、最終授業終了後に行なった費用紙調査による。

ここで、あらためて注意を喚

起したいのは、'生徒の主導性を生かす'こと、即ち、小集団での生徒の活動の自由度を高める。ということは、指導方法論上の「教師中心-生徒中心」の次元上の単なる「生徒中心」としてとらえるのではなく、本研究所は、生徒の活動の志向性を明確にすべく、指導者がさるさるところに配慮を加えているところに注意して欲しい。

とくに学習課題と指示によって明確化し、集団課題として成員がすべて方向に方向付けされている点。また、課題の内容についても、ここでは団体試合を導入して、生徒の動機付けを図っている。さらに、とりあげた3つの条件は、ともにこのような同一の配慮を得ているがゆえに、本研究では、「明確な目標へ方向付けされた上で、生徒の活動の自由度の高低を問題視している」ことに着眼された。

5. 結果と考察

主要結果は、表2に示す。

技能は、どの条件下でもよく進歩した。とくに、条件Iの進歩量は他の2条件に比べて有意に高い。また、条件IIとIIIにも有意な差が認められた。

満足度は、5つの側面について

質問した。柔道授業、学級成員間の相互作用、学級内他成員、チーム内成員間相互作用、の4側面では条件間に差はみられない。チーム仲間に対する満足度で、条件IIがIIIに対して有意な差を示した。

その他の中では、仲間が技能の改善のための指示を多くしてくれたとする回答は、条件IIが他の2条件よりも有意に多かった。

本授業実験から得られた知見として、①これまでの指導経験と照して、導入部で課題を明確にすることは、どの条件でも積極的な効果を得る。②授業ストラテジーを固定すると、生徒が見通しを助けて授業に参加するので効果も高くなる。ことをあげることができる。

文 献

杉江修治・伊藤三洋：学校体育における柔道指導法の改善——効果的な
 II 集団活用法の実験的研究——
 武道学研究 14-1 844-50 1981.

表2 技能、満足度の条件別平均値 ()内SD

条 件	I	II	III
N	40	40	39
事前テスト	6.77 (1.16)	7.45 (1.43)	6.51 (1.80)
事後テスト	14.74 (0.98)	13.80 (1.35)	13.62 (1.23)
進歩量	7.97 (1.26)	6.35 (1.41)	7.10 (1.55)
課題(柔道)	5.65 (1.60)	5.63 (2.09)	5.72 (1.96)
学級内相互作用	7.03 (0.90)	7.25 (1.48)	7.26 (1.50)
学級仲間	6.97 (0.86)	7.15 (1.33)	6.95 (1.18)
チーム相互作用	7.52 (1.24)	7.55 (0.86)	7.67 (1.47)
チーム仲間	7.45 (1.13)	7.93 (1.15)	7.38 (1.17)
仲間からの指示有	2.89 (0.91)	3.73 (0.77)	3.08 (0.97)
仲間への指示有	3.29 (0.81)	3.25 (0.89)	3.15 (1.10)
目標の自主設定有	3.42 (0.71)	3.35 (0.65)	3.31 (1.02)

バズ学習による知・徳・体の調和のとれた

人間性豊かな生徒の育成

—— 班活動を通じた学習集団づくり ——

愛知県春日井市立東部中学校

林 敏 明

1. はじめに

生徒数1,590名余, 職員数60名余, バズ学習の研究を始めて13年になろうとしている。しかしながら全校的な共同研究体制を持続しながら, 実践の蓄積や研究の深化を図っていくことは極めて困難なことが多い。今年度の研究の焦点をどこにおくかについて4月当初話し合い, そしてさらに学年単位で教師や生徒の状況に照応しながら目標や計画を決定していった。新1年生を迎え, いかにして早くバズ学習を母体とした学校体制の中へ位置づけていくかが, 1年生の学年にかせられた課題である。そこでバズ学習の体制を基本にたちかえり, 徐々に系統的な実践を推進していくことにした。

2. 主題設定の理由

本年度の本校現職教育の主題が「バズ学習による知, 徳, 体の調和のとれた人間性豊かな生徒の育成」と設定された。これは新学習指導要領のねらいの1つに共通している。すでにこの課題には「認知的目標と態度的目標の同時達成」というきり込み方で取り組んできた。しかしその後の長年にわたる職員の定期異動等によりバズ学習の推進者も異動をよぎなくされた。年度末の反省においても, バズ学習の形がい化を憂い, 何とかしなければという意見が多く, バズ学習に対する評価はたえずゆれ動いている。ひとりひとりが基本的な原理にたちもどって生徒・職員ともども学習をしていかねばならない。そこで知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな生徒の育成という学校教育のねらいに立って, バズ学習を見直し, 班活動を通じた基本的な学習集団づくりの達成を図ることにした。

3. 研究の方針

- (1) 学年現職教育委員会を中心に原案を作成し、学年部会の共通理解のもとに共同研究をすすめる。
- (2) 生徒ひとりひとりの学習面、生活面の実践記録を累積し、個別指導、班指導を通して学習集団づくりへと発展させる。
- (3) 学級会、短学活の指導を通して基本的なバズ学習ルールの定着と体制づくりをすすめる。
- (4) 毎日の授業を大切にし、具体的な実践目標を決めて授業研究や授業公開をすすめる。
- (5) 教師集団の共通理解を深めるために理論研究と実践をすすめる。

4. 研究の方法

- (1) 月1回の学年現職教育において実践計画にもとづく目標を決め、反省を加える。
- (2) 学級における指導の実践記録を累積する。
(生活ノート、班日記、学級日誌、定期テスト綴り)
- (3) 学級会、短学活の指導実践を記録し、累積する。
- (4) 授業研究の実践をする。本校の今年度の実践目標である「学習の基本ルールの定着」と「短学活の定着化」を2本柱として班活動を通じた学習集団づくりを学年の研究主題とする。
- (5) 参考図書による学習会を行う。

5. 研究計画

○ 第1学年研究計画・実践

月	学級会活動	短学活	授業研究
4	仲間意識を高める	1日の生活の反省 一斉形体による連絡・確認	
5	班編成を考える 基本的学習ルールの育成	短学活を考える	数学科
6	班日記の指導	短学活のパターン化 班日記の反映	技術科
7	バズ学習の育成(バズ学習の基本)	短学活の問い直し(必要性と効率化)	英語科 ・中間のまとめ
9	班編成を考える バズ学習の育成(効果的な話し合い方)	効果的な短学活	社会科

10	話し合いを高める(その1, パターン化)	短学活の公開(朝)	道徳 ・評価法についてのまとめ
11	話し合いを高める(その2)	短学活の公開(帰)	国語科
12	話し合いを高める(その3)	短学活の現状と問題点	↓保健体育科
1	班編成の見直し	短学活のパターン化	理科
2	バズ学習の定着と問題点	短学活の公開・評価	・反省と方向性
3	研究のまとめと反省	研究のまとめと反省	

5. 実践

(1) 学級会活動から

ア, 仲間意識を高める。

- 一列にも班にも慣れるようにする。 一列 ↔ 班 時間や教科によって臨機応変に体験を積ませる。
- 係活動の充実, 係活動の反省を加える。
- 学級指導において「個人及び集団の一員としての在り方」の指導をする。
- 三者懇談において「新しい学校生活への適応」についての懇談会を開催する。
- 個別面接において個人的な悩み, 不安の解消を図る。

イ, 班編成を考える。

- 班編成の実際。班編成は機械的に行わない。学級毎に種々の方法で取りくみ, それぞれの利害を体験させる。(編成方法, 編成の目的, 班長の選び方, 人数, 期間, 座席の決め方など)。「班」は共通の目的にむかって相互活動を続ける学習の集団であり, 生活の集団であることの認識を持たせる。(班目標, 班責任, 班競争, 班作業, 思考, 班を単位とした学級活動など)
- 一斉学習(一列)とバズ学習(班)との学習面, 生活面における効果の比較検討。

ウ, 基本的学習ルール の育成

- 「チャイムと同時に活動開始」一学期当初の学年目標とする。
- 授業中の姿勢, 答え方の指導をする。
- ハンドサインの定着をする。サインの図を学級内に掲示する。
- 基本的学習ルール の徹底事項を決める。まず学習をすすめるにあたって, 一人一人に基本的な学習習慣を身につけさせることが必要である。バズ学習を含めた一般的なルールにつ

いても当然考えていくものとする。「先生に注目」「ハイと答えて最後まではっきり」など16項目を書いたプリントを生徒に配布指導。特に必要性の高いものから順に2項目ずつにしぼって指導する。

エ、班日記の指導

- 班日記を書く意味の指導をする。
- どんなことをかけばよいのかを指導する。
- 班日記で何をどのように指導すればよいか、助言の与え方、取り扱い方などの職員間による打ち合わせをする。

オ、バズ学習の育成

- なぜバズ学習に取りくむのかを職員間でまず話し合い、その意義を認めた上で生徒の指導にあたる。
- バズ学習の原理は何か。三つの目標の認識（学習への積極参加、理解の拡大と促進、態度の変化）をし、原点に立ちかえりバズ学習の見直しを図る。

(2) 短学活の指導から

ア、生活の反省

- 生活目標（学級目標、班目標）を設定する。朝の短学活で目標を決め、帰りの短学活で反省をする。（その後、帰りの短学活で翌日の目標も決めるようになった。）

イ、生活ノートの活用（一部抜粋）

月日	予	定	下校	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2							
㊦ 七月 十一 日				自由	ク	ラ	フ	中	復	習	プ	リ	ン	ト	す	い	眠			
	家庭学習	3時間	30分	A	B	C	自由	ク	ラ	フ	復	習	プ	リ	ン	ト	す	い	眠	
㊦ 七月 十四 日	個人	こ	ん	談																
	家庭学習	2時間	00分	A	B	C	ク	ラ	フ	基	英	中	復	習	プ	リ	ン	ト	す	い

ウ、短学活を考える。

- 一学期当初の短学活
 - ・朝の短学活……健康観察，朝の学習，生活目標

- ・帰りの短学活……生活目標の反省（生活ノートの活用）

学習ポイントの確認 → 家庭学習の計画

○短学活の見直しを図る。

- ・基本的に一定のパターン化をはかる。
- ・新しいよい方法があればそれをすすめたい。（学級の独自性）
- ・生活のリズムを正しくさせていくように申し合わせる。
- ・短学活の現状報告をし、各学級での取りくみ方や問題点を報告する。

現状の短学活の一例

朝の短学活（火，水，木，金，土）	帰りの短学活（水，木，金，土）
8:15	8:35
	・授業の反省
・健康観察	・係活動による練習問題
8:20	・一日の学習反省，授業ノートの点検，整理
	・水，木，金，土曜の4日サイクルによる復習
・朝の5分間学習	8:45
8:30	
	・生活目標の反省，明日の目標
・諸連絡	8:50
8:35	
	・諸連絡，生活ノートの予定の記入，家庭学習計画
	4:00

6. まとめ（今後の方向）

- (1) 班の相互活動の意義の問い直し，班長指導
- (2) 効果的な話し合いの方法の実践，三期に分けての指導
 - ア，話し合うとはどういうことか
 - イ，話し合いの場面とそのかたち
 - ウ，話し合いの約束
- (3) 短学活の公開を通じた学習会。（効率化，主体性，評価方法）
- (4) 主体的な朝学習の定着と評価，確認方法

研究主題

学力と人間関係

—— 学力の向上と態度の育成 ——

姫路市立白鷺中学校

高磯忠實

1. はじめに

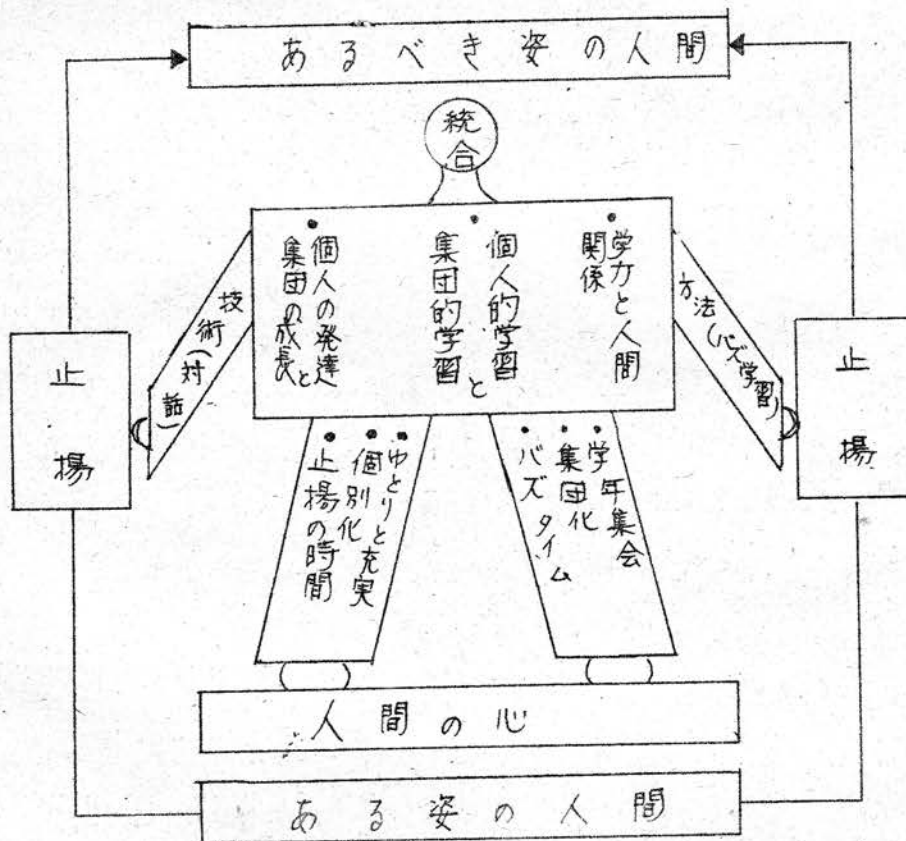
本校は昭和51年～53年にかけて生徒指導上の問題が続発し、非行が集団化し、授業がまともに行なわれる状態ではなかった。問題行動が発生するたびに、規則、規律と管理的補導で生徒を追いまくり、もう一方で一般生徒の無関心、無気力な態度を培っていた。そこで教師や保護者が一体となり、学校生活の建て直しをはかり、根本的な問題解決のためのとり組みを考えねばならなかった。そこで問題生徒の管理体制を強化し、問題行動が発生した時に、応急的な予防や治療を行なうのではなく人間関係を基盤にした指導体制を確立し、根本的、本質的变化をめざす積極的な生徒指導を押し進めようという取り組みが行なわれるようになった。人間関係を基盤にした「統合的教育」それは我々教師にとっても大きな価値基準の転換であった。一方では協力や親切を説き、他方では競争的、排他的にならざるを得ないことに対する反省が生まれてくる。学習指導、生徒指導(教科内、外)教育環境～あらゆる分野における見なおしが行なわれた。私たち教師・生徒の共通理解のもとに次のような試みを行ってきた。

2. 止揚(統合)の教育

矛盾した建前論的な教育の反省から～問題生徒を生まないため、学習の効率を高めること～人間関係を基盤とした統合的教育を進めるため、バス学習の形態をとり入れ、実践を重ねてきた。その結果、問題生徒は

減少し、自主協同のもとに新しい学習方法を身につけた学級集団が育ちつつある。いがみあいつつも人間は集団の中でしか生きられない。よく生きようとすれば集団の中で個を主張し、他を排除しようとする。個の主張がすすめば孤独となり、相手を求めようとする。人間は矛盾と対立に満ちた非合理的な存在である。そのような人間の心を爆発させないで、教育の究極の目的である「あるべき姿の人間形成」をはかるとすれば、個と個、個と集団の矛盾や対立、相求を突きとめ、相互の否定や関連をもとに価値葛藤を行ない、一段と高い段階で統合する教育が必要である。

学力と人間関係の同時達成をめざす止揚（統合）の教育を具現するため、学校生活のあらゆる場に「話し合い」を中核にすえ、それぞれが有機的に関連しながら学校生活が展開されるよう配慮する。



3. 学力と人間関係の同時達成をめざして

(1) 授業での実践

○ バズ学習の形態による指導

個人学習と集団的学習、個人の発達と集団の高まり、1時間の授業の流れの中で基礎学力の定着をはかる。全員が発表し、役割をもった学習を実現するため、課題によるバズ学習の指導形態を考えた。つまり1時間の授業の流れの中で生徒たちに話し合いの学習をさせる。生徒たちは活発に自己の考えや意見を出し合い、価値葛藤し、わからない所は教えあい、協力して課題の解決にあたる。こうした一環した流れを通じて、生徒たちは相互の理解を深め、学級内の人間関係は改善され、協力的、許容的なものとなり、生きた学習がみられる。このような状況実現をめざしてとりくんできた。(別紙※ア)

(2) 授業外での実践

○ 止揚の時間 (ゆとりと充実の時間)

あるべき姿の人間形成の場として本校教育の中心におき (知・徳・体) 調和のとれた、ゆたかな人間を育成し、自ら考え、行動する力を身につけさせる。毎水曜日全校クラブの時間と合せて、午後の2時間をとり、学年を前期・後期にわけて実施している。自主的、創造的学習をすすめ、個性、能力に応じ学習の個別化をはかり、相互作用をくり返しながら、学力と人間関係を止揚することをその目標にしている。無学年、無学級制で教科学習の延長として22コース (1コース20名) を設定し、全校生を対象に全職員があたる。各自に半年間の研究課題を設定させ、コースを選定させる。各時間ごとに自己評価させ、最後に研究発表会を設ける。

○ バズタイム

対話を通して各個人の向上をはかり、学級内での人間関係を高め、学習活動の基盤としての学級集団づくりをめざすために生活バズと復習バズをとり

入れている。生活バスは毎日行なっているが、生活バスと復習バスを続けてのバスタイムは火、木の6校時に実施している。バスタイムのすすめ方は全員参加とするために学級にはリーダー、学習長、生活長、健康長をおく、班は4～5人編成とし、話し合いを深めるために同性がそれぞれ対角線になるよう配置している。

○ 学年集会

毎土曜日35分間、バスタイムでの問題点、その他学校生活上の問題点などを話し合いながら、学年レベルでの人間関係を深める。

○ 集団宿泊訓練

寝食を共にした2泊3日の規律ある共同生活を通して、学校や家庭生活などで経験できない学習や望ましい人間関係を体験したり、諸行事を通じて、ひとりひとりが役割遂行の満足感をもって、共通目標に参加し集団の士気凝集性を高めていく。

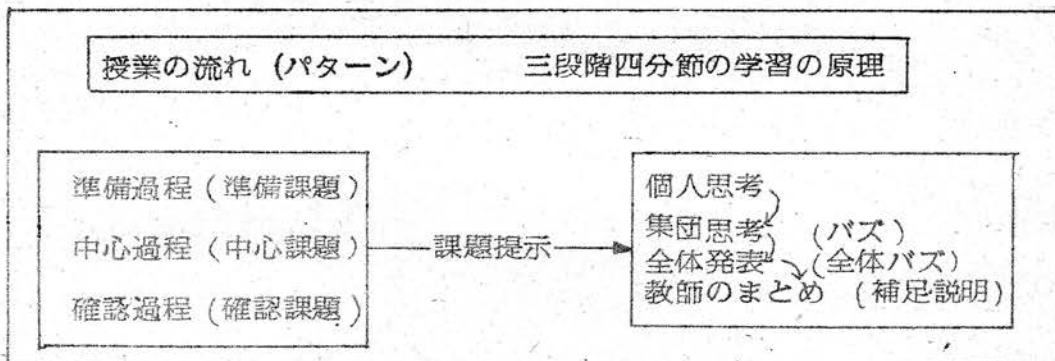
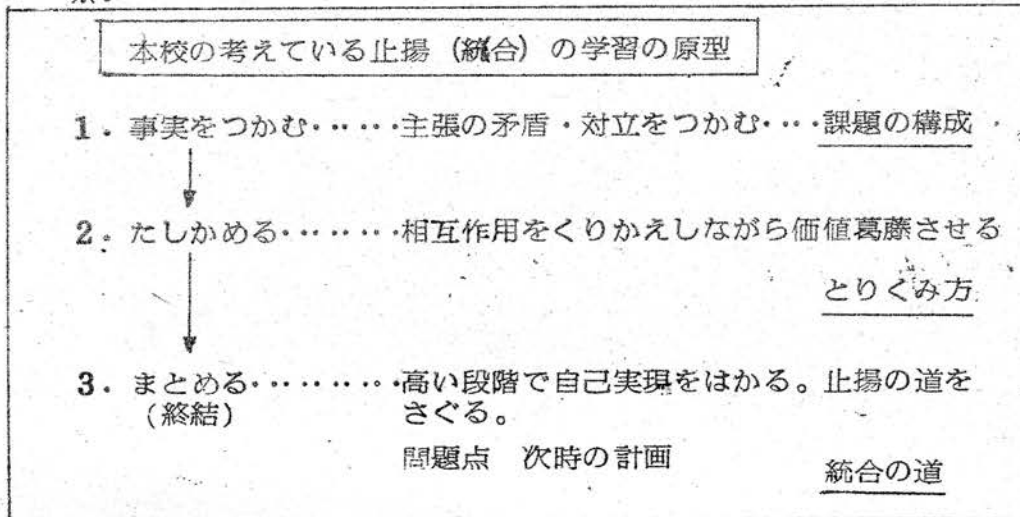
○ 部活動

部活動は上、下級生が学年の壁を越えて、共通の目標に向かって努力し、全校的視野に立っての人間関係の確立が一つの目標となる。そのため規則規律、礼儀作法、協力や団結、忍対、はげまし合いなどの人間関係のルールが重視される。

○ 親と子の対話集会

各学年ごとに全生徒と保護者、当該学年担当教師が参加し、共通の問題について、またその問題から派生する諸問題について、パネル形式で、バスを取り入れながら大集団で話し合う。親子断絶の問題でさわがしい世の中です。親と子がそれぞれに理解し、家庭における望ましい人間関係の形成に有効であると考えている。

※ア



4. 今後の課題

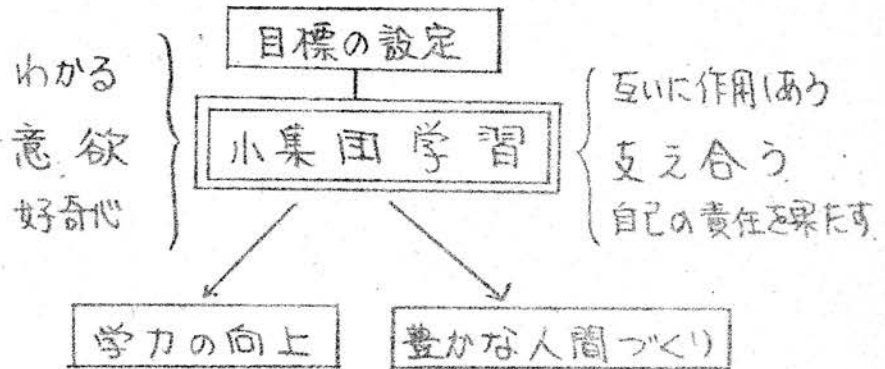
— 過去をみることにより、現状から未来をみることへの飛躍、
未来をみる評価表をつくり、診断と処方を整えて実践すること —

（昭和55年9月5日本校の授業を参観された後の講演の中から）

本校の生徒の実態把握および分析から端を発し、人間関係を深め、学力を高めることを目標に実践をくりかえしてきた。まだ十分とはいえない。学校教育全体の教育活動の中で実践されることにより目的が達成されると信じている。

第16回 全国バス学習研究集会 分科会 8
 学力を高めながら人間関係を深める態度の育成

1. はじめに 兵庫県加西市立北条中学校 森田 薫



2. 小集団づくり

ア. くみづくり

4~5名のグループで
 班長の指導, 班ノット, 班長会

イ. 小集団のつけ

個人で考える

↓
 小集団学習

なるべくたくさんの方
 正反対の考え方
 だれの考えが正しいか
 まちがった考え方は
 最もよい考え方は

しかり聞き
 互いに相手の
 考えをわかり
 合う

↓
 全体(学級)で話し合う

ウ. 訓練

問題の確認, → わかっている事, 求める事, 知りたい事はく

→ 式を考える, 計算する → まとめる
 → 図を書く, 証明する

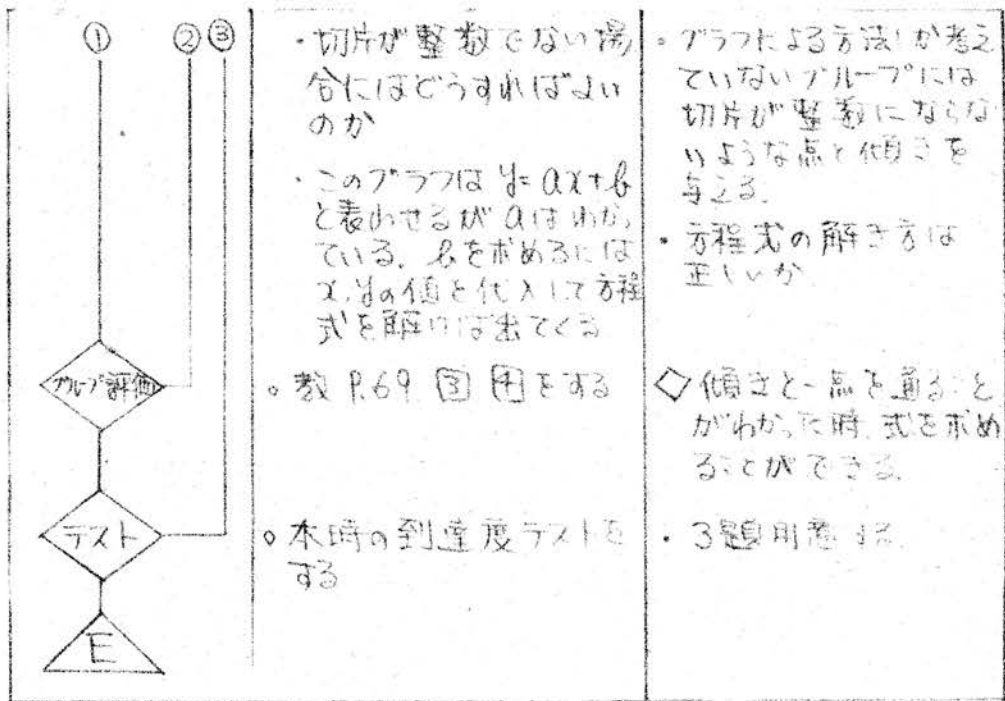
学習訓練表の作成, シナリオの作成.

3. 実際の例

目標分析 → 事前テスト → 学習指導案 → 授業 → 事後テスト

一次関数(2年)の教材の中の「一次関数を決めること」の第1時の指導案を示し、小集団を利用した学習場面と効果を示す。

学習の流れ	学習内容	留意点と評価
<p style="text-align: center;">S</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">復習課題</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">課題提示</p> <p style="text-align: center;">音 グラフ 黒板</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">挙手</p> <p style="text-align: center;">NO</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">課題提示</p> <p style="text-align: center;">小集団 黒板</p> <p style="text-align: center;">① ②③</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の復習をする。 ・一次関数のグラフを5題書く。 ・グラフから式を求める。 ・グラフを読む。 ・一次関数のグラフから $y = ax + b$ の形に書ける。 ・a と b すなわち傾きと切片の値をグラフから読みとれば式に表わせる。 ・教 P68 目をする。 ・傾きと一点を通ることがわかれば式を求める。 ・Tカードがわかれば式ができる。 ・題意に合うようにグラフ用紙に実際に書いてみる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・書かせたものを提出させ点検し書けていない者に対して昼休み後、課後に指導する。 <li style="text-align: center;">注1 ・最初は比例のグラフを式に表わせることを考え次に一般の一次関数を式に表わせることを考えさせる。 ・理由を聞かずにヒキとくわめた者に発言させ、発言できない者の疑問を大きくする。 ・その後2~3名に理由を言わせ疑問を解く。 ◇ グラフを式に表わせることができる。 ・問題を提示します個人で考えさせる。 注2 ・小集団を利用して自分の意見をグループにおしひきひきなれめあつたところを知る。 ・机間巡視をして困っているグループに助言を与える。



注1 前時の復習、本時のワークシートとして2~3時間にも一度くり返す。グループ態勢をより提示させている。

注2 個人思考の時間はわがまま者もわからないと自分の方で考えられるところまで考えられるだけの時間を与える。その後小集団にはいる。小集団学習になるとグループトE中心において順番に自分の意見を図に書いて計算したりして説明していく。他の者はよく聞き、発言者がどんな考えを持っているのか聞く。ほとんどのグループがグラフをもとにしてやっているので仲間巡視をしながら他の問題を与えていく。2~3題しかえたとところで切片が整数でないものを与えると急に困って「だいたいこれぐらいや」という意見しかでてこなかった。もとほりわかるようにするための方法はないのか考えさせる。

到達度テストの結果 (42名中)
 3題正解者 37名 2題正解者 4名 1題正解者 1名

4. 学習効果率

事後 事前	○	×
○	a	b
×	c	d

事後テストでは事前テストの数字を少くかえ
てすることにし左の図のようなマトリックスを
つって次のような式で効果率を算出
する。

$$\text{学習効果率} = \frac{c}{c+d}$$

この研究授業の効果率は84.3%と高率であった。

しかし事前テストを身体めの登校日にいたために5人のア席者があり、この数字は適当とはいえないかもしれない。学習の遅れている者ほど体が弱い、学校を休む、授業がわからず、反響が少ない、学校がたもしくくないなどの悪循環をくり返す。いやしいことにも耐えられず弱い心に戻ってしまうのだらう。

これらの生徒に数学の興味を持たせ意欲がけるためにはリテ
ネテスト、形式的評価の活用による細かい指導プログラムを
開発することが今後の課題である。

5. 今後の課題

A. 新教育課程が実施され、授業時間が削減された。

小集団学習をしているとかなりの時間をとり教材が消化しきれ
ないとも考えられる

I. ややもするとガヤガヤ学習になってしまい目標の達成ができ
なくなる。

ウ. グループ内での発言者がほまてしまって一斉学習時の発問
に対してはすぐ一人にたより相談して発言しようとする。

E. 到達度テストをして理解していないことがわかってはわかっているに
十分な時間かとれない。

研究主題

学級集団づくりと生徒指導

龍野市立龍野西中学校 古林伸也

1 はじめに

本校は生徒数約1000名、学級数24。それ以外、城下町・農村・大型店の進出による商業地域の変容、ベッドタウン等の色彩を持つ異なった4つの小学校区を校区にしている。それら4地区は数分かの地域差はあるが、総じて学校教育に対する期待と関心が強く、学校に対する協力の姿勢は非常に好ましいものである。しかし、極めて少数ながら教育に無関心な家庭または崩壊的な家庭もあり、子供の成長を阻害し、それが意外に大きな影響を学校の内外に及ぼしている。当該問題生徒への積極的な取り組みが、めんどろと無気力な生徒が増し、建設的な意見は出すが実行を伴わない場合が多い。そこで生徒指導は全教師による全教育領域で展開すべきものであるが、本校では特に、学級指導、教科指導、生徒会活動等を充実することが生徒指導の基礎であると共通理解し、共通実践に取り組んできた。

2. 具体的実践より

(1) 教科指導の充実をめざして

問題行動をとる生徒の要因の一つに「授業についていけない」「授業がわからない」ことが考えられ、その要因を除くために、基礎学力の充実をめざして授業を創造する必要があると考える。

- ① 各教科基礎的調査
- ② 到達目標と下位目標の設定
- ③ 単元終了後のテスト
- ④ 下位目標不合格者に対する指導

(1)

⑤ まじめのテストとバズ学習

終会時に実施 採点後 バズ学習

次に全員が活動し、楽しさのある、ひとりひとりを生かす授業への改善を
めざし、バズ学習を1時間の中に1回は取り入れるようにした。そのために
は学習ルールの徹底が大切であると考之次の7項目を決定した。

きまり正しい1時間

休けい時間に学習準備
始業合図で学習開始
挙手も発表もはっきりと
結論 理由のある発表を
今聞かす時 話す時
正しい姿勢で精神集中
終りの合図でまっ起立

また、班構成は男女混合の4人班を原則とし、全員が責任者であり、
自分もクラスの一人である事を自覚するためにも一人一役として活動している

学習班 司会 記録 発表 連絡
生活班 班長 学芸 風紀 美化

(2) 学級集団づくりをめざして

生徒一人ひとりの成長に大きな影響をもっているのが集団である。学級
全員がお互いに心を通わせ、結びつきをもち、お互いが人間としてのゆとり
を認め、みんなで解決していきながら個人が集団と共に伸びるクラスづくり
をめざしている。

< 朝会を通して >

- ① 学級目標
- ② 各係りの活動

(2)

③ 本日のコース

④ 西中ノート提出

< 終会を通して >

① 黙想 黙書 — 自己点検 (西中ノート記入)

② 班での点検と話し合い

③ 要求と提案

< 学活を通して >

いろいろ行事「校外学習」「球技大会」「体育祭」「関谷学校」等の行事の毎に参加の意義・態度計画・実行・反省等をクラス全体で討議し、検討してクラスの団結を高め、いっそうの協調を図り、クラスを高めるようにしている。又、場合によっては、クラスの提案を学年部におし、学年から生徒会への提案とする場合もある

< 昼食指導 > < 班長会議 >

(3) 生徒会活動の充実

○ 学年執行部の定例化

学芸・風紀・美化の各執行部会を毎週、肩休みに学年別に(月)(水)(金)に持ち、一週間の実践をもち、反省と今後の取り組みについて協議し、各組が同一歩調で進むようにしている。その際、各組の委員が活動しやすいよう点検項目を決め、朝、終会で点検し、話し合いにより一人ひとりが活躍できるよう努めている。

○ 代議員会 全校執行部会

各学年の執行部会の決定事項をもち、全校執行部会で、その年の活動内容を決定する

各執行部の活動内容を代議員会で討議し、目標を立て、徹底方法を考え、全校生徒に呼びかける。

○ 学年集会

1年(火) 2年(金) 3年(木)

学年総務委員を中心に、各組の取り組みの意見交換の場とし、生活
反省して、それぞれの学年全体の充実と向上をめざす。

○ 校門指導

生徒会本部役員や風紀部員を中心に、火・木・土曜日、校門で「あい
さつ」運動と風紀面の呼びかけ注意をしている。

(4) その他

< 家庭・地域との協力 >

○ 地区懇談会、PTA懇談会

特に試みとして、A小学校区の地区懇談会を、学期1回、小学
校の先生にも参加を願って、又、時間も90分以内とし、学習面
生活面、家庭生活等の問題について話し合い、地区全体の
連携を高めるよう努めている。

○ 家庭訪問、家庭連絡

3. ふわりに

バズ学習を取り入れて平日も、いろいろと問題点がでてき
る現状である。

○ 班での話し合いの深まり

(課題 リーダー 依頼心)

○ 学級内で班内で自由に発言できる

(切実感や必要感のある話 間接的ではなく直接的な話)

○ 話し合ったことが実践につながっている。

第16回 全国バズ学習研究集会 分科会(2)

主題 「生徒指導とバズ学習」

提案者 姫路市立安室中学校

松田 福義

1. はじめに.

本校は、開校2年目の新設校で、学級数21、生徒数854名の、中規模校である。姫路市の中心部より北に位置し、もとは田園地帯であったものが、近年宅地化され、新興住宅地として、人口が急増した所である。したがって、もとからの住民より新しく来た人の数の方が多い地域であり住民同志の横のつながりも浅く、P.T.A.のまとまりも乏しい面がある。それに加え、生徒達は、兄弟、姉妹の数が少なく、友達とのつきあいのしかたが、下手である。そして、自分勝手に、暖かさがなく、困難なことはすぐ誰かに頼り、自分達が協力しあって解決しようとしなない。何事も意欲的でなく無気力で、安易な所で妥協してしまう。学習についても、受身的で、孤立的で、協力性がない。塾に行ってる者が、ワザワザ人もあり、授業態度にも意欲的な面が見られない。以上のような点から、正しい人間関係を育てつつ、意欲的に学習に取りくませるには、バズ学習の導入が必要であった。

2. 実践の経過

教育目標 基礎学力の充実につとめ、バズ学習による授業の創造をはかる。

努力目標 小集団によるバズ学習を確立し、所属感、充実感を味わうことにより、自己実現の具体化に努める。

努力目標実現をめざし、先ず、当面の取りくみとして、「バズ学習の研究と指導技術の検討、深化をはかる」とをねらいとして、1学期は、形に慣れさせることにねらいをおき、

- ① 手引きにより、基本的ルールの訓練。
- ② 朝バス、セバズの時程と、身体で覚えさせる。
- ③ 学習バス、生活バズの区分（最初は生活バスを中心に）
- ④ 全員活動、全員発表。（一人一役の活動）

上記①-④の徹底と深化をはかる。そして、2学期は、内容を深める努力にとりかかっている。

朝バス（日番の司会）

- 8:15 ↓ 着席、出欠の確認。（学級担任は教室に）
- 8:20 ↓ 朝バス開始。（日番は始めて下さいと言い、タイマーの設定）
学習内容は、前日のセバスで決定...各班ごと
- 8:30 ↓ 今日の努力目標（日目標）の決定
- 8:35 ↓ 朝の連絡。（教師からの連絡、提出物他）
- 8:40 ↓ 1校時の開始

セバス（生活バス... 日番の司会、学習バス... 正副委員長）

- 2:50 ↓ 移動、着席、黙想... 音楽が入る。
- 2:55 ↓ 生活の反省と話しあい。（班日誌の記入）
個人→班→全体と話しあいをすすめる。
- 3:10 ↓ 連絡（教師、各係）...（個人日誌への記入）
- 3:20 ↓ 次の日の朝バスの課題の決定。
- 3:25 ↓ 日番の反省とひきつき、司会の交替、学習バスへ
○（月）（金）は5教科で、時間割と決めている。— 全員同教科。
（土）は、班々独自で考える。— 班ごとに内容の決定。
- 3:40 ↓ 「さよならの歌」下校。

班編成（4~5名、男女混合）

生活班をそのまま、学習に生かしている。班員は、最初はいじ引きで決定したが、現在は、旧班長と新班長で、班長会を持ち決定している。班長

は、推選制にしている。立候補は今一步といった所である。日番、教科、掃除、等すべて班行動で責任をもって行動し、クラスのまとまりを作っていることを自覚させている。又各班員は、班長、班の教科係（教科学習の時の班の学習の中心になる。朝バスのテスト係であったり学習バスの司会であったりする）記録係、まとめの発表係として、全員が活動することで自分の存在の意義を確かめ、班員としての自覚を促し所属感と満足感を持たせるようにしている。

内容の深まりについて

- ・生徒の自主活動を促すということから、課題を与え、それを追求める中で、課題追求の姿勢を学ばせている。例へば、花係、新聞係が決定され、活動を始めており、学級文庫も作られて活用している。また学年全体として動く例としては、学年集会での話し合い、手作りサマーテキストの作成、体育大会の演技や、ダンスの学習に、同和学習へのとりくみ合唱コンクールへのとりくみ等、各係が、クラスの中心になって活動している。学校全体としては、奉仕活動や、美化コンクールへのとりくみが、美化係を中心に、生徒会が活動している。
- ・活動の深化をはかるといふことから、時間の流れにけじめがついているかどうかの点検をさせるよう話す時、聞く時、考える時、それぞれの区分とねらいを明確にさせるよう教師が注意を促し、焦点ぼけしない心くばりをしている。又、黙想の時間は、深い個人思考ができるよう今日の生活の流れを静かにささやき、今日の日目標についてどうだったかとささやくことにより、思考の方向をつけてやるようにしている。
- ・セバズの相互参観とすることで、マンネリ化をふせぎ、各クラスの交流をはかっている。

感想、問題点と展望

- ・2学期はじめに、生徒に「自分の力をクラスの中に反映し、自分も生か

され、クラスも高まろう」ということを努力目標に、色々な行事や、学習にとりくませてきたが、生徒は、学校が楽しい、学校に来るのが楽しいと答える者が、90%以上で、個人懇談としても、班や、クラスに問題はあつたが、何とか努力しているとの解答をしている。又着席中の側から見ても、学力的には劣っている生徒も、自分なりに、教科係や、班長としての活動に、学習にかいっぱい力を入れている姿を見ると、強く、クラスからはみ出せようとする者も今の所はなく、まとまっている。又班編成についても、班長は、遠慮なく班員の良い面、悪い面を発表し、編成していつてる。このごろ気づいた事だが、昼食時(班をくずしてはない)班員が、楽しく食べるよう工夫し、ある班は、テーマをきめて話しをしある班は、しりとりゲームをして食事をしている。だから食事中立つ者もなく、時間いっぱい、ゆっくと食事ができている。また日目標の表現にも工夫が見られ、その日目標を実行できるための班として気づけることが話しあつていゝ。教科学習時、先生がいなくても、自分達で自習課題を工夫して学習を進めるといった変化が見られるようになっていゝ。

○日誌についてであるが、個人日誌から班日誌へと移行させていゝが、長所、短所があつて、どれもすぐなく、かといつて点検の時間が長られており、目下の出来である。今後の問題として、現在の形のまま、3年間続けてゆくためには、変化をもちせ、少しづつでも高まるとりくみかなされなければならぬのだが、そのための研修の場をどうするのか、全員が高まる研修のあり方はどうあるべきか、教師が、生徒と共に深まり、高まらなければならぬのだが、たえず生徒と共に歩み続ける努力をいかにするか、又新しく取りくむ者への伝達をどうするのか、問題は次々と生じてくるが、いつも新しい目で、生徒を見つめ、息の長い課題創造の姿で努力をしたいものであると考えていゝ。

第16回全国バズ学習研究集会 分科会(9)

研究課題 規律ある集団の中で個がめざめ高まる生徒指導

小野市立小野南中学校 石野茂三

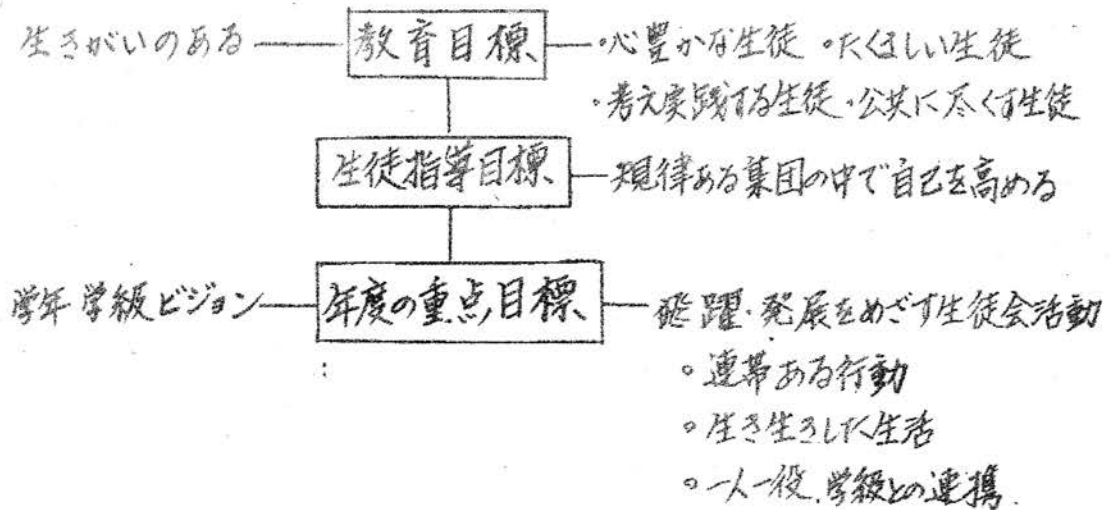
1. 本校の概要

- ・生徒数 498名・学級数12組、来住、市場内中が統合して2年目新しい校風・ユニークな学園づくりに取り組む
- ・農村地帯にあり、兼業農家が多い。最近、阪神・播磨工業地帯のベッドタウンとして新興住宅が増加し、新旧交錯の実態から生徒指導に一層の厳しさが求められている。
- ・生徒は純朴で従順であり、非行化傾向はない。しかしながら行動力や連帯意識に乏しい面が見られる。

2. 生徒指導の方針

- ・生徒や地域の実態をふまえて、「規律ある集団の中で、個がめざめ高まる生徒指導」をテーマに設定し、生徒会活動と学級集団を充実させることによって、主体性のある個の確立をめざす。

以下はその基本構造である。



3. 学級経営

(1) 学級のビジョン

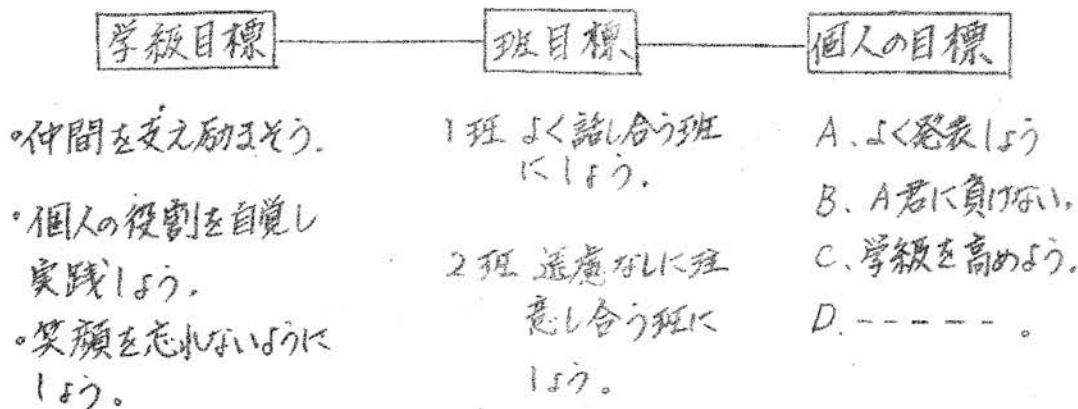
学級集団を指導するには、個々の生徒理解と学級の性格をよく把握し、すべての生徒に集団活動とかわりをもたせることがなによりも大切である。しかも個々の生徒がその活動を観察し、その方向を自分たちで考え実践していくよう援助していく必要がある。

そして学級集団が望ましい性格を持つことによって、集団は個人に影響を及ぼし、個人の人格の向上に役立っていくものであると考える。

そこで私の担任する学級(3学年・37人構成)を見た時、生徒会役員4名、運動部中心選手6名(内生徒会役員3名)学習成績は良いがリーダーシップに欠けている生徒2名、残りの28名はまじめであるが行動力や連帯性に欠けている。以上の観点から「さめた集団」から「生氣ある集団」にしたいと考え実践した。

(2) 学級の目標

「これではいけない」「もっと楽しい学級にしたい」と誰れもが思っている。その欲求を満たすためには学級の実態や要望を生徒とともに考え、学級目標を設定しなければならない。また同時にその目標を達成させるための班目標や個人目標も必要である。以下はその具体例である。



(3) 班活動

- ・班編成は男女混合の6~7人班, 班長・副班長を選出し, 自分が所属したい班に自主的に入る。一応班が構成されてきた段階で等質の班を編成していくために生徒同志の討論により班員の入れ替えを行なう。
- ・生活班として, 美化班・生活班・レクリエーション班・問題解決班・問題処理班を設けている。
- ・学習班として各班が1~2教科を担当し, 各教科の授業の中で学習課題の確認・点検・5分間反省の司会と記録を行なう。班員はリーダー・司会・点検・集配・提出物・記録の係を担当する。なお班内の各係は1週間ごとにローテーションする。

(4) 短学活の活用

① 朝の短学活 (15分)

週目標の確認 — 各生活班からの連絡 — 1分間スピーチ
(班の状況発表) — 美化班の整理整頓点検

② 午後の短学活 (25分)

週目標の反省 — 班目標の反省 — 個人目標の自己点検
— 問題発見班の発表 — 各生活班・学級生徒会役員の伝達
— 個人の意見(学習設計ノート, グループノートから) — 学級
目標の反省 — 学級歌

(5) グループノート・学習設計ノートの活用

- ・グループノートは班員の願い, 班の問題, 個人に対する意見, 他班に対する意見等を書き, 内容にあてはまる生活班に提出し, 赤ペン指導を受ける。処理の困難な問題は担任に提出し助言を受ける。
- ・学習設計ノートは個人の家庭学習・学習上の問題・生活の問題・道徳や異性・家庭の悩み等を書き担任に1週間に1回提出, 助言を受ける。

4. 生徒会活動と学級

(1) 方針

本年度の生徒会活動のテーマを「躍躍・発展する生徒会」とし、前年度の反省をふまえて、第1に学級の意見を尊重し、生徒会活動に生かしていこう。第2に学級員1人1人に生徒会活動を経験させ存在意識を高めよう。第3に学級役員の活動を厳しく点検し学級生徒会を充実させよう。以上3点に的をいぼり学級集団の充実をはかろうとした。

(2) 学級集団との連帯

- ① 日番活動 ---- 週番(生徒会役員と教師3名ずつ)、日番(学級男女1名)
活動は朝の奉仕活動・週目標の徹底・1日の学級集団の長。
- ② 監査活動 ---- 監査部員が学級役員の活動状況を監察する。土曜の朝会で監査部長が発表、適切なアドバイスを与える。
- ③ 学級会活動 ---- 木曜の6校時に各専門部の月間目標を確認・学級の諸問題の討議・次週の週目標を審議する。
- ④ 運営委員会 ---- 土曜の4校時・本部役員・部長・学級委員長・副委員長・監査部員で学級会活動で出た問題を討議し、次週の週目標に生かす。
- ⑤ 生徒朝会 ---- 月・土曜(20分)各専門部長の月間目標の反省・週目標の反省と確認・学級の意見・1分間スピーチ等の諸活動を行なう。

5. 今後の課題

- ・学級集団が充実すればするほど転入生はなかなかなじまず、学校不適応を起こすこともあり得る。
- ・職員の意志統一がよほどうまくいかないと学級差を引き起こす。
- ・以上のデメリットが考えられるが生徒は動くことの充足感を味わうことにより、学級に対する誇りを持ち、さらに個人の目標も実現できて、その意気は一層と向上しつつある。

生徒指導への取り組み

兵庫県加西市立北条中学校 井上 博明

1. はじめに

田舎町の本校の生徒にも、時代の波はいやおうなく押寄せ、制服のボタンを外すのにカッコよさを感じ、スカートの丈を長くすることがナウい！と考えるような感覚が、多数の生徒の感情を支配するようになって来た。このような流行への強い好奇心は、自己顕示の行動と結びつき、中学生の生活態度として好ましくない方向へと傾斜して、教師や親との心理的距離感を一層強め、その指導に対しては、すぐに欲求不満へと短絡して、逃避や反発の行動を誘発しやすくなってきている。

このような中で、生徒指導そのものへの反省と総点検をおこない、どのように取り組んでいけばよいか意見を述べ合い、教師集団としての和によるスクラムのもとに指導方針を打ち出し、次のように実践している。

2. 生徒指導の基本方針

- (1) 生活指導の基本を、生徒に自主自律の生活態度を育てることにおき、一人ひとりの生徒をよく理解し、その生徒に依じた適切な指導と、生徒同志を正しく結びつける集団(特にクラス)の指導を重視する。
- (2) みんながわかる授業をめざす努力とともに、生徒が主体的に参加できる楽しい行事(活動)を工夫するなど、生徒にとって魅力ある学校づくりを推進する。
- (3) 生徒の人間的な触れあいとおして、相互の信頼関係をつくるとともに、生徒に迎合することなく、はじめつけた節度ある指導をつらぬく。
- (4) 立場の違いや、考え方の違いをこえて、生徒の学力と人格の発達を保障する立場で、教師集団として一致した取り組みをすすめ、相互援助の体制をつくり出す。
- (5) 家庭や地域の中に生徒が正しく位置づけられ、適切な指導がなされるように啓蒙すると同時に、協力関係をつくり出す努力をする。

3. 実践内容

(1) 生徒の自主活動を保障する指導

学級の時間、生徒会活動、クラブ活動、部活動、学校行事

(2). 生徒理解

観察、調査、検査、面談、相互評価、生活ノート

(3). 基本的な生活習慣の指導

学級活動(生活バス)、学級指導、学年集会、全校集会、学習指導、生徒会活動

(4). わかる授業の創造

形成的評価導入による授業過程の改善、小集団学習を取り入れ全員参加の学習、到達度評価による学習指導の個別化、問題傾向をもつ生徒に視点をあてた授業

(5). 問題傾向のある生徒の指導(早期発見、早期治療の体制づくり)

学年生徒指導協議会(チェックカード、指導カルテ)、生徒のとり組み

(6). 校内外の巡視・補導

(7). 学校と家庭、PTA、地域との関係機関との連携

4. 生活バス

学校生活の大部分を占める学級での生活は、生徒たちの学習や生活の基盤である。従って学級集団の中で一人ひとりの生徒が生かされ、互いに認めあい、支えあっていく生徒たち自身の活動をとおり、人間関係がよりよい方向へ改善され、高まっていくように図ってやることは、生徒指導の根本である。そこで、終りの短学活に生活バスを取り入れ、個が認められ集団が高まり、個が生かされるよう方向づけをしている。

月 日 曜		記録者 []											
項目 氏名	○ × で記入										日数	ことがらを記入	
	遅刻	服装	授業に集中	係活動意	連日よいことした	合意確認できた	宿題	復習	掃除	発言			
													今日 自慢できること
班全体	良かったこと												
班全体	悪かったこと												

①. 手だて

- ・全員が話し合いに参加しているか常に留意
- ・一人ひとりの努力やよさを認め、学びあうことに重点をおく
- ・点検項目は、生徒たちの話し合いで決定し、成長に応じて変化を許し、バスがマンネリにならないようにする。

④ 問題点

- ・常にバスへの意欲を持ち続けさせる手だて
- ・X印の多い生徒への班員のはたらきかけ

5. 学習バス

生徒の学校生活の中で、量的にはもちろん、心理的にも最も大きな比重を占めているのは、言うまでもなく教科学習の活動である。決して好ましい傾向とは言えないが、現状の生徒たちにとって、勉強がわからなくて学校が楽しいわけはないし、授業についていけないで精神的な安定を保てるわけもないのである。生徒たちの問題行動の原因として、必ずといってよいほど学力不振が上げられることは周知の通りである。そこで、わかる授業の構築をぬきにくく生徒指導はあり得ないといつてよい。

さらに、3年生も2学期に入ると、進路決定をまじかに控え、多くの生徒たちは学力の遅れをしみじみと感じはじめに来る。そこで本校では、3学年の2学期より学習バスを取り入れ、月曜から金曜日までの5日間、校課後に5教科を割り当て、生徒たちがお互いに教えあひ助けあう中で、自主学習を進めていく場面設定をおこなっている。ねらいはもちろん、学力補充より人間関係を深めて、学習への自信をとりもたせ、学業への適応を図ることにある。

① 手だて

- ・各教科テキストを利用したのバスによる助け合い学習。(学級単位)
- ・進路指導を施すことで参加は希望者とする。参加意欲のない者は下校を指導。
- ・学力不振が学校生活不満足を引きおこす代配のある生徒を教育相談して、別学級をつくり、それぞれにアドバイスのできる生徒を配備するとともに、教師とのかわりも密にして、生徒と生徒、教師と生徒の人間関係を深める。

④ 問題点

- ・時間的な制約
- ・話し合い、助け合いが十分になされるための訓練法

6. 教師バス

生徒指導は、一にも二にも実践である。しかし、その実践に取り組むためには、教師の指導姿勢の共通理解が何よりも大切である。教師集団の意思統一のもとに、協力実践の指導体制を確立しておかなければ、教師一人ひとりに指導の自信を裏打ちされ、取り組みの意欲がわかないし、積極的な実践は望めない。さらに、生徒指導は、全教師が同一歩調で取り組まなければ、もちろん、その実を上げ得ないばかりでなく、非行や問

題行動を増長させる結果にさえなることは目に見えている。そこで、本校では学年生徒指導協議会を飛躍させ、全教師がお互いに情報を交換し、意見を述べあう中で、全教師の納得すくで指導方法を決定し、行動化している。特に問題傾向を持つ生徒の指導においては、「指導の手立てを見つけないことには、指導が放棄し長ことになる」と合言葉に、全教師で情報収集と分析をおこない、どのように指導すればよいかの手立てと見直しを立て、指導の統一を図っている。

① 手立て

- ・ 月1回以上（実際には回教が多くなる。）
- ・ チェックカードの利用、指導カルテの作成
- ・ 意図的に生徒の長所、努力した点をみつけ出し、認めてやり、伸ばす指導を大切にね。

② 問題点

- ・ 時間的制約
- ・ 学年間の連携

7. 学級の時間

生活の基盤としての学級において、生徒たちが自ら工夫して考え出し、計画して主体的に参加する活動を通して、個々に持っている能力・特性を発揮し、みんなとそれを認めあい人間関係を深めていくことができるならば、生徒にとってどれだけ魅力がある活動となるであろう。どれだけ生徒指導のねらいが達せられることであろうか。こんなねがいから「10分の時間」を「学級の時間」として活用する一つの試みをはじめた。

① 手立て

- ・ 時間設定（月曜日の第5・6校時）

第1週 (学級の日)	学級運営委員会 誌	実践部活動	第2週 (全校クラブの日)	全校クラブ
第3週 (学級の日)	学級創意の時間		第4週 (全校クラブの日)	全校クラブ

- ・ 学級にあつて生徒の創意による自主活動の趣旨を生かすため、学級運営委員会と計画立案し、学活で話し合いを深めねいで実施する。

② 活動内容例

オリエンテering・ソフトボール・ハイキング・料理実習・老人ホームや駅の掃除・室内ゲーム
学級新聞づくり・郷土の文化財見学・竹細工・3分間スピーチ

③ 問題点

- ・ レクリエーション的なものに偏りやすい
- ・ リーダーの発掘と養成

8. おわりに

以上、本校のさまざまな取り組みの中で、①やささと厳しさの接点 ②自主自律としつけの接点をどこにどう求めて指導していくかが課題となっている。

研究主題

ゆとりと充実をめざすグループ活動の指導

提案者 明石市立中崎小学校 川崎 優子

1. 本校の様子

位置---明石市立天文科学館の南
市役所の東となりの埋め立て地

児童---本年度、大規模校より分離し
児童数670名 各学年3クラス
5年生1クラスの人数35~36人

校区---大きく4区域に分けられ、そのうち
3区域は、古くからの住宅地で、神
社も多い
1区域は、高層マンション2棟

2. テーマについて

ゆとりと充実をめざすことは---子どもの主体性を
育てること

グループ活動の指導に重点を
おいたのは---生活・学習一体のグループ
作りと活動により、自主
協同の考えと態度を身
につけさせたいため

3. グループ指導を手かけた動機

- 新設校であるため、新しい友達と早くなじむように
- 話すことに不慣れなため、グループのみんなの前で話すことから、はじめようとしたため
- 学級のまとまりを、よりよくするため

4. グループ指導の基本的な考え方

- (1) 意志表示の乏しい子供を核とし、班員が助け合い、
班長の仕事は、班員を守ることであると考える

(2) 指導の経過

学級経営における指導目標

自分の考えが、もてる子 ----- 自主

互いに助け合う子 ----- 協調

すすんで働く子 ----- 実践

この3つの目標を達成するため、週目標を決めるとともに、反省を大切にしてきた

基本的な学習訓練

話し方・聞き方（机の配置も工夫）

話し合いの仕方、司会進行の仕方、まとめ方

生活・学習両面の実践指導

(1) 生活面

特別活動に重点をおき

学級会の議長団輪番制

グループノートの活用

月1回の学級集会

係活動の固定時間設定

ゆとりの時間の創造活動

(2) 学習面

個人の自主性をのばすと共に、学習参加を おし進める
グループ指導に重点をおく

教材研究により、学習方法を工夫する

ノート指導を大切にし、自主学習へと導く

グループ学習の基本

個人で考え → みんなの前に → 再び、個人のしっかりした
表わし 考え

社会科におけるグループ学習

グループの話し合いを中心に、O・H・Pの作成と研究発表

国語科におけるグループ学習

本読み大会を目的としての読み練習

読解の集団思考の実際例

6. 今後の課題

児童の生活実態の理解

個人を生かすグループ指導の徹底

グループ活動を、より一層充実させるための方法

研究主題

—ひとりひとりが豊かな人間性と確かな学力を身につける教育活動をめざして—

姫路市立余部小学校 田中 崇 浩史

Ⅱ はじめに

本校の教育方針と目標

人間尊重の精神を基盤として、知・徳・体の調和のとれた豊かな人間性を育てる教育をめざす。

1. 強くおおしく (剛健・根性) 体力・気力の練成充実
2. さとく正しく (探究・創造) 知性の開発精進
3. 清く明るく (和親・清明) 徳性の啓発育成

—育てる子どもの姿—

- (1) 最後までやりぬく ねばり強い子
- (2) 探究心や創造力の旺盛な子
- (3) みんな仲よく 助けあいのできる子

本校教育の基本的立場

1. 体を通して学びとらせる。 (鍛える)
- ↓
2. 行う (知る)
- ↓
3. ひとりだちさせる。 (育てる)

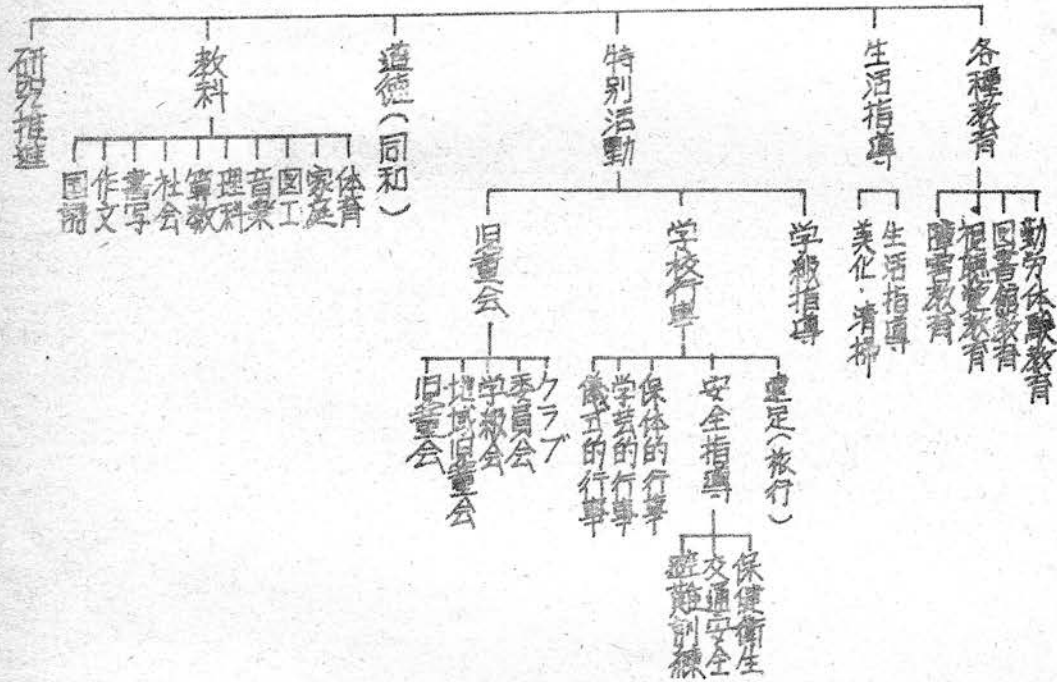
本校の努力目標

1. 教師としての自覚を一層深め、指導力を高める。
2. 学習指導の徹底をはかる。

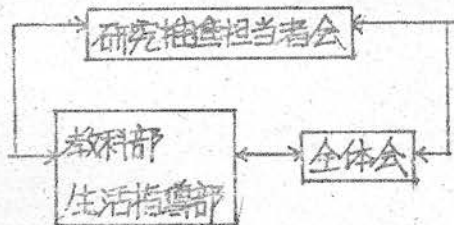
3. 同和教育を深め、人間尊重の精神を育てる。
4. 基本的な生活の規律を身につける。
5. 健康・安全指導を強化し、強い体力と事故のない生活を徹底させる。
6. 実習田や美化作業を通して勤労体験をさせ、やる気と根拠を培う。
7. 心身の障害のある児童には、全職員で指導にあたる。

2 実践の過程

1. 指導組織



2. 研究組織



3. 日課表

事項	朝の会	朝の会	第1校時	休憩	第2校時	遊び	第3校時	休憩	第4校時	給食	清掃	遊び	第5校時	休憩	第6校時
時間	8時30分—8時40分	8時40分—8時45分	8時45分—9時30分	9時30分—9時40分	9時40分—10時25分	10時25分—10時45分	10時45分—11時30分	11時30分—11時40分	11時40分—12時25分	12時25分—1時5分	1時5分—1時25分	1時25分—1時45分	1時45分—2時30分	2時30分—2時40分	2時40分—3時25分

- ・各授業時間をテレビ視聴のために、番組時間帯にできるだけ合わせる。
- ・中間休み(第2校時—第3校時)昼休みを遊び時間として20分。
- ・児童朝会、児童集会を月曜日の8時30分から8時45分に実施。
- ・月曜日以外 8時30分から8時40分まで、各学年・学級で後活動・豆テスト・視写訓練などを実施。
- ・清掃を給食後、全校一斉に行なう。

4. 週時表

	月	火	水	木	金	土
1						
2						
3						
4						11時
5			11時			
6				11時		

・いづみの時間について

教育課程のひとつの領域として位置づけたものでなく、児童の学校生活をより豊かにし、充実したものにしていこうための本校独自の教育活動であり、児童の実践的な活動や自発的な活動を行なう。

・いそみの時間の活用

- 1) 勤労生産的活動, 美化作業, 音楽活動, 造形活動, 運動的活動
(実習園・花壇の作業, 運動会・音楽会の練習など)
- 2) 自学自習, 補修的学習
- 3) 自由研究活動 各自テーマを決め長期にわたっての活動

実習園の活用

実習園の勤労・生産にかかわる体験的な活動を経験させることによつて、勤労の価値や生産の苦勞と喜びを体得させ、自然の恵みに対して畏敬の念をもたせる。また、協力活動によつて集団の一員として協力することの体験をさせ、一層豊かな人間性の育成につとめる。

実習園の割当 (面積 7a 学校より西 100m)

実習園

3年(畑)	4年(畑)	5年(畑)	6年(畑)
5・6年(水田)			

学校花壇

1年

2年

3年

栽培計画及び作業計画

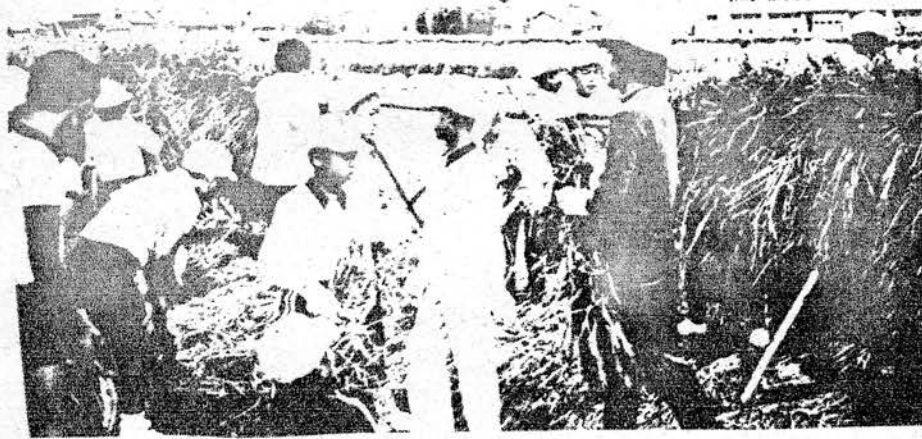
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	栽培部	稲づくり
	あかお	ひまわり	↑ たま 大豆	いもほり	さつまいも	かぼち ていほり	花づくり 菊づくり	
4月	花壇づくり 肥料 肥料		↓ 花壇 肥料			種まき	↓ 花壇 肥料	
5月	種まき 苗植え		↓ 種まき 肥料	花づくり 肥料 木箱つけ	畑づくり 肥料	畑づくり 移植 肥料	↓ 苗植え 肥料	苗づくり 苗に肥料 おみまき
6月	水やり 施肥		↓ 除草 中耕	水かけ 除草	さし芽 水かけ	除草 追肥	↓ 水やり 肥料	田植え さし芽 田植え
7月	水やり 除草		↓ 除草 水やり 消毒	除草 水かけ	除草 おあげ	しきわら 除草	↓ 水やり 肥料	水管理 施肥 除草
8月	しきわら 水やり		↓ 水やり 除草			収穫 種とり	↓ しきわら 水やり	施肥 除草 水管理
9月	種とり		↓ 収穫				↓ 水やり	除草
10月			↓ 収穫	いもほり	いもほり		↓ 種とり 肥料	稲作り
11月			アブラナ 畑づくり 肥料 種まき	えんどう豆 畑づくり 肥料 種まき	まら豆 畑づくり 肥料 種まき	たまねぎ 畑づくり 肥料 種まき		脱穀
12月			除草	除草	除草	除草		
1月			↓	↓	↓	↓		
2月			↓	↓	↓	↓		
3月			↓	↓	↓	↓		
備考			秋植え アブラナ	秋植え えんどう	秋植え たまねぎ まら豆 えんどう	秋植え たまねぎ	秋植え 葉ばた人	

・収穫した作物は、全校又は学年で試食会。種などは、来年度の学年へ預けていく。



(田植え) ↑

↓ (稲刈り)



子どもの日記より

3時間目に田植えをしました。私は、最初すごくたのしみ
だったけど、みんなから、きょうんのときの様子をきくと
、ほとんどの人が、「足がドロの中にめりこんで、気もち
わるかった。」というふうなことをいっていたので、私もあ
あ、田植えはそんなものなのかと思い出して、ドロの
中に入るのがいやになりました。

でも、とうとう入るときがきました。なかなか入る気がしなかつたけどみんなが入っていたので私も思い切って入りました。入ると、すぐ足が、ズグズグと入ってしまってひざぐらひまでうまってしまうかと思いました。それでやっとここまでたどりついて、なえを、3本か4本ずつうえて行きました。最初、とても気持ちわるかったドロモこのころには、なれてしまってなんとも思わなくなりました。なえをうえるときは、足あとがついているところを、うめるためにならさなければいけないのでたいへんでした。おしまひには、たのしいと思うようになってきて、五年生とかわるのがいやになったほどでした。これで終わりです。

5. 教科指導について (国語科、理科の指導を通して)

国語科 ひとりで、確かな文の読みができる子どもを。

理科 自分の考えを大切にし、進んで自然に働きかける子どもを

・ひとり調べの徹底

ひとり調べの順序、視写、書き込み、書き出しの方法を明確にする。

・音読の徹底

音読カードの利用

音読練習を毎日つける。

音読のめあてを学年ごとに明確にする。

日	1	2	3	4	-----	30	31
読んだ回数							
読んだところ							
家の人のしるし							
先生のしるし							

音読・朗読の成果を学校放送を使って発表。

朝の10分の時間を利用して、楷写訓練、漢字練習などを行う。

・観察ノート

自然観察・実験観察など、授業におけるノートの統一

・継続観察・自由研究

授業以外の事象に目を向けさせる。

自由研究や観察記録をまとめ作品展を行う。

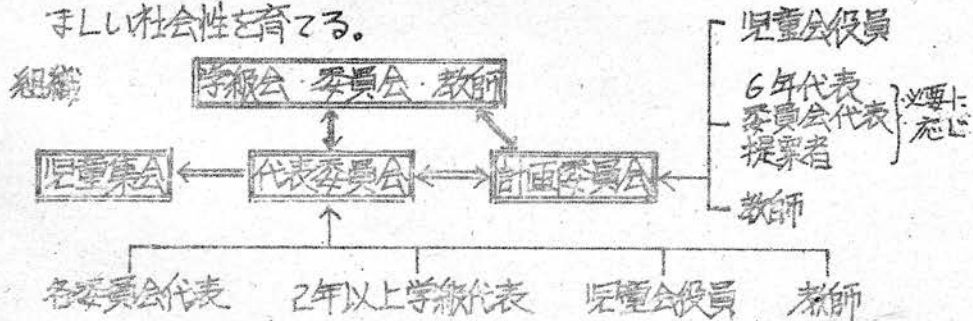
・視聴覚機器の利用

視聴ノートなどの活用

6. 特別活動について

(1) 児童会活動

児童の手による児童の活動にすることによって、自発的・自主的な実践活動を行ない、集団の活動を運営したり、あるいは積極的に参加することによって、学校社会の一員としての自覚や役割意識をもち、望ましい社会性を育てる。



各委員会

- 交通部 (登下校時の交通安全, 校舎内で歩行について)
- 飼育部 (校内の生き物の世話)
- 栽培部 (校内の草花の世話)
- 体育部 (体育用具の整理・整頓)
- 生活部 (生活目標などの徹底について)
- 放送部 (校内放送について)
- 給食部 (給食当番への点検など)
- 美化部 (校内美化について)
- 図書部 (図書室の管理や図書の貸し出し)
- 保健部 (けが人の世話, 保健衛生について)
- 掲示新聞部 (掲示物の取りかえ, 学校新聞)

実践内容

1. 学校内の問題解決
2. 月目標の具体化ととりくみ方
3. 児童集会の運営
 - ・児童会活動に関する報告や連絡
 - ・お楽しみ集会 (歌, 鬼ごっこ, ゲームなど)
 - ・発表集会 (クラブの様子, 学級の様子など)
 - ・奉仕集会 (ごみ拾い, 石拾いなど)

子どもの日記より

今日から、一週間のほうそうは私と小川さんと上中村さん
5年2組の三人です。そして月水金は本読みだ。
放送はとてもおもしろい。外であそべないけど、遊ぶより

よいと思う。

レコードをかいたり、落とし物を放送したりするおもしろさは、遊ぶときのおもしろさとはまたちがう。

私は、本を読むときが、一番いい。

でも明日はレコードをかいる日だ。

でもおもしろい。これだったら一か月ぐらいしたい。

でもただ一ついやなことは、私のきゅう食当番と放送が、ぴったりかさなってしまっていてそがしくなるからです。

放送が、C班のときだったら私も小川さんも、当番と重ならないと思いました。

(2) クラブ活動について

ひとりひとりの児童が自己の生活を楽しく豊かなものにしようという意図のもとに同好の児童の集団において、活動を自発的・自治的に行うことによって自主性・社会性を養い個性の伸長を図る。

実施クラブについては、できるかぎり児童の希望にそって作る。

4年以上の児童によって編成

実施クラブ(昭和56年度後期)

園工クラブ	(20人)	ドッジボールクラブ	(23人)
科学クラブ	(12人)	陸上クラブ	(13人)
料理クラブ	(31人)	バスケットボールクラブ	(16人)
裁縫クラブ	(8人)	卓球クラブ	(22人)
ソフトボールクラブ	(16人)	器械体操クラブ	(19人)

バトミントンクラブ (20人)

テレビクラブ

(8人)

子どもの日記より

今日、クラブが決まりました。第一、二、三と自分で選んで書きました。クラブが、いろいろとあるので、決めるのに、困りました。

でも、私は運動が好きなので、運動クラブのバトミントンクラブに決めました。私は、バトミントンが好きです。私と同じ考えをもった人が、たくさんいたので、前はんと、後半に分けられました。もう一年間で、小学校も、おわりだから、いっしょう、けんめいに、がんばろうと思います。

後半には、なになに、なるうかと、まだはやさがるのに、今から、考えてしまいます。

評価として、児童ひとりひとりお記録表をもち、活動内容や反省を記入していく。

(3) 学校行事について、

○遠足 (歓迎遠足 4月、お別れ遠足 3月)

みんなで楽しく一日を過ごし、自然の観察、公德心の啓培、交通安全の指導及び脚力を鍛練し、健康を増進させる。全員が同じ目的地へ。

歓迎遠足 距離 往復 12Km

6年生児童が1年生児童の世話をする。(1対1)

お別れ遠足 距離 往復 8Km

各学年で出し物を考え、6年を送る会をする。

・泳力検定会 (9月)

余部小泳力値線表により目標をもたせ、全員に検定証をわたす。

・自由研究・観察記録などの作品展 (9月)

ひとり一点を出品する。

・書道展 (1月)

ひとり一点、全員の作品を展示。

・たこ上げ大会 (1月)

揖保川の堤防で自作のたこ上げ大会

・耐寒訓練とマラソン大会 (1月・2月)

廊下、縄とびを中心に約3週間(1月)行い、最終日にマラソン大会を実施。以後も、走れ走れ運動として児童が自主的に走り続けている。

耐寒訓練 3~5分間走 朝 7時30分~8時45分

縄とび 学年ごとに級を設定

マラソン大会 距離 低学年 800m
中学年 1200m
高学年 2000m

子どもの日記より

今日は、最後のしおひがり♪ 1つちがうのは、1年生のめんどうをみることです。初めに、1年の子と手をつないだ時、かわいい手だなと思いました。私もこんなだったらなと思うと1年生にもどりたくなりました。

初めに名前をきくと、かわいらしく、「まつうらゆきこ」

って言うてくれました。ゆきちゃんは、私のことを、
「おねえちゃん、おねえちゃん。」と親しんでくれます。
すると私も、6年生なんだと改めて思いました。
とっても楽しかったです。

まえの時は、80mだけ
ど今日は、100mになりました。
た。

とってもつかれた。
でも、よくおよげるよう
なつてよかったなと思つた。
こんどは125mをおよげるよ
うにめざす。

今日の午時間目運動会の練習がありました。

今年からは、女子もくみ体そうをします。そして、ひく
りしたのが、きばせんもするそうです。組体そうは本当の
こといって不あんです今日は一人でするのを練習しました
はじめは、バランスです。足に力を入れてなくてはなりません

ん。もうしないと、ふらふらしてしまいます。でも、なん
といつても次に、バタッとたおれます。女の子はたいていの
子が「あっ」と言いました。私も「あか、たです。そしてた
おれるしゅんかんなんにも考えるひまなんがありません。た
おれるしゅんかんなんかどこかちがう世界へ行、た見戸は
だ。た。これから毎日練習だがんばらなくちゃいけないな



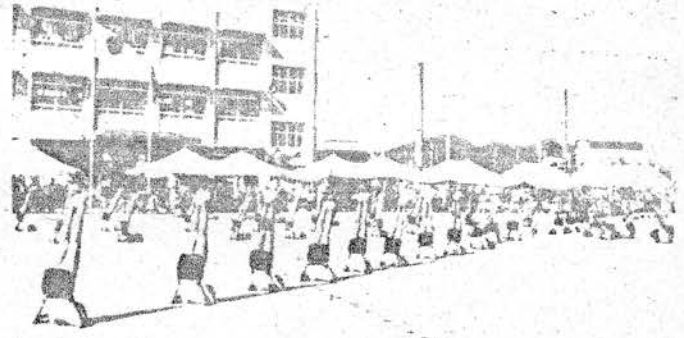
↑
学校水泳

プール清掃

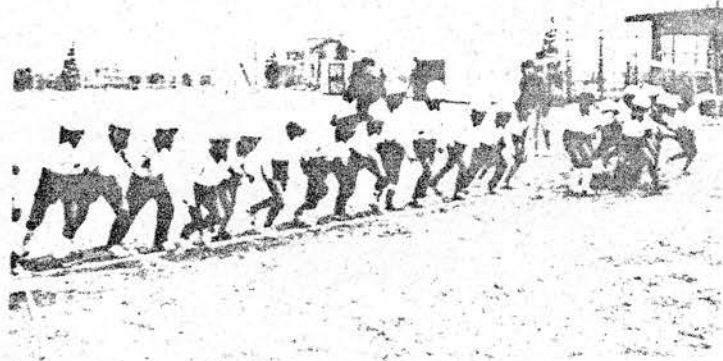




運動会



マラソン大会





3 おわりに

学習・生活面において、それぞれのめあてを明確に知らせることによって、意欲的に参加できるものも出てきている。しかし、自ら進んで実践しようとするには、まだ遠い。

問題点として、

- (1) 教育課程内での指導時間の確保
- (2) 指導組織の確立と実践活動の場の精選化

が上げられる。

今後は、実践活動の場をより精選し充実させることによって、児童自ら体を通して学びとり、そして知り、ひとりだちできるようにしていきたい。

研究主題

ゆとりの時間における町別バス学習の計画と実践

姫路市立高丘中学校 賀集日出美

1、はじめに

本校は昭和47年より、毎日7校時にはバス学習として学習バスや生活バスを学校で行って来た。また週に一度、バス学習の意義や目的を理解した上で、各町の集会場において町別バス学習(町バス)も行って来た。

本年度からは、ゆとりの時間における学校裁量の一環として6校時に町バスを行うことになった。

2、町バスのねらい

○位置づけ —— 生活バスを中心に学習バスを加味して行う。

学校教育、家庭教育、社会教育のそれぞれの機能が充分に発揮できるための総合的な支点、または広場とする。

○ねらい —— 学力の向上はもとより、生徒指導面から健全な人間関係を作っていくための一つとする。

1) 生活バスを中心に、集団の相互作用により人間関係を高め、個人及び集団の成長をねらう。

- ・ /年から3年までの学年をこえた班編成をすることにより各町の結びつきを深める。
- ・ 班の一人一人が同一の問題について真剣に考え、各自が責任をもって自分の意見を出し合い行動にうつす。

2) 父母の目を自分の子どもだけでなく、地域全般の生徒の上にそそがせる。

- ・ 各町父兄の町委員は、町バス実施運営の中核となる。
- ・ 父母は、輪番制により指導にあたる。

3) 地域の社会行事に参加することにより、地域社会との連携を進める。

- ・ 自分たちの町においてバス学習を行うことにより「自分たちのふるさと」という意識を養う。

4) 地域の青少年愛護育成協議会との連携を密にする。

3、本年度の年間計画ととりくみ

月	日	内容	備考	月	日	内容	備考
5	29	町バスについて	通学路確認 町バスの説明 班編成	10	30	レクリエーション	各町内で
6	19	学習について	各組の町バス 委員が課題を 作成する	11	6	理想や希望について	町バス委員課題作成、次回資料作成
7	10	生活バス 夏休の生活について	プリント作成	12	11	生活バス 討論形式	資料作成
10	2	町の計画 映画 講演等	町担、町委員 と相談	1	29	カルタ大会	各町で計画
				2	19	おわかれ会 準備	主として 1、2年で
	16	学習と 運動	町バス委員が 課題作成	3	5	おわかれ 会	町行事と協力 会

- ・ 昨年までの計画には少々無理があったので、本年度は昨年度の反省をもとに上表のような計画で行っている。
- ・ 6校時に行くため、生徒に真剣さが出て来た。
- ・ 出欠は翌日各学年へ各町担が連絡し、出席簿に記入する。
- ・ 他町での内容で参考になることがあれば紹介する。
- ・ 町委員（父母）と職員の町担任との連絡を密にする。
- ・ 父母が積極的に活動出来る内容を考える。

4、今後の問題点

- ・ 一つの町の生徒数が多く、集会場の収容能力を超えており、まとまって行動が出来にくい。（最も多い町の生徒数、136名）
- ・ 集会場がなく、学校を使用している町が3町ある。
- ・ 各町の当番の親の役割や生徒への指導方法。

研究主題

ゆとりの時間の計画と実践

提案者 姫路市立白鷺中学校 道上昌幸

1. はじめに

昭和56年度より実施されている中学校教育課程では、適当り3〜4時間従来の授業時間数より削減し、地域や学校の実態に応じて学校の創意工夫を生かした教育活動を行う「ゆとりの時間」としている。本校では、54年度・55年度を試行期間としてこの課題に取り組み、種々検討を加えてきた。54年度に試案を作成し実践に移したとき、第14回全国バス学習研究集会を持つ機会を得たので研究誌に発表しているが、今回は、過去2年間の試行をふまえて現状をまとめ今後の資料となる御批判を仰ぎたい。

2. 設定の理由

前述のように「ゆとりの時間」は、地域や学校の実態に応じて学校が創意工夫を生かして教育活動を行う時間である。本校は姫路市の中心部に位置し、高度な経済成長・多様な情報・人間疎外の渦中において、学歴偏重の傾向が強く、落ちこぼしと学習逃避による非行化の心配の多い地域である。したがって、生徒が「ゆとりの時間」を「遊びの時間」と受けとめるような内容・位置づけでは、地域の学校不信を助長するばかりでなく、乱塾傾向に拍車をかけ、生徒指導上の問題も解決できないことになる。「ゆとり」を先行させるのではなく、「充実した学校生活」をめざして、ゆとりと充実の対立を統合・止揚する中核的領域として「止揚の時間」「学年集会」「バスタイム」を設定した。

3. 実践の概要

(1) 止揚の時間

1 設定方針

ア. 教育課程の一領域として設定し、全校生を対象に全職員が援助にあたる。

- イ. 学年・学級の枠をはずして実施する。
- ウ. 教科学習の延長としてのコースを設定する。
- エ. 生徒個々にコースを選ばせ、課題を設定させる。(活動計画カード)
- オ. 個人学習と集団的学集の場と方法を設定し、自主的・創造的活動をすすめる。
- カ. /コース20名前後となるよう個々の生徒の能力・特性にあわせて調整する。
- キ. 基礎コースを設け、基礎的・基本的事項の定着をはかる。
- ク. コースの変更は年2回(前期・後期)とする。
- ケ. 活動記録をまとめ、自己評価、相互評価をさせ、期末に発表の機会を設ける。

2 実施方法

選択コースは全部で22コースを設定。社会ならば、郷土地誌、日本・世界の諸地域の自然・産業・観光を調べる地理コース、郷土史、城、古墳、人物史について研究する歴史コース。理科ならば、材料・器具は自分で準備して実験を行う物理コース、生物・気象コースと各教科ごとに3～4種類に分けている。今年度からは、新たに、手話の基礎を学ぶ「手話コース」を設けている。時間は毎週水曜日の5～6校時に実施している。

(2) バスタイム

従来の朝と帰りの短学活のあり方を見直し、連絡と注意の時間から生徒自身で運営することによって、望ましい人間関係や学級集団を育てることをねらいとして設定した。

1 朝バス

毎日、8時25分～8時40分の15分間行う。

その日の学習に必要な事項をとりあげることとし、一日の生活目標(個人・班及び学級)の設定と健康調査・連絡程度にとどめる。

2 バスタイム

昨年度までは「セブンタイム」と称していたが、今年度からは「バスタイム」と改称した。

毎週、火曜日、木曜日、金曜日の第6校時に実施し、月曜日、水曜日、土曜日は「生活バスの時間」として第6校時、第3校時(土曜日)終了後20分間実施する。

内容は、生徒が常に自分の行動を律し、望ましい学習集団としての学級をつくるための生活バスと一日の学習をフィードバックして基礎学力の定着をはかるための復習バスである。そのための記録・資料として個人バスノートを使用する。

(3) 学年集会

毎週土曜日の8時25分～8時55分の30分間実施する。

生徒指導・生活指導については、教師の一貫性が大切であるとよく言われる。それと同時に、毎日の学校生活の中で生徒自らが問題点をみつけ、自分の考えをもとにして解決し、行動できるようになることをねらいとしている。それぞれの学級で個々の問題をテーマにして話し合うだけでなく、学年の全生徒が一つの問題テーマについて、お互いに自分の意見・考えを発表し合い、話し合うことで自分達の個性を伸ばすことができる。そこで次の6項目を「話し合いのルールとしている。

ア. 全員がテーマについて自分の考えを発言しよう。

イ. 発言は司会者の許可を得てから全員に考えや意見を聞いてもらうために全体の方を向いて発言しよう。

ウ. 人の意見は発表者の方を向いて静かに聞こう。

エ. 相手の発言をけなしたり、笑ったりしないで公平な立場で評価しよう。

オ. 議決の際は自分の考え、意志で表決に加わろう。

カ. 決まったことは全員で実行に移そう。

4. 生徒の評価

(1) バスタイムに対する生徒の評価

良い点、役に立っている点

ア. 一日の反省がきちんとできる。(悪かった点がわかる)

イ. 翌日の目標をきめる手がかりになる。

ウ. 忘れものが少なくなった。

エ. 会の持ち方、進め方が身につく。

オ. クラスの意志統一ができる。

カ. 委員会・各係からの連絡が伝えやすい。

キ. 一つの問題をクラス全員で考える場になる。

悪い点、改めたらよい点

ア. 私語が多く、まじめに反省しない者がいる。

- イ. 話し合う課題に関心を示さない者がいる。
- ウ. クラスの問題点をもっと積極的に出したらよい。
- エ. 各係がもっとしっかり役割りを果たす。
- オ. 班での話し合いの仕方を考える。
- カ. 発表の仕方がよくない。声が小さい。
- キ. 個人の本当の意見をもっと出したらよい。

(2) 学年集会に対する生徒の評価

良い点, 役に立っている点

- ア. いろいろな問題点を出して考えようとする。
- イ. 発表をよくする。自主的に発表する班がある。
- ウ. 学年全体で同じ問題点を考えることができる。
- エ. 会の持ち方, 進め方を生徒がするので役に立つ。
- オ. 他の組の状態・意見がよくわかる。
- カ. クラスだけでは決められないことが決められる。
- キ. おおぜいの前で発表する力が身につく。

悪い点, 改めたらよい点

- ア. 話し合いのとききちんと話し合わないで、中途半端に終わることがある。
- イ. 決議したことの実行が不十分である。
- ウ. 出された問題点を自分のことではないと思っている者がいる。
- エ. 司会者の出す質問がわからないときがある。
- オ. 司会者の進め方の悪いときがある。(質問に対して違う答がでてでも進行している)
- カ. 個人の考えをまとめる時間がないので、班内の話し合いがしにくい。
- キ. 議題を前もって知らせてほしい。

5. おわりに

過去2年間本校が試行してきた「ゆとりの時間」についてその概要を述べましたが、生徒の評価にもありますように改善を必要とする点が多々あります。「バスタイム」と「学年集会」が所期の目的を達し、本校の教育目標である「望ましい人間関係と学級集団の育成」に役立ち、「充実した学校生活」が確立されるよう今後とも努力を重ねたいと思いますので、きたんのない御批判をお願いいたします。

新 教 育 課 程
障 害 児 教 育 の 部
同 和 教 育

ボランティア活動を通しての障害児理解の指導

愛知県 春日井市立勝川小学校 佐橋 修吾

1. はじめに

本校の特殊学級は今年度より情緒障害児学級を新設し、精神薄弱児学級とあわせて2学級となった。また、校内現職教育の1つの大きな柱として特殊教育が採り上げられた。

国際障害者年で世論が障害者に正しい理解をめぐしている時、6年担当の私達は、最高学年の児童達をどの様に導けばよいのだろう。私達はまず特殊学級の児童との触れ合いの場を設けることから、正しい障害児理解を養おうと図った。

2. ボランティア活動の目標と内容

(1) 目標

- ・ 障害児への正しい理解と思いやりを育てる。
- ・ 仲間意識を育て、最高学年としての責務を自覚させる。
- ・ 自分自身の能力を進んで伸ばそうとする態度を養う。

(2) 内容

- ・ 業前……登校したら特殊学級へ行き、うけもちの子の身辺処理を手伝う。運動場へ連れて行き、原学級に加える。(業前の後)特殊学級へ連れて行く。
- ・ 業間……身辺処理を手伝う。運動場の遊具や遊戯室などで一緒に(20分)に遊んだり、教室で絵や字をかいたりして遊ぶ。
- ・ 清掃……特殊学級の教室を清掃する。
- ・ 清掃後……身辺処理を手伝う。運動場・遊戯室・特殊学級の教室などで遊ぶ。

以上の活動を、2人1組となって決められた子の世話を1週間行う。1学級1か月でうけもちを交替する。6年は6学級あるので6組のみ1回で他は2回行う。

3. ボランティア活動の様子と児童の変化

(1) 活動する前……

アンケートや作文から、障害者に対する気持ちは私たちの予想をうわまわる程軽視したり偏見をもったりしたものであった。これは情緒障害の子を見て感じたのと、今までに修得した偏見によるのが大きいのだろう。ボランティアはこの情緒障害の子に対して行うものであるから、児童達は新しい企画に興味をもちながらも、不安な気持ち一杯であった。

(2)活動中……

はじめの2・3日は何をしてもよいのかわからない状態であった。話しかけても返答がなく、話してもおうむ返しである。小さくてかわいい子と何とか仲良くしようと、手をつないで外へ出たり話しかけたりする。しかし急に反して、逃げられ、たたかれ、急にだきつかれたりして戸惑うこともあった。

少し経験すると、児童達は個々の子の興味・性格を体得する。すべり台が好きとか、手のひらに字を書くとわかってくれるとか、スイッチに興味があるとかを触れ合いの中から発見するのである。この様になると、計画的な遊びをするようになる。また、悪いことをした時は注意する様にもなる。

児童達は、計画通りに行った時や、新しい能力を発見した時などとても喜び積極的に活動していた。

(3)活動後……

- ・特殊学級の児童を見ると、名を呼び話かけたりする。
- ・弟や妹、近所の子供達に親切になった。
- ・障害者に対して思いやりの気持ちがあらわれてきた。
- ・またボランティアをしたいと思っている。

4. グループでの話し合い

担当している子は違っても、困った事・心配な事そして喜びなどで共通な話題がある。授業後、その日の出来事などを発表し合い、個々の子との行動をノートに記録させた。この話し合いの中でお互いに励ましたり助言をしたりして、活動を高める作用があった。また、記録ノートの種み重ねは、次のグループへの有益な情報となった。

5. おわりに

教師の不安も児童達が楽しそうに行っている姿を見て解消した。特殊学級の父兄からとても感謝されている。今後は、自分自身を甘やかすことなく自己を鍛える意味を含めて指導して行こうと思う。

研究主題

障害の程度に応じた教育方法の工夫 —— ちえおくれの子とバス学習 ——

兵庫県姫路市立飾磨西中学校 梶原由紀子

1. はじめに

ちえおくれの子どもとバス学習 —— 手さぐりで始めた実践も今年で3年目になる。しかし、そのあしあとは微々たるもので、「果してこれでいいのか。」「もっとよい方法があるのではないか。」と迷いがつきない。

その上、今年度は、学校ぐるみでバス学習にとり組んでいた中学校より、新設された精薄学級の担任としてかわったばかりで、再びゼロからの出発である。

以下、これまでの取り組みの中から、精薄児教育におけるバス学習の意義、望ましい実践のあり方を考えてみたい。

2. 障害を克服し、たくましく生きぬく子どもの育成のために

学級目標

- (1) 障害に負けないたくましさ、社会に適応できる豊かな人間性を養う。
- (2) 障害の種類や特性に応じた適切な指導を行い、個々の能力を十分に伸ばす。
- (3) とともに助け合い、励まし合いながら明るい学級をつくる。

学級目標達成のためには、2つの学習の場が必要である。

それは、個々の生徒の障害や能力の程度に応じた特別指導を行う場と、そこで学んだことを実際にためしてみたり、社会へ出て生きていくために必要な社会ルール、知識などを学習し、身につけていくための交流の場である。

これらとは別に、側面から必ずとり組まねばならないこととして、健常児集団に、障害をもつ者に対する理解を深めさせるための指導、地域・社会に対す

る啓発活動などがあるが、ここでは詳しく述べるのをさげたい。

3. バズ学習の意義

健常児との交流をはかりながら、しばしばぶつかる問題として、障害児学級においては、伸び伸びと自己主張し、生き生きと明るくふるまう子どもが、健常児集団（交流の場）では、消極的で、時にはオドオドとしたり、あるいは非常に遠慮がちになってしまうことがある。これは教師の指導性（障害児学級、交流学級ともに）によることも多くあると思うが、それだけではなく、生徒側の問題として、自己表現のまずさ、小集団から大集団へ入ったときのとまどいや不慣れ、あるいは対話の浅さなどによることが多いと思われる。

そこで、精薄学級にバズ学習を取り入れることにより、まず今まで以上に子どもが主体的に活動し、小集団の中で正しく自己実現のできる子になり、話し方、聞き方の訓練を進めながら相互にかかわり合い、認め合い、共に高まっていくことをねらった。そうすることが、単に障害児学級としての高まりばかりでなく、交流がより効果的に進められる素地づくりにつながるとわかってきた。

4. ねらい

- (1) 学習意欲をもたせ、生き生きと学習にとりくませる。
- (2) 毎日の生活をふり返り、「少しでもよくなろう」「あすはこうしてみよう」という前向きな生活態度を身につけさせる。
- (3) 他人を認め、励まし合いながら、個人も集団も、共に高まっていく生徒を育てる。

5. 具体的な方法

(1) 生活バズ

- 生活ノート（資料参照）を活用して、一日の反省を行い、記録する。
- 話し合いは、日番がリーダーになって進める。
- 一日の生活反省（学習、そうじ、準備）の他に、健康しらべ、翌日の計

画、家庭への連絡などを行う。

- ・ 個人で反省したり、集団で話し合っ、互いに評価する。

(2) 作業パス

- ・ 日番がリーダーになる。
- ・ 作業学習を始める前、終了前に5分ずつあてる。
- ・ 学習のねらいをはっきりさせ、生徒に目的意識をもたせるため、個人目標と全体目標を明記する。
- ・ 努力を認め、意欲を起こすような、がんばり表をつくる。

<例>

<u>はじめに</u>	<u>おわりに</u>
<ul style="list-style-type: none">・ 今からこの時間の目標を決めます。まず全体目標を考えてください。 ○○さん・・ 次に個人目標を考えてタイルに書いてください。・ ○○さんから発表してください。・ それでは目標を守ってがんばりましょう。	<ul style="list-style-type: none">・ 今日の作業の反省をします。全体目標は「・・・」でしたが、それについて意見を出してください。・ 個人目標を○○さんから発表してください。 目標は・・・でしたが.....・ 2つの目標が守れましたか。・ 守れた人だけががんばり表に色をぬってください。これで終わります。

6. パズをとり入れてから

(1) 生徒の実態 (学級要覧参照)

(2) 生活の中で

4月より半年余りの生活の中では、とりたてて「こんなによくなった。」と言うことはまだできない。

ようやく「一日の反省」が、どの子がリーダーの場合も、決められたパターンで進められるようになったこと。小学校のころより、「このクラスの男連中は何もできないでー」とことあるごとに男子をバカにしていた女子2人が、そ

画、家庭への連絡などを行う。

- ・ 個人で反省したり、集団で話し合っ、互いに評価する。

(2) 作業バス

- ・ 日番がリーダーになる。
- ・ 作業学習を始める前、終了前に5分ずつあてる。
- ・ 学習のねらいをはっきりさせ、生徒に目的意識をもたせるため、個人目標と全体目標を明記する。
- ・ 努力を認め、意欲を起こすような、がんばり表をつくる。

<例>

<u>はじめに</u>	<u>おわりに</u>
<ul style="list-style-type: none">・ 今からこの時間の目標を決めます。まず全体目標を考えてください。 ○○さん・・ 次に個人目標を考えてタイルに書いてください。・ ○○さんから発表してください。・ それでは目標を守ってがんばりましょう。	<ul style="list-style-type: none">・ 今日の作業の反省をします。全体目標は「・・・」でしたが、それについて意見を出してください。・ 個人目標を○○さんから発表してください。 目標は・・・でしたが.....・ 2つの目標が守れましたか。・ 守れた人だけががんばり表に色をぬってください。これでおわります。

6. バスをとり入れてから

(1) 生徒の実態 (学級要覧参照)

(2) 生活の中で

4月より半年余りの生活の中では、とりたてて「こんなによくなった。」と言うことはまだできない。

ようやく「一日の反省」が、どの子がリーダーの場合も、決められたパターンで進められるようになったこと。小学校のころより、「このクラスの男連中は何もできないでー」とことあるごとに男子をバカにしていた女子2人が、そ

のようなことを言わなくなったこと。交流学級へ行くことが定着し、少しずつ積極性がでてきたこと—— などである。

D子の日記より

友だちがたくさんふえました。
おべんとうをみんなと食べてい
ます。とてもたのしいです。

交流学級の女子のノートより

私はこのごろ、だいぶD子さんと話をする
ようになりました。ほかの人も話をよく
しています。D子さん自身も積極的に話を
しようとしています。

(3) 作業学習

一方的に教師がおしつけていた作業を、5月半ばから、がんばり表をつくり、課題を生徒の実態に合わせて明確にした。「根気がない」「一つのことに集中できずにすぐほかの事に気がうつる」という生徒であったが、「これだけはこの時間にしてしまわねば—」という、生徒自身が決めたはっきりした目的のため、2時間でも集中できる日まであったりして、担任の方が驚いている。

子どもたちの単純さと、素直さをうまく利用して、励まし合い、競い合いながら、成長のあとがみられたと思う。

7. 今後の課題

子ども同志が育ち合うためには、子ども同志が関係し合い、子ども達の共同的な活動が展開されていかなければならない。

しかしながら、ちえおくれという障害のため、どうしても抽象的思考、系統的思考は劣り、ものごとを深く考えることのできにくい子ども達である。

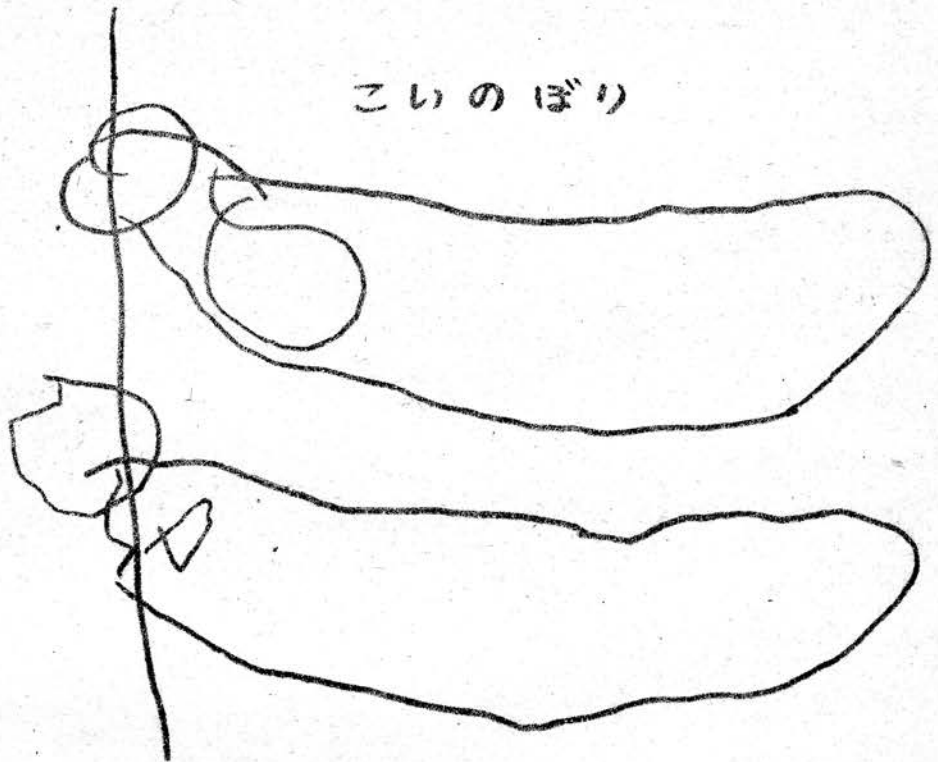
そのような実態の上になら、多様な障害をもつ子ども集団の中で、程度、特性に応じたバズ学習をどのようにおし進めていくのがよいのだろうか。

障害の程度に応じた

教育方法の工夫

—仲間とともに育つ 障害教育—

こいのぼり



姫路市立英賀保小学校

竹上道邦

はじめに

『人間は、集団的な存在である』と、よく言われる。

他の哺乳動物が、親の胎内から、ほとんど完成した存在として生まれる。(ゆえに 後に変化しにくい。つまり可塑性がない。) のとちがって、人間は不完全な存在として生まれてくる。それゆえに、人間は人間らしくなるために生きていると言ってよい。自然、他の人間(集団)とのかかかかの中、人間として完成していくのである。まわりの人々の愛につつまれた子育て、つまり、現在では学校という集団的教育の力によって、人間らしくなっていくのである。

障害児として、その例外ではない。障害児のようにハンディを持った子どもこそ、より豊かに集団を保障していかなければならない。

日本の障害児教育の進歩の成果は、そのことを強くしめしている。

障害児には、健常児とちがった特別な差違の仕方があり、保護指導、個別指導の中で教育するといった考え方は少しずつなくなり、交流教育、統合教育、共同教育などの取り組みとして、障害児に豊かな集団を保障していこうとする実践が広がりつつある。

このレポートが 何らかの問題提起になれば幸いです。

I 児童の実態を日々とらえなおす。

教育基本法第 条には『すべての児童は、その能力と条件に応じて、等しく教育を受ける権利を有する。』とうたっている。

それぞれの児童は、さまざまな条件と能力を背負って、学校に入ってくる。教育基本法の実現のためには、学校に子どもをおしこめていくのではなく、児童の差違の課題から、よりよい学校づくり、学校づくりをしていきたいと思う。そのためには、日々変化する子どもの姿を、集団的にとらえることは、まわ

めと愛慕もある。

I男（六年生）

情緒不安定で集団の中に入りにくい。

自我が強く、自分勝手。

家庭が不安定。

運動能力はとこもすぐれている。

敬、言語 3年生程度。

M子（三年生）

とこもめんどうみがよく 世話好き。

家庭環境による要因で 友だちと遊ばないししゃべらない。

敬、言語は 3、4才程度。

学級の中では とこもよくしゃべりだした。

T男（一年生）

股関節脱臼によって 1才~4才まで2回にわたって入院生活。

片足が不自由。

敬や言語に対する興味がみえはじめた。

だれとでもよくしゃべることができるよう。

O子（一年生）

自閉的傾向が強い。

やっと 友だちの言うことを聞きだした。

敬、言語の面のおくれが 出はじめた。

子どもたちを、日々観察していると、今までの実態を分析してとらえていたことを、あらためさせられることが多い。

O子の場合

自閉的傾向ということと 一見、自分勝手に走りまわったり、しゃべるとい

ことが多く、自分以外の人の言葉なんて、聞いていないように見える。

しかし、学級に入ってきた後から、『先生 ごみすてしょうか』と言ってゴミばこを持って走っていき、そうじ と言えば ぞうきんをどりに走ったり、〇児には 〇児なりの考えがあり 外界をどりこんでいることが、はっきりわかった。

児童の実態をつかむうえで「父母に学ぶことは とても大切である。〇児の変化も 父母との協力の中で 見えてきたものである。

父母と子どもの変化をみまもれる関係をつくりたい。

II 学ぶ力、生きる力を育てる学級づくり。

障害児の発達を保障する基礎的集団として、障害児学級がある。

(1) 何でも話せる学級づくり。

子どもたちが 心を開き 心を安定させ、何でも言える、友と話せる学級を作ることは、障害を背おいて 抑圧される面が多い子どもたちにとって 特に重要である。また 後の中学校 社会へと続く集団への力かかしの土台となると考えられる。

昨年まで 通常児学級ではほとんどしゃべらなかったM子 障害児学級に入ってから、よく話せるようになり 文字学習も進みだした。

(2) 学ぶ力、生きる力を育てる生活単元学習。

私たちの学級では ① 教科学習の土台づくり。

② 交流を行なう力をたげやす。

③ 生活を自らでつくる。というねらいを持って。

4人全員のそろそろ生活単元学習を1つの重要な柱としている。

障害のちがいをこえて 協力して 造る 学ぶ、楽しむ活動を通して、集団を学び、人間を学んでいくと考えられる。

⑩ 自分たちの力で物を作り出す活動

⑪ 自分の体のしくみ、たいせつさを学ぶ活動

⑫ 自然にはたらきかけたり、生活を工夫している人々の姿を知る活動

⑬ 植物、動物の生きている姿をとおして、自然のすばらしさを学ぶ活動

たとえば

・まつりをしよう

・野菜を作ろう

・七夕まつりをしよう

・うんこおしっこ

・月見をしよう などである。

このような実践を通して、歯みがきができるようになったO子。自分でせんたくまじしたり、ふるふ行って、着けつにするM子。大声でまつりのおどりをみんなに見せるT男などの変化が見えはじめた。

その中で

・目標カードえらび

毎日、一つ目標カードをえらんで目標をもたせる。わからなくても好きなのをとらせ、はげましてやる。

・二人グループ(?)で活動させる。

を試みているが、おらいは、はっきりに持ていない。

Ⅲ 仲間とともに育つよるこひあるれる児童教育

そうじ、給食と図工、音楽、体育(自分でやろうと思えば、できる教科)を中心に、健全児童学級で生活する。

(1) それぞれの交流学級の学級集団づくりの中に入れていく。当番や班づくりの中にも参加する。

そこで、仲間と協力して取り組むきびしさも学ばせる。

それぞれの学級で 障害児の生かされる教科学習を工夫する。

国語教材 『おおきなかぶ』 『おむすびころりん』 は学習に入る。

(2) 障害児学級単組と、交流学級、健全児学級単組との交流をはかる。

2学期に入ってから 『一人で交流に来ても 生々としている場面が少なく、しゃべるようにかかわれていない』 という反省もあり 研究をかさねて、取り組みはじめた。

障害児学級担任と健全児学級担任のそれぞれの学級づくりとあわせて、綿密な計画のもとに 共に学び合う活動に取り組む。

たとえば

まつり (児童を 招待する

(いっしょにまつり)をし 舞台をがつく 金魚つりをする。

このような活動を通して 障害児は 自らの力に自信をもち、健全児は、いっしょうけんめい学ぶ障害児に共感して ともに育っていく。

IV おわりに

以上のべて来たことが 現在の英賀保小学校の障害児教育の到達である。

それは、障害児教育部会の中で点検され 討議され、築きあげてきたものである。意義もすっかりおさえられなく とにかく交流させていた時期、教科指導のみに重点をおいていた時期 など そのつど 私たちは、子どもの変化をしっかりとみつけて、子どもを中心にすえて 障害児教育のあり方をさぐってきた。

私は 教師の集団としての力を強く感じ 子どもたちのすこやかな成長を保障するため 教職員の集団としての力を認めなければ と 強く感じる。

研究主題 同和教育の深化・充実

一人ひとりを見つめる 地区教育事業の展開をめざして

提案者 姫路市立林田中学校 山口 明彦

1 はじめに

同和問題の解決のために、同和地区の生徒たちの学力を高め、将来の生活への意欲づけを急ぐことは、教育にとって急務であり、かつ重要な課題である。本校における地区教育事業の歴史はすでに12年をかぞえる。特に学力の向上策については、その間生徒たちに時々の最高の教育方法・教育内容をもって当たることが、同和教育のあり方であると信じて、その工夫・改善の努力をしてきた。

地区教育事業の学習のあり方について、本校において「バズ学習方式」を導入したのもこのためである。目的達成にはまだまだ程遠いが、その実践の一端を出し、諸賢の御指導を願うものである。

2 主題設定の理由

本校の同和教育目標の柱にもしている「地区教育事業の充実」について、一斉形式を改め、班単位の「バズ学習」を通じて人間関係を正し、共に学力の向上を期そうとする教育方法は、早くから試みられていた。

しかし、一般的風潮の中の生徒たちの生活といえば、主体性の感じられない、消極的な行動が目立ち、ややもすると無目的な活動に流されていた。そこで、再びこの原因の追求と活力の導入の必要から、「バズ学習」のやり方にも見直しを加え、よりきめ細かな手だてをさぐっていった。

3 研究内容

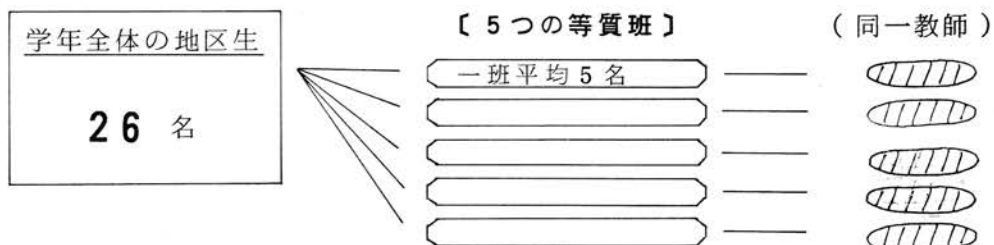
(1) 目標

- 基礎学力を高め、お互いに協力し、自主的・主体的に学習に取り組む。
- 基本的生活習慣を確立する。
- 部落差別の実態を知り、解放への実践力を養う。

(2) 実践内容

全体の 22.7 % を占める同和地区生徒のほぼ全員の者が、進学を希望するが、長い間の差別の結果として、生活の乱れ・低位学力・主体的な学習姿勢の欠如など、さまざまな問題をかかえている。

これらを打破すべく、週 2 回の地区教育事業において、一人の教師が、比較的長い期間、固定した少人数の生徒にかかわり、一人ひとりの生徒の特質や問題点をよく把握し、また、生徒相互の信頼関係も培いながら、教師と生徒、生徒と生徒における人間の接触交流を図りながらの実践をめざした。



- ◇ 一回の地区教育事業に、5 人の教師が同時に参加し、各々が、一班平均 5 名の生徒の基本的な生活習慣を中心に、学習面のすべてにかかわる。
- ◇ 解放講座では、学年全体が集まる場を設け、仲間意識を育てるため、全員で共通の課題を持たせ、取り組ませる。

(3) 班活動の実例 (男子 3 名・女子 2 名)

- この班の構成員

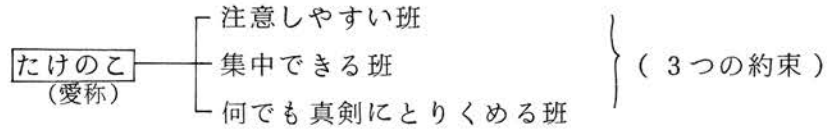
- A (男) : 明朗ではきはきしており、正義感も強い。学習面も上位クラス
- B (男) : 少し自己中心的なところがあるが、全体的には問題はない。
学習面・中位クラス
- C (男) : きまじめで、意欲的なところを見せるが、基礎学力が身につけておらず
中の下位クラス
- D (男) : 何事にも消極的でおとなしい。少し体も弱く、学習面での意欲もあまり
感じられず中の下位クラス
- E (男) : いつもソワソワ・キョロキョロと落ち着きがなく集中力に欠ける。基礎
学力の不足が目立ち下位クラス

(班活動の実例)

① 参加ルートを確認する

地区教育事業には、お互いに誘い合って参加し、互いの連帯感を高めるとともに、無断に欠席することがないようにしよう。

② 班のあり方を話し合う



班活動が停滞ぎみになったときも「活動の柱」として約束しあう。

③ 学習面での「重点目標」をきめる

話し合いの中で、全員が理科を苦手な教科と考えていることがわかり、毎回、理科の用意をし、たとえ短時間ずつでも続けて実施する。

そして、「質問バズ」をくり返すことに決める。

即ち、日頃学校で、できる者もできない者も、一致協力して、ひとつの目標に向けて努力していく。

例その1 後半の重点目標に「漢字道場」を新設したが、A君は、絶えずゴソゴソと落ち着きのないE子を大声で注意しながらも、読みの誤りやおかしな筆順を直してやっている。またB君は、A君を常に意識し、負けまいと努力している。D子は、女子どおしで、A君にしかられてションボリしているE子をはげましてくれる。
E子はその後、普通授業の中でも、国語の新出漢字の練習等は、他のだれができていなくても、きちんとノートに整理できていることが多く見られた。

毎回の班活動は、十分ではないが、多少のやる気と自主的な学習へのとりくみが、少し見られたように思える。

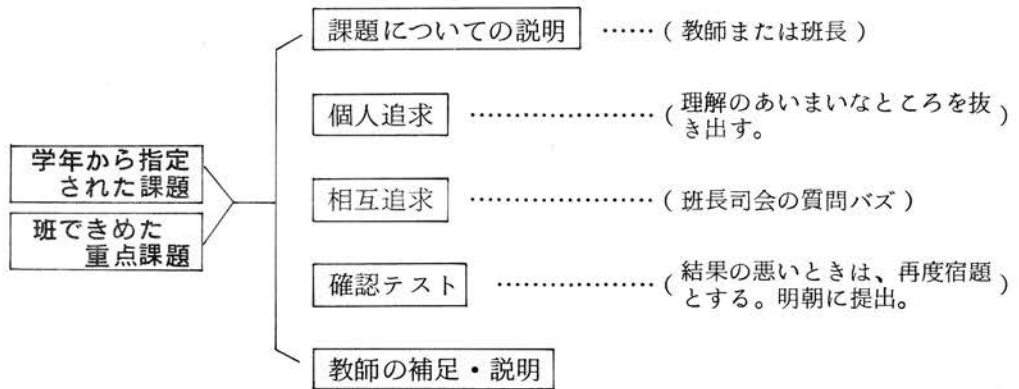
④ 班日誌をつける

連絡網の順につけ、内容は、教科の疑問点・今日の反省・班員への意見とする。そして、班員の「相互理解」の助けとする。

例その2

見事一回も休んでいない。そして一回もおくれていない。だけどよくギリギリで来た。六年生までは、勝手に理由をつくって、よくおくれていて、それによくズル休みをした。ズル休みの日は先生から電話がかかってこないかなあと心配だった。だけど中一は、班でするから、まちがってもべつに気にせずに、そして何でもできる。だけど勉強道具が重い。しんどい時は、ちょっといつもよりおそく行くけどギリギリおくれなくて行く。これからも同じで行く。

⑤ 自主的な活動をもとめて



これは、ややもすれば教師依存型になりやすい地区教育事業の展開を、すこしでもひとりひとりの個人思考を深め、生徒の自主的な活動を取り入れたものにと願ってはじめてた。

(4) バズ学習のマンネリ化をふせぐために

- ① ビデオテープ(若者たちの朝)を見せたあと、**討論会**を開く。
 - ・ さまざまな意見がいくつも出され、まとめるのに時間を費したが、活気がもてた。
- ② 他校の地区生との**交流学习会**の場とする。
 - ・ いつも同じ仲間ばかりの活動の中に、とまどいも生まれたが、お互いの情報交換がなされるなかでの発見も大きかった。がそれ以上に、何よりも他校の同じ立場の中学生同志のために、自分達の学習のようすや地域の様子を紹介やコメント作りが、一層やる気をふるい立たせたようである。

③ **地域の中に学ぶ** 資料づくり

- ・ 「今、自分たちで問題解決への力を高める。」の一環として、班単位で取り組み、地域の地図・地区の産業について、また地区の環境・老人の話などをまとめるなかで、生徒の実践力を高めていった。

④ 月一回の **授業参観と父母懇談会**

- ・ 自分たちの親が、夜にもかかわらず参観してくれることは、生徒たちにとって無言の力強い励ましとなり、父母と教師のひざづめの話し合いでは、学習面のみでなく、この子をどうするのか、どんな大人にさせたいのかを話し合った。

4 今後の課題

本年度は、同対法延長の最終年度ということもあって、内外共に地区教育事業の真価も問われる年でもある。しかし、この子らをして更に強く同和問題完全解消のために、主体者としての力量と精神をそなえきらせるまでの道はけわしい。つくづく教師としての力の貧弱さを感じながらも、一つ一つ反省を加え、目的に近づく努力をしたい。

その一つとして、今後も地区教育事業で育った卒業生たちを一人でも多く、後輩の指導のために参加してくる態勢を組むことも大切であると考えている。

5 問題提起

- (1) まだまだ教師依存の傾向がみられるなかで、個人思考を深め、生徒の自主的な活動を促す問題の与え方とは、どうあるべきか。
- (2) 地区教育事業での卒業生の活動の場をいかに設定していけばよいか。
- (3) 小規模校として、進度が進むほど専門知識も重視され、教科外担当では、かわりをどうすればよいか。

研究主題

バス学習と同和教育の統合をめざして

提案者 広島県豊高校区教育推進協議会

1 はじめに(地域背景)

広島県豊田郡豊町・豊浜町は、瀬戸内海・芸予諸島に属し県境に位置する島島から成っている。

瀬戸内海航路の要衝として栄えた歴史も有しており、いわゆる広島みかんの主産地としても栄えたが、みかん産業の不振から過疎化の波に洗われている。

一方、いわゆる島差別の中で、教育疎外をはじめさまざまな疎外の歴史を持っていて、差別の本質である分裂の状況はいまも克服できていない。

そうした状況下において、島内の被差別部落はまさにしずめの役割を果たされてきたのである。

1969年豊町に部落解放同盟の組織され、71年には豊浜町にも誕生し、地域の解放運動が盛り上がり、一定の前進がみられているのが現状である。

2. 設定の理由

標記のテーマは、前述の地域に「地域の教育課題をふまえた教育内容の創造」をテーマにして、両町に所在する幼・小・中・高の全教職員が一貫教育態勢づくりを当面の目標に結集し、1978年4月広島県豊高校区教育推進協議会(略称豊高校区推進協)が組織された道すじに、必然的に明らかになければならないテーマであった。

すなわち、解放運動と連動して両町の同和教育運動は高まり、幼・小・中の教職員を中心に定期的な研究が推進されていたことと、一方では塩田芳久先

生の直接の御指導により、地域バスを核とした豊中中学校の十数年に及ぶ実践と、続いて豊中中学校の実践、当時分校であった豊高校へと広がっていった、中高のバス学習を中心とした実践交流とが、平行して地域の教育を推進していったからであった。

その両者が道路保障の観点から、地域の教育課題をみつめた時、当然の帰結として組織が生まれたのであった。

つまり、同和教育とバス学習による組織土壌という経緯がある。

3. 研究の経過

上記の流れの中で、結成へのきっかけを作ってくれたのは、第13回全国バス学習研究集会の開催であった。

この研究集会において、私たちの今後の課題として、バス学習と同和教育の統合を打ち出したのであった。

しかし、今日の同和教育は、被差別部落の差別実態に学ぶという原点は明確であっても、きわめて包括的に教育運動であって、その展望は別々に直っており、現状認識や推進のあり方において、同一目標に向かっているはずにもかかわらず、土まじまじ背景から対立さえ呼び起している。

この現状の中で、私たちの同和教育のとらえ方にも、かぎりの差異があり、自己の差別体質ともかかわって、認識の乖まりが今一歩という段階である。

また、教育課題を科学的に明らかにするため、塩田芳久先生をはじめ研究者の協力を得て、5ヶ年計画で全児童生徒を対象に、知能検査、標準学力検査、学習適応性検査、学級構造調査の4種のバッテリーによる実態調査を行なって3ヶ年を経過した。

今、やっとその調査結果から、豊高校区推進協共通の実践目標が設定され、具体的な取り組みが始まった段階である。

したがって、バス学習の具体的な実践もこれからというところである。

4. 今日の段階

豊高校区推進協'81年度実践目標は次の通りである。

〈共に生きる集団づくりを〉 〈教育活動の全領域で言語認識を〉

この両者の目標を統合的にとらえて実践具体案を発達段階別に各校に提示し、実践に移したところである。

この実践目標は、実態調査結果を、同和教育の観点にとらえると同時に、バス学習の理念にとらえているつもりである。

はじめに述べたように、被差別の状況下にある地域で育つ子どもたちは、地域の状況から無関係でありうるはずがなく、望ましい人間関係の甘か甘か育たない現実がある。

そのことの反映としての学級集団を、どう変革させるかである。

現時点では、そうした子どもたちを望ましい方向へと変革させる指導者として、援助者としての教師自身はどうであるのかという、教師の主体に問いかけている段階といえる。

子どもたちと教師たちが共に生きるためには、まず教師たちが共に生きる集団にならなければならぬという発想である。

バス学習の基本的仮定である、人間関係は教育の基盤であるの具現化でもある。

5. 統合の方向

私たちは、同和教育の本質を次のようにとらえている。

同和教育は、まぎれもなく、被差別部落を過存助長する教育活動、すなわち差別教育が学校教育においてなされていくという事実の告発が原点である。

これは、本質的には過去の学校教育の否定である。

そうした差別教育が教師の主観的意図を越えて厳存してきた事実は、教育が子どもたちの可能性の限界まで伸ばすことにあるとしながらも、一刃で切り捨

てということには代表される。競争論理に貫かれていたことを示している。

もちろん、今日の社会が競争社会であるということと照応しているのであるが、そうであるが故に、被差別部落の完全解放に専与し、民主社会を創り出すことを育てばいい。甘い。

それは本質的に、競争論理の否定。すなわち徹底した協同論理による学校教育が貫かばいい。甘い。

このことは、バズ学習において、学業態度的目標を設定し、認知的目標との時差をめざすという学習活動の展開法が示している。その態度目標の内容の問題があるととらえている。

可能な限り、学校教育を協同事態におくことである。

そのような基本的な方向で考えてみる時、今私たちはフィードバック機能である評価活動の改善が急務であるととらえている。

異様に認知的な側面だけが強調される形になっている、現在の評価システムの改善である。

同和教育において、子どもの変革を求めるためには、彼らの親たちの変革を求めることがやはり必須条件であることはいうまでもない。

私たちが子どもを通じて、親たちへ、地域へと広く働きかけは、今日の競争社会を支えている評価観の変革としての、学校教育における評価システムの改善の理解を求めるところから始めるべきであろうと考えている。

今日の状況は、そうした変革が一朝一夕に可能な状況ではないことはいうまでもない。

そこで、一定のコンセンサスをうる営みは、私たち自身の教師としての専門性の高め、だれもが納得しうる実践を積み上げるプロセスにあると考えている。やはり、最後は教師の主体にかかってくることにきめている。